

らで貌さへ形ちさへ。氣さへ若狭の局と名にころ立れ人知らぬ。下の歎きに消かへる雪見の亭に立出て。淺茅を近く招き寄せ。詞 扱々久しや懐しや。ほのかに聞し和女にも判官殿の情けにて。朝比奈を殿御に持待かるゝと沙汰せしが。思ひの外なり形ち氣遣しやとの給へば。淺茅は暫し涙ぐみ問るゝさへも耻かしき。あゝに果敢なき身の上を。哀れと思し給へかし勤めを致す折からに。重保様と云ひ替す。深き中をばひき裂れ。思ひも寄らぬ和田殿へ。嫁入て往たる其晩は恐ろしいやら。悲しいやら。現つ心もなかりしに。詞 武道を磨く朝比奈殿事の道理を聞分て。重保様とお出合に變らぬ中の縁結び。御取持に預りしを父御に劣らぬ堅意氣で。悪逆無道の判官が娘とあれば添はれぬと。顧みもなき御返事故然らば親子の縁切つて。其上添ふて給れと詞をつめて別れしが。詞 工の多き判官に逢ふて云ふのも氣味恐く。傳を求めて頼もふもに前ならではあき故に。今日物語を幸いに。道に待受け候ふと惜くとして語りける。扱なふ左様な事ぞと夢聊かも知らざりし。尤愛しや苦勞しやつたの。遠慮がましい今迄になせ談合ひし給はぬ。氣強ふ思や親と子の。縁が切りたか切らしてやろ。それまでもない自らが思案一つで添してやろ。詞 昔しは勤めの兄弟分今改めて眞實の姉を持たと思ふてゐや。嫁入も御

からさせませさ。化粧田に卅町一幡君の伯母上と。重保妻に遣はすと。使を以て云えせたら秩父殿で御座らふが。否じやと云ふて御らふじやれ。ア、慮外ながらと時にあふ人の詞を頼もしき淺茅ハハツト手を合せ。詞 そんならお前は姉様か。此若君ハ甥子かと髪を掻撫抱き上げ。今は心も落付て庭のかゝり物數奇。谷七郷を手の下に見越の堀の馬場先を。引つれ来る大名は何十人と知らね共。色の黒いは朝比奈殿御器量よしは重保様。詞 不思議や今朝の大黒舞本田が肩に打かゝり。此處へ來ますと云ければ。ハツト計に驚きて若狭も立て見れるせば。無慘や花垣伊織の介顔も手足も疵つきて。身に添ふ物も切れくにて。諸大名に引添ふて評定一所にこそ入にける。コハろも何の詮議ぞと納め兼ねたる胸騒ぎ。ナフ姥もれじや誰も來い今朝の様子は知る通り。大黒舞も浪人とや打たゝかれたる口惜さに。人を過めし物ならん。詞 賤しき形と云ながら一幡君へ一度でも。に目見へ致せし者なれば。相手はどなたで有ふとも。品によつたら自らが肩をすまひ物でもない。次の間へ往て聞てれじや。ヤレゆけくとせり立て詞の強く心には。如何なる罪を仕出して愛目に逢せ給ふぞと。立て見居て見らうくと。案じ入たる氣色なり。腰元二人立歸り。詞 大黒舞は何者やら秩父殿を一番に。諸大名衆の最負して相手は

比企の判官様。子細は未だ知れませぬ。ヤレ取わけて氣遣ひな。またゆけくと追ひ遣りて胸に手を置思案して。最早大事に成て来た確な事を見ぬうち。秩父が取持ものでなし。腹立紛れに兄様の。如何なる事かの給ひて。我愛名をや流さんと。忍び涙ぞ道理成。乳人の松代達たしく走り歸りて云様。いや早興の醒たこと。朝比奈殿へお嫁入の判官様の娘御は。京六條の遊女じやと和田殿からはの給ふを。判官様は眞實の娘と有の争ひを。秩父殿が中へ出て一ツ二ツの給ふと。判官様が轉りと負け。親でない子でないとの誓言のうへにて。朝比奈殿の内儀が秩父殿へ貫はれて。此一婿はさらりと濟み跡が前前の詮議じやげな。聞て參ると走り行淺茅の心いそくと姉様最早御苦勞に。成さるゝ事は入ませぬ。重保様の女房と私には札が附いたれど。お前の事が氣遣ひと案じ顔まを優しけれ。若狹はハット泣出し。ナフ浦山しの淺茅やな。扱淺間しの身の上や實に世の中は飛鳥川。變る淵瀬と聞しかと二人が中を今の間に。早く歎きと悦びの。替る物と知らざりし。何を隠さん最前の大黒舞まう自らが。誠の兄にてゆぞや。傾城の身の習ひとて賤しき兄を持たるが。差て耻にはあらねども判官の娘こそ。君の寵愛淺からず一幡君を儲しとは。日本六十六國には知らぬ者としてよもあらじ。諸國の大名小名

に若狹の局と侍づかれ。榮花を見るは君の恩。元の根ざしは判官の。悪にもあれ善にもあれ。須彌より高き恩ぞかし。去とて誠の親兄を仇に思ふに無けれども。一幡君の一門に大黒舞と云われん。瑕ある玉の如くにて。親子の光りは消失せん。親子の光り失せたらば判官一家の滅ぼされん。逆心募る天罰にて外の口より知るゝとも。恩をば仇で報すべき道理は更に無きものぞ。今まう情無く過ぐるとも。若君御代を嗣給は。心の儘に親兄へ御孝行やさんと。思ふ心の一筋を神あらぬ身は御存じなく。見捨て歸る恨みと云ひ。打ち敵かれたる無念さに。訴人に出させ給ふこと恨みと更に思はれず。正直正路な四五右衛門我身の上と知らずして。扱々悪くい妹めじや將來か能あるまいと。云ひし胸に應へしが早く報ひの來りしと。思ひ出すさへ淺間しと。聲を上てぞ泣給ふ。淺茅も兎斯ふ涙のみ。應答もやらで居内に。二人の腰元立ち戻り胸押撫て息をつぎ。御身の上を唯今が。大黒舞と判官殿角め要めの受答。秩父殿の仰せには。お前が遊女に極まらば。賤しき腹に若君は。よもや胎らせ給ふまい。取替子でも致したか。負けものかの二ツの内。一幡君も門前より大黒舞の面を着せ。追ひ拂はんと御評定。若も左様に成たらば。こち等は何と成べきと縋り付てぞ泣出す。若狹の局聲を上げ。聞しにも似

ぬ重忠が今の詞の愚かやな。天下の鑑と云はるれど流石の吾妻戎にて。武道は知れど文は無く花の有れども實を結ぶ。辨まへさへもなかるらん。后高位の御身にも。徒ら有し噂もあり婦女の腹から大臣の。生れ給ひし例しもあり。傾城遊女の胎内に大將の子が胎らぬとは。何んの書物で見出し。泥の中より生ひ出る。蓮より猶美しくしき花の顔面白露の。玉よりげなる若君を追失なはんと云ふ事。忠義か扱は逆心か。源氏を守りの御神はなと余所に見て在ます。頼家卿の御運さへ。未になつたか悲やと。咽返りくわつと叫ばせ給ひける。涙の中に若君を膝元近く引寄て。果報拙なくましくて賤しき母が腹よりも。生れ給ふか淺間しや稚く渡り給ふとも。只今母が云ふ事を篤まうと能ふ聞給へ。大將の子と云ふものへ死ぬべき時に死なざれば。人の笑ひを受るぞや。母が詞を懸たらば此守り刀にて咽の邊りを突貫ぬき。頼家卿は胤と有る証しを見せて母が身の。耻辱を雪ぎ給はれと云含めれば。一番君わるひれ給ふ氣色なく。腹十文字に切ふかと莞爾と笑める稚顔。見るに目も暮心消へ抱き付てぞ歎かる。淺茅暫しと押しめ。ア、道理や去ながら。二度の便りに跡先の詞の違ふ所あり。傾城の名も假親も變らぬ姉と妹を。我は秩父の嫁にしてれ前を若君諸共に。追ひ失なはん様はなし。浮も沈むも同じ

世に今より誠の兄弟ぞ。甥子と契り初めたる詞はいかで違ふべき。篤と様子を聞届死で叶はぬ道あらば。跡にはなきか残るべき三ツ途の川を諸共に。手を引てこそ渡らめと諫め合ふころ優しけれ。若狭の局類を上げなふ嬉しの人の詞や。七度結びて姉と成六度契りて妹と成。それは誠の兄弟よ是は今日しも假初に。云ひ交したる契りどて一所と迄にの給ふは。先の世よりの約束と思ひ遣るさへ睦ましき。眞實覺悟極めてか。ア、愚か成仰せやな。武士の性根の時に依り味方が敵に裏返る。例しはあれど傾城の云ひ替したる心底は。違へぬと云手本は末世の人に見せぬ物。急せ給ふ姉様。怯れを見せな妹と。互に顔を見合せて。莞爾と笑ふつ泣もしつ。死を待つ内ぞせつなけれ。斯る所へたたくと。乳人腰元駈戻り。なふ悦び成されませ。判官殿利潤に成り大黒舞の大騙。由井が濱にて御刑罰。仰せ付られゆと。きほひ懸れば兄弟は命を延る悦びの中に歎を引出す。伊織の介が縛めを本田の次郎繩取にて。屠所の羊の引綱や。隙行駒の足元もよろりくど行道を。若狭はわつと泣倒れ。又起上りあれくく。あれなふ兄様くくと。聲からしめる呼子鳥。浮川竹につらられる。枝を放れし鶯や。子は子なりけり時鳥。悦びのうら歎きのうら。恨を誰に由井が濱波なき方に立波の。袖の裏とハ兄弟が身の上に

まろ知られけれ

第四 若狭の局道行

嬉しとは昔ぞ詠し星月夜。明くる詫しき鎌倉の御所の御門の七重八重。越へつ忍びつ隠うら
つ。若狭の局妹は淺茅と云へを淺からぬ。思ひは一ツ二人連。現つ心も乱ればし。一幡君が今
も猶。母に添寝の夢や見ん。寝顔脇類笑ひ顔。目にもちうつきて身をさらぬ。袖と袂のうらうら
に涕碎けて音無し。漣の白糸糸による。物ならなくに。別路の心細くも夜の道。迷ひ來る身
がやつ過て。春また寒し雪の下。積る思ひに哀別離苦の。理り知るき曙や。東光山の鐘の聲。
別れを歎く人有れば眠りを覺す法の友。親同胞は遠近に。蓮葉も名のみして霜の芝道踏じだ
く。紅匂ふ空燵に誰待宵の侍従川。寄せては返へる白波の。ふじが谷とはあれやらん。一はけ
さつと横雲は。誰筆染てくまどりて。四季の詠めもこととはに。代々を重ねし鶴が岡。ここの
やれ何處ぞと道人に問へば。此處は坂川辻町じやとさ。心ばかりの由井が濱。つらなる枝を打
波の胸に答へて身に懸る。責て空しき骸にだに。行合川の丸木橋。階は返へると一筋に千代
の。例しの細石無き名の數や數ふらん。無常を告る野鳥の聲も。鋭どき松蔭に暫らく。休らひ
給ひける。梟は寝に行鳩は起て出るとかや。明けなんどして玉鉾の道また聞らき岸涯に。高
札立て高提燈さし寄て見給へば。詞 何々若狭の局が兄。花垣伊織と云者上を偽り掠めし故。刑
罰に行ふと讀も終らぬとてころよと。見渡す向ふに獄門の顔は知らねとろれとのみ。するくと
走り寄り。なふ濠間の御姿や人をも過め盗みをし。重き科有ものころの斯る憂目に逢ふと聞
け。ありの儘なる有り事を云ひも開かやみくと。非道の掟に逢ひ給ふ。是と云ふのも自ら
が。名乗て出ぬ誤りを百千万の云譯も。今では甲斐も落漕ぐ。蟬の小舟のこがれ來て責て最期
の御顔を。拜まんとこそ思ひしに。早も變る兄上の御俯げと斗りにて。二人は其處に倒れ伏し
泣くより外の事ぞなき。本田の次郎親經。夫とは知れど知らぬ顔。詞 ヤイ〜女寄るまいぞ言
語に余る大罪人。首なと盗み取れんかと本田が番を相勤む。早く返れと云ひければ。二人は
頓て起直り。詞 ハア秩父が家來の本田よな。我こそ若狭の局なり。是成は又淺茅とて汝が主人
重保が。様子は知つてゐる女。就ては彼なる高札に心得難き事ころあれ。詮議が闇い狼狽た秩
父に是へ參れと云へ。尋ねんどの給へば。親經ハット畏り。驚き入たる仕合かな。扱又詮議の
筋に付何か御不審いよし。重忠召にも及ばぬ事。憚りながら拙者めが。中開きゆはん御尋ねあ

れと願承す。ム、何といふ其方が主人に代つて返答とや。只今尋ぬる色品を若し云譯に詰りたらまああの如く汝が首獄門の木に曝さぞよ。心を鎮め能つく聞け。あの高札に若狭の局が兄伊織の介と書付しは。確かな證據あるならん。然る上には彼の者を上を偽り捺めしめて。なせ刑罰には行ふたぞ。但し偽り者ならば若狭の兄とはなせ書たぞ。二ツに一ツは重忠が誤りにてハ有まいか返答聞んどの給へば。親經莞爾と打笑ひ。云ふても女儀の事なればそ等御存じ知れぬ事。國の政道致すには。非理法權の四ツの文字第一に仕る。理非の別きは常の事。理は持ながら一國の。法を背けば越度と成る。理も有法も背かねど。權威にハ又壓るゝなり。權威と云ては誰あらん。比企の判官能員殿理非善惡も顧りみぞ。法も無法も辨まへねど。君に出頭無二と云ひ若狭の局の親御じやの。一幡君の祖父様のと。もちのぼしたる權威をば。碎く時節の來らぬ故か。淵を潜つて泥水の澄るをじつと待てる。重忠は濶和の武士。花垣伊織お局の兄と見すへて有ながら。首を打しは政道に權の一字を用ゆるなり。又高札の書付は親經自分の了見にて。學問したる事もなく智慧に余計もゆはず。善ければ善惡は惡。見へた所をまつ直に云はねば聞かね生れ付。御名を出したが越度なら獄門の儀は扱置て。火焙にも遊ばせと道理をならべ云ひ立れば。二人ハ兎かふの詞なく差俯つふいてお在ます。親經威丈高に成り。拙者めも又御局へ御不審を申べし。兄を敬まふ禮儀をば御存じあらば昨日にも。名乗て御出成さると筈。イヤ、身もそ大事じやと御引成るこ心底なら。只今是へは無用な事。生ける時には無禮をし。物をも云はぬ死首に諄々とした云譯は心得難しと冷笑へば。淺茅は頓て差出て。チ、能い御不審去りなら。遊女ハ義理の商賣にて身を庇保など云ふ事は。かけても知らぬ事なれど。大將軍の奥様の昔しのがを云はるゝは。夫の耻辱子の耻辱。判官殿の耻辱にて名乗り台ぬは伊織殿。只一人の耻辱ぞと最輕々しき量見か。思ひの外に兄上の。身を滅ぼせし悔しみの云譯もしず御首を。烟りになつて亡跡を。吊らひ給はん其爲に御所を諸共出たれば。二たひ歸る心でなし。高札を打割て首をこなたへ渡されよ。但しは了簡成るまいかと守り刀を取出し。妹が抜けハ姉も抜きと云じやと詰寄る。何れせつなき心なり。親經ハツト感涙し何しに惜みナべき。首は勿論軀共只今進上致さんと。櫃を明くれば伊織の介走り出。ヤレ妹よ兄様か。是はと斗にて呆れるも又涙なり。伊織涕を押拭ひ。昨日の恨引かへて今日の心底満足せり。某當地へ來る事御身に逢ふて身の榮花。極めん爲にて更になし。去年三

月五日の夜羽黒山の修験者。蒙海と云ふ法師に一夜の宿を貸けるが。親玄蕃が寢首を掻き夜の内に逃失せしを。此處やかしこと草を分け縁を求めて尋ぬれども。知れぬころ道理なれ。頼家卿の歸依僧にて。營中を離れぬよし狙ひ寄るふ手術なく。うなたを語らひ討ん爲途く。此處に下りしと。始終を語れば若狭の前にはるも夢か淺間しや。假令暫しは別るゝとも待とし聞かばいつどは又。鎌倉へ呼び取て朝夕御顔を拜まんと。仇の頼みもなき身ぞと咽入く歎かるゝ。漸々涙を押し止め。能くころ思ひ立給ふ親の敵と云ふからに。討て叶はぬ道なれば心を盡し氣を碎き。狙ひ負せて討給へ兄様頼むと云様に。守刀をぞばと抜き心元を刺通せば。このも如何にと人々の驚き騒ぐ斗りなり。伊織の膝に搔抱き。心得難き有様や。兄弟名乗合たるが二分立ぬと云ふ事か。様子を語れと云ひければ。若狭は苦しき聲を上げ。ア、愚かな事をの給ふかな。廻り逢ふたる嬉しさは。冥途の道の土産をや。宿世いか成報にや齟も憂さも悲さも。身に積む罪の味氣なや。聞ば聞程自からは世に存へん様いなし。判官殿の常く。若狭の誠の親兄弟生て此世にある内。いつか名乗出べきと心の休まることなしと。戯ふれ事にの給ひしが。其蒙海と云ふ法師分けて懇志の中なれば。それを頼みて父様を殺し給ふに紛れあし。討れし親も自ら故討する親も自ら故今又狙ふは誠の兄手引をせぬは不孝也心を合せは是迄の。榮花の恩に預し後の親をば親とする。義理に背くが悲さに。斯ころ思ひ定めしぞや。骸は朽て行ても我魂は妹の淺茅が胸に残し置。兄弟心を合されて。敵を討て父上や又自らの修羅道の。苦思を早ふ救ふてたべ本田殿へば取分て。中置度事こそあれ。一幡君の行末を。宜に見立て給はれと。重忠殿へ頼ふてたべ。是のみ黄泉の障りぞと口説言まを哀れなり。親經涙押拭ひ。お心易く思召せ伊織殿の御事も。敵を首尾よふ討せん爲め成敗せしと偽りて。大罪人の首を討獄門の木に曝しも是皆主人の計略なり。一幡君を御代に立重忠後見致事何しに違背やさんと。世に頼しく答へれば若狭の局手を合せ。ア、有難や忝や。此上思ひ置く事なし。兄様去らばと云ふ聲の。よわると聞くぞ玉の緒も切れて果敢なく成にけり。淺茅も共に泣狂ふを親經伊織押止とめ。姉の魂止りて親の敵を討つ迄は。まなたの骸の預り物鹿相成れな怪我有るあと。諫め慊してたつが弓矢猛心のさる事にて。云ふても敵は大身者。主人などが知恵ものり力もかつて討給へ。若狭の局の御最期は。沙汰なし御死骸を。密かに寺へ送らんと。先長持に昇入れて。本田は先肩跡の兄。逢ひぬ昔しの戀しと。逢ふての今の悲しと。擔ひくらぶる

棒先の。永き別れぞ是非なけれ

まよひのすがたを

こやうけいがいに歸り鳥雀枝の深きに集る。實に世の中は仇波の。寄邊はいつく雲水の。身の果いかに知らざりし。御憚はしや頼家卿。瓊樓玉樹の園の内二世の三世の七世のど。互ひに契り替されし若狭の局何となく。屋形を紛れ出給ひ。今に御行衛知れざれば。現つ心も涙の床身を知る雨の明暮に。翼しほるゝ雛鶴の。一幡君も朝夕に母をくくの諸聲に。いとど歎きを増鏡。俵うつす姿繪もうれも心に任せねば。責ては夢を頼むてふ假の枕の假御殿。一念既に亂るまば。迷ひの門を開くとは。知らぬ御身を味氣なき。石に勢あり水に音あり風ハ大虚にわたる形を今ぞ現らはす女。懸軸を離れて心魂忽ち顯はれ出たり不思議やな。水莖の筆の禿と身を染めて。眠りならひの夕邊を幾朝でみの春秋を。梅ハ柳に靡びき合。松は櫻の合ひ床も。昔し語りに成たるぞや。奥様なりの釣夜着に。鴛鴦の衾の羽根かひし。情かはする色の淵瀬と。水のかしはの浮沈ひ身は浮草の根を絶て。娑婆に殘れる輪廻の業過は雲霧の軒端に立て雨ふ霰に。霜に寒に積り積りて消返りては。又降る雪の姿のふしよ烟り比べば淺間しや。なふ懐かし

や一幡君。親子の中は一世とい。誰か云ひけん空言や。泣音ハ遠き苔の下。露のうこなる魂に答へて餘り悲しさに。姿をかりの懸物に映て是まで來れりど。障子の内の床しげに。すつくと立てれ在ます。頼家見るをり走り出。恨めしの若狭やな。妹背の山の中を行吉野の川の上しや世に。何がつらふて悲しうて。屋敷は遁れ出けるぞ。ア、愚かなりく。誰に恨みを由井が濱親同胞になのろろの名乗れ逆しも假初に。忍び出たる閨の戸の。跡だに未だ鎖ざりしを。誰通ひ路と今ははや。妻や重ねし小夜衣妬まし男やな。いやらしの妬みやと逃んとすれば。引戻し。拜めど顔を打振て。悵氣は女の手癖口癖往古今も。貞女きう女もていかかづらや萬葉生纏はれても。此身元よりうへきにあらねば臺に輝く鏡もあし。煩惱菩提は法の道連わら面白の世の中や。夕邊朝たの鐘の聲。寂滅爲樂と響けども。聞て驚く人もなし。花は根に鳥ハ古栖に歸れども行て歸らぬ死出の道。詞 申殿様。なんぞ。酒をばふつとり止めさんせ。なせに。色遊をも置しやんせ。ろりや成らぬ。すれやと云ふても止め氣か。れこいかなとく。そんなら妾は最ふ往る。どこへ。あの世へ。詞 あの世とい。はて冥途へ往まする。頼家はつと氣を注て。何と冥途へ歸るとは扱は此世を去りしよあ。もに住む虫の我からど。刃の上に消し身の此世に

心は止めねど。迷ひ來るは君故ぞや直きを捨て曲るに親み玉を誤りも。色と酒との二つぞと。
 諫め申さん爲斗り。二たび見へしなり。唐土玄宗皇帝ハ。御心賢くて治まる御代は五十年。國
 土も民も太平の。天子と呼ばれ給ひしが。海棠眠る楊貴妃の桃の媚ある顔ばせを。御目尻に懸り
 しより。逆臣起つて御籠も帝都の外に出給へば。比翼連理と契りたる羅綾の袖も。他し野の露
 かあらぬか魂の在所を。尋ね詫ひさせ給ふとかや。愛ことを暗部の山の鶯の。子に迷ふのも思
 愛の薄き契りの袂には。涙を包む春雨に替める花の若君を。最一度見たし抱きたしと。障子の
 元に立寄れば。コハ何んどせん情けなや。此世あの世と立隔つ。罪障の雲高くして涙の露や戀
 暮の霞。暝々朦々朦々として。見れども見へず聲も聞へず。南無三寶親子は一世の契り知られ
 て。泣て笑ふて悶へ焦れて。かつはと伏してぞ泣き居たる。頼家頼に大音上げ。李夫人去て漢
 王の空しき床の寫し繪に。魂迎せし烟りのうち云はぞ笑わぬ。倂を。歎きしも身の上なるを。
 現世の逢瀬叶はば。刃に死して此世を去り。極樂諸天は愚かの事。假令地獄の底迄も。誘へ
 連立て伴へと手に手を取て。行くも歸へるも。逢坂の關も此身は止め得ぬ。泣も笑も夢も現
 よ幻よ。最早別れのあら堪難や。刃の罪に修羅の太鼓の去ばと云へば。暫しと止むる。袖振

り放せば。目にまろ見へぬ。踏足元は猛火の煙りこの淺間しやと。逃つ轉べどまた行く先も火
 焰の煙りに姿も焦れ。身漂してまろ立たりけり。悪かれと思ひぬ山の峯にだに。あふなるもの
 を人の歎きは君を悔り。民を惱す判官父子の悪心悪逆。縁にひかる。我身に報ふて。廻り車の
 くるりくるく。くる夜も。明けても。千年万年。百千億劫獄卒惡鬼の管に打れ。山に上
 れハ劍に劈き。谷へ下れば紅蓮のこほりに白無垢却つて唐紅の。花も紅葉も月も雪も。人間
 万事は胡蝶の戯れ。酒は仇を結ぶの刃。色ハ命を切るの。鉞。皆おり捨て今日より政道正し
 給へと。聲華やかよ夕告鳥の形は其儘消てんげり。頼家泣く。慕ひ感ふて。坐敷の隈々此處
 よ。其處よと尋ね廻れば。又立歸るゑんぶの有様向ふに翻然と形を顯へす。抱き留んと走り懸
 れば。其儘消へて雷光石火の水の螢のちらり。ちらり。と立廻る。面影月影諸共にあくる
 詫しと云ふかと思へば。形は其儘元の掛軸に立戻り畫空事とぞなりにけり。頼家はつと手を拍
 て。迷悟三界唯一身。昨日の酒の酔醒て今日ハ衣の賜を得つ。家には子あり弟あり國の警衛は
 和田秩父。動きなき世の鎌倉山。我身は思ひきりが谷唯今幽靈尊場へ手向の花と鬚を。切て
 彼處へ投げ給ふ順縁あり逆縁あり。共に成佛得脱の道の道とは。往古の聖人も説き置き給ひけ

第五

天道は満るを飲き地道の驕奢を憎むとかや。扱も判官能員ハ若狭の局自害故。積惡世上に露顯の上先つ頃より頼家卿。御不例甚々重うして事極り見へければ。謀計日夜身に迫り野心の胸に手を置て。御次に扣へ居る處へ。願行院豪海は御所禱の爲宿直して。御枕元に居たりしか。徐り〜と忍び出判官を見るよりも。ヤア比企殿か。法印か。先々君の御容体如何渡らせ給ふぞや。然れば次第に日を追て元氣弱らせ給ふと見へ。正体も無き御風情。コレ大切の場に成りしぞや。今にも尼君北條を御居間に詰かけ。御家督の沙汰あらば。貴公の仇とならん事鏡にかけて見へた事。此頃心を盡されし用意如何と囁けば。判官莞爾と打笑ひ。御坊氣遣なざるゝあろこらは疎忽らぬ呑込だ。言るゝ通り毛虫めら病ほうけの頼家に。差込れては年來の大望が成就せぬ。所詮本復ない命一思ひに刺殺し。御家督は一幡へ御相續の遺言と。鎌倉中へ披露せば。差詰め拙者は執權後倅どもは自から。外威の威を振ふべし貴僧へも又千石か。二千石は知れた事。詞 其上にも和田秩父北條などが意地ばらば。片端から欺し討。コレ床の下を堀抜い

て忍びの者を入れ置た。悦び給へと云ひければ豪海ぞく〜小踊し。ハテ御殊勝な御了簡。萬事は頼み上ますと頷き合ふて居たりけり。頼家卿それぞは夢にも知らず御寢間より徐々歩み出。詞 兩人に打向ひ。今日は一入氣も勝れず。宿直の者がつく〜と取廻すのも鬱どしい。暫く爰で語らふと打解け給ふぞ危けれ。二人は悦び目配せし左手右手をり飛か〜り刀を胸に押當て。詞 コレうつろ殿。とふで快氣のない命生けて置ては某か。大望の妨げ覺悟なされと突掛る。頼家ハット斗にて差俯伏て在せしが。稍有つて宣ふは。詞 人窮する時は偽り。鳥窮する時は頼む。朝鼠却つて猫を喰ふとは汝らが事なるよな。エ、過つた重忠や義盛。數度の諫言を思ひ出るも耻しや。覺悟極し上からは命は更に惜からず。爰を放せ腹切ると二人を左右へ突倒し。既に斯よと見へける時。怪しや御坐の疊の下ぐらり〜ぐはた〜と。百千方の地雷天地も崩るゝ如くにて。頼家卿の座ます御坐の疊の下よりも。すはと差上げ朝比奈が踏んばたかつて立たるは。けんろう地震の湧出かと恐れ慄く斗なり。判官漸氣を静め。詞 ヤア後れたかかね〜に。示し合せし倅共笠原中野は何所に有る。出あ〜と呼はれば。詞 朝比奈かつら〜と打笑ひ。甲に似て穴を堀る腰鼠のへろ〜武士。御用ならバ進上とはらり〜と人礮投

げ出しく、投げ出し。大太刀寛げずつと寄り。詞 コリヤそこな護摩の灰。身が法力の鐵纏三寸
 繩の珠數繁ぎ。ナント弟子にならぬかと。二人が細首引攔み。ゑいやくと絞付れば。眼を見
 出し血を吐て。眞平御赦免くと。手を合するぞ心地よし。斯る所へ和田秩父本田花垣駈來り
 出來したく朝比奈と煽ぎ立れば義秀は。詞 コレ伊織殿。此法師めは其許で御慰みに料理あれ
 判官は某が只今庖丁致すぞと首ちうに打落す。伊織もすかさず豪海を水も堪らず打放す。ヲ、
 潔よし面白し。悪人退治國繁昌。佛法繁昌武家繁昌五穀成就願成就。佛力神力の整ふ國ころ
 目出度けれ

鎌倉三代記終

竹田出雲

名は清定千前軒と號す初代竹田出雲の次男にして寶永二年三月より大坂竹本
 芝居の座本となり享保年中近松門左衛門に次で淨瑠璃作者の名家と稱せらる
 へみ至れり寶曆六年十月二十一日六十六歳にて没す門人には三好松洛吉田冠
 子竹本三郎兵衛等數人あり其子小出雲亦戯曲を作るに巧なり左ノ聲曲類纂よ
 り其著作を抄出す題名の下に人名を記したるは合作人にして年月は初興行の
 時を示す

竹田出雲著作目録

(五馬金ノ初メ傳及著書
目録省ク云々ハ誤植)

- | | | | | |
|------------|---------|----|-------|----|
| ○大平記 | 大塔宮職鑑 | 和吉 | 享保八年 | 二月 |
| ○三國志大全 | 諸葛孔明鼎軍談 | | 同九年 | 七月 |
| ○出世奴稚物語 | | | 享保十年 | 九月 |
| ○大内裏大友眞鳥 | | | 同十一年 | 九月 |
| ○伊勢平氏年々鑑 | | | 同十二年 | 四月 |
| ○小野炭焼 | 七小町 | | 同十二年 | 八月 |
| ○深草土器師 | | | 享保十三年 | 三月 |
| ○三折太夫五人嬢 | | | | |
| ○工藤左衛門富士日記 | | | | |

出入申お屋敷の奥方。霧島御見物なされ度と。奥家老衆より御内意に由て。身共が今日の亭主方。随分鹿相のない様に頼みます。手前が世倅も殿様へ御奉公申せば。御主人やら御出入やら。一方ならぬ權左衛門。如何程御馳走申しても飽はない。こりや手代共最早に出に間も有るまいれ料理の用意せよと。云ふ間程なく。奥方のね。お高れ鳴は一樣の。笠も春めく伊達模様。屋敷めいたる取形はしやんとして又可愛らし。染井の植木島とは最ふ爰そふな嬉しやと。共の奴に案内させ二人は笠を取敢ず。權左衛門も出向へば。中にも高は才發者の器量よし。會釋溢して潤和に。今日はれ前もれ心遣ひの上に。無待遠にござんせう。追付奥様も出なれば。随分鹿相のない様に申付よと。奥家老曾平次様の内意にて二人が先へ参りました。扱は左様か。夫はいかひ深切。拙者も念に念を入れ。不調法の無い様に急度申付たれど。何様有ふかと案じます。サア此方さん方も爰へ懸けて些と緩氣を遣らしやんせ。今朝からの氣晴しに身共も一服仕らふと。煙草益差出せば。二人も辭を忘れ草。なんとお高殿。今日の花見に能い男の見飽せうと思ふたに。扱能いものない物じや。今朝からかゝつて結ふた髪が古になる。此方さんなど見て下さんせ。尺長あしに。今江戸で流行文七元結巻立て。片辨

能かろがや。如何機手の變つたやら今日の髪は花美な結やう。ほんに此元結を何様した事で文七元結とは云ますや。去きば私も録に知らぬ。此元結を文七と云ふは紙の名じやとも云ひます。又文七と云ふ器量よしの男が仕初めた共云ひます。是はしたり。昔から文七と名の付者はみんな男がよざるの。夫に付ておの花岡文七様。江戸中に又とない角前髪の器量者。私が常々惚れて惚ぬいて居ますと。高と譯有る中なども知らぬね鳴がばかしく口。ア、最ふ能はいの其所に父御も聞てじやと。指付て云はれもせず顔を頬らめ俯伏バ。權左衛門も聞耳潰し灰吹散いて紛かす。フウね高殿は文七様が嫌か。いや〜嫌じや聞ぞむな。マア其跡を聞つしやれ。顔見る度に口説ども不義はれ家に御法度じや。法度〜で物云と。私が器量が次々に依つて揚梅のより喰か。些と色が白ければほんに引つり引ばらる。如何機手前の世倅も。ね屋敷に御奉公すれども此方の様な斗りなら。仕損ふ事じやなぬ。其器量を見た時は。男は引つり引ばらるまい。顔が引つり引ばつたと堅い機左が輕口に。高も吹出す折ころ有れ。先走の歩行者只今れ出と知らするにぞ。ろれお煙草益れ菓子益と。釜を沸らす讓井の。水際の立つ武家育ち高山殿の奥方。今日の花見に歩行をひらふもお氣晴しと。附々の女

房達れ伽の檢校諸共に。ねるや。練物見るやうに。しやならくの歩み振。女中のねさへは奥家老本庄曾平次。いで案内申さんと先に立ち。出來置たる花見の床机いざ先われへと申上れば。奥方は附々に誘はれ彼處の床机に休ひ給ひ。暫し見惚れてのお曾平次。聞及んだより見事な霧島。吉野初瀬の花とは云へど是程にはよも有るまい。中々左様でござります。世間に有る霧島の三四尺が定りなるに。是は殘す曾丈餘り又外に無い名木。ナ、そふである。ナア女子共。アイ見事に咲たと餘念なく。見らるゝも花見るも花。何れの色や優るらん。御前の首尾を見合せ。權左衛門お目見へと地に鼻付くれば。是は。今日はいかひ大儀。扱奥様にも殊あひ御機嫌悦びめさと挨拶すれば。ナ、權左衛門か。今日は其方が心遣ひで自らも能い慰みする。ア、是れは有がたい御意。申上るは憚りながら。拙者が親共よりお屋敷へお出入を申上。異服所仰付らるゝさへ有がたら存ます。剩へ世倅權六殿様にれ側の御奉公を勤め。町人風情の子に花岡文七とお名迄下さるゝ段冥加に餘任合と。世倅が母諸共に殿様の御厚恩を。申出さぬ日迎ひをござりませぬ。幸今日奥様のお花見と承り。鹿酒持せ候へば恐ながら一献召上られ下さるべし。曾平次様。御前宜しくお取成頼みますと。勝手へ入るより追々に。兼て用意

の銚子盃取々に。最媚渡る女中の遊び一入興にぞ入り給ふ。まれ申檢校様。此の鳴の兼々望む。叶はぬ戀の叶ふと云ふ歌が有らば聞して下さんせ。わつけもない事嗜まじやれ。何ありと一節と高き指圖に檢校も。調子合する音締の糸。宵に別れて洩茅が原に。裾は露やら涙の袂。雨に二人が濡初めて寝た夜しつぼりしよがへ。ヤレしつぼりしよがへ。云ふに云はれぬ乱れ髪。まど寝みだれぬ角額ぼつとりとした顔付は。若衆盛りや戀盛り江戸一番の美男草。名さへ花岡文七郎。衣紋繕ひのしと御秘藏の狗家來に抱かせ。御前問近く手をついて。今日は天氣も能く花見は一入の御慰。御機嫌伺ひ奉れど。殿様のね使に文七伺公仕る。是はまあ自分へのね見舞とて。殿様の御不便がり給ふ文七と云ひ。御秘藏の狗迄御懇切なれ使。其狗是へとね聲につれて日頃馴染の膝の上。くはらくと駈上りしあだれちやうける鼻くん。飛んづ跳つての藝盡女中擧つて大笑ひ。ね高一と人の目も遣らす一心不乱文七が。顔つれくと打守り。物云ひたげに伸上り。目と目を見合そ戀衣綻び懸る風情なり。曾平次も微酔機嫌。今日はね上の相伴で。日頃の體散仕る。迎もの事にあの奥庭の百紅葉。青葉を御覽も又一興。實にも名高き紅葉見残すも残り多し。サア此方もかじや文七も。花見て歸れど御

秘藏の。狗の綱手を取々に皆々「打連れ入り給ふ。勝手口より權左衛門自身通ひの酒の燭。詞
 ハア親父様。昨日は屋敷でもよとれ目にかゝりました。今日は嘸れ心遣ひ。いや〜。珍しう
 奥様の花見遊ばす故心斗りの御變應。其方も今日は殿様の使とな。扱逢ふ度に云ふ如く。殿
 様の御恩忘るゝな。万一御機嫌存いたるも二た度親の内へ戻らふとばし思ふ。町人でもろ
 あれ人に知られた權左衛門。不所存など見たればたつた獨の世倅でも涙はかけぬぞ。兎角若い
 者の嗜みは不義徒。必ず〜忘るゝなど。親子眞身の咄半。れ高は座敷の首尾見合せ。文
 七様〜と走り出。見れば親子御額あひして物語。はつと驚ろきア、私とした事が。詞 權左衛
 門様を呼ぶに。文七様とはいかひ鹿相。あれ御前から召なさる。ア、成程〜。サア文七
 も奥へ〜。若い女中と若い男と一所に居ると。思ひ惣名さかを講るもの。早ふれじやれとど
 つばかは煙鍋提て入りにける。詞 ア、お高殿ひよんな時呼しやつて。私やあふ〜思ふて居
 た。サア私も來かゝつて跡へも先へも行あんぞ。まあ何から云ふやら毎日顔見る斗りで。いつ
 しつぱりと。咄する間もあらばまろ。今日は思ぬ能い首尾と。跡は得云ぬ耻し盛り。ア、わつ
 けもない事斗りと。まだ廻解ぬ初戀に類は獨獨の如くなり。詞 扱目外も云ふ如く不義はれ家の

御法度。若此事が顯はれては二人が身の一大事。假令何つ迄逢はぬ迎文七が氣は變らぬと。知
 せ度ても首尾もなく。今日の使を幸に文を認め。狗の首玉の中へ締込み首尾が有らば此事を。
 此方に知らそと思ふ間に。降て湧たる上首尾。詞 扱は狗の首玉よお前の文がござんすか。ろん
 な事とは知らなんだ。詞 扱今れ前のれつしやる通り假令何つ迄。逢ぬ迎心の少しも變らぬな誓
 文〜神かけて。必ずやいのと抱き合く縁の程ぞわりなけれ。詞 夫はろふと今の文。鳴が目に
 かゝつたら大低の事とや有らまい。私や往て取て來ませうと奥へ行んとする折から。秘共の聲
 として。御秘藏の狗が放れしと口々に喚くにぞ。曾平次も走り出。詞 ヤレ家來共花壇樹木の隈
 々探せ〜と下知すれば。承つて數十人ばら〜と駈入れ。文七も諸共に躑躅の木影築山
 の。草を掻分け踏躑躅し殘る方なく探せども。行方知れねば人々も十方にくれて立たる所に。奥
 庭より秘れ鳴。手負し狗を掻抱き息次あへを駈來れば。皆々悦び走り寄り狗は何處に居たるぞ
 と問ふも語るも。慄ひ聲。隣屋敷の垣越に狗の泣く聲。駈付け見れば此家の飼犬。引陸へて振
 る所を漸々退け助けしと。云ふに皆々立寄りて見れば詞に違なく。狗の首筋首玉共に喰裂れ朱
 に成つて仰れ伏す。文七の木影より件の犬の尾筒を掴んで引ずり出。詞 大事の狗に疵付たるの

ら犬めど。指添抜いて肝の束を二刀刺通せば。四足をあをちぎやつと斗に死んでけり。詞ヲ、犬を刺留て早速の手柄いや手柄でハ御座りませぬ。御秘藏の狗を此様に手を負せしは逆に立たる文七が誤り。いや〜氣遣ひしらるゝな疵は浅い。是を癒す妙薬は伊勢に名高き神仙丸と。印籠より取出し付れば忽ち身慄し心地涼しく見へにける。お鳴は月早く申々曾平次様。此狗が首玉の中に變つた物が御座りますと。心諸共に引出すは文七が以前の文。二人ハ見るよりはつと斗り消も入りたき風情なり。鳴は彼文押開き。宛名は誰じや。高殿参る文七より。ヤアコリヤ氣疎い。何んじや。假令何つ途逢を共此方の心變らぬとはチ、嫌らし。コレ見さしやんせ曾平次様と指出と文引たくり寸々に引裂ば。ヤア證據になる其文を引裂んしたは。二人の衆を崩負じやの。但お家は不義しても。大事ないろと詞詰。曾平次は助けんと思ふ心は反古となり。破つても反古にならぬ此文が不義の證據。無云譯は有るまいと。聞くよりお鳴はコレ文七殿。ヲ、結構な仕様じや。私が常々口説く時は。不義はれ家の御法度じやと。ぴんしやんと爲しやつたが。能う法度を守らしやる。ろしてマア有ふ事か秘藏の狗は痴話文の使さして。是が本の犬骨折てお高殿の悦。其悦びの裏の來て。追付二人縛られ乍ら鬼灯を腕ぐ様に。

ちよい〜に逢つしやろ笑止の事と焚付る。父は始終指俯き物をも云ハず居たりしが。つか〜と寄て文七が。良を借々打守り。最前も最前迎。此親が云ふた事忘れハせまいな。斯う云ふ場に及んで返らぬ繰言なれども。常々近所の衆が云ふにはア、權左は仕合者。商賣は繁昌する能い子は持やる。追付馬に乗り鍵つかして歩くである。其時は呉服店取れいて樂隠居と羨れたが。今で思へばお義徒らの科で。駄賃馬に乗り鈴か森へ行ふも知れぬ。夫れも儂が心から常々己も侍衆に附合ば。權左衛門が魂も武士にあんまり負はせぬ。不所存な世倅。首切れうが殺されうが。これ些ども悲しうないと胸迄堰る涙をば。泣ぬ顔する父親の心の中を察し遣り。二人も涙に正体なく。只伏沈み泣き居たる。歎きの聲に奥方も奥より轉ひ出給ひ。始終の事はあれにて聞く。不便は思へども差當る不義の科あれバ。自が是非は云はれず。二人が事は曾平次殿へ宜しう申上よ。ヲ、手ぬる。あんまり上ね慈悲が過る。大膽な事仕た者を何んの取成。此鳴か思ふには腹も軽い縛り首が能御産りませう。黙れ女最前儂が吐すを聞けば。文七を常々口説たと吐せぬか。それなら儂も同罪。イエ私ハそんな事を口もくつされ未ぬけ〜と儂り者と。するんと抜いて刀背打お脊骨を折よと力に任せ。りう〜發矢と續け打。

ア、痛死いたしにまする。私もいつその惚ほました。最堪忍もつかんじんして下さりませと泣喚なみくこそ心地こころちよき。曾平次そへいじ刃を鞘さやに納め。詞 畢竟ひつじやう文七事は御譜代ごふだいと云ふではなし。殊に殿の御憐憫れんみんも深ければ助けたき者なれど。お家の法を背そむいたれば極きまつて科は遁のがれず。喃權なんけん左衛門心中を推量おしりやうして悼いしうは思へども。是非あはれがないと諦あきらめめさ。去ながら其方が商賣かあひにお構かまひない。ヤイ〜家來共。此兩人を身が屋敷へ連歸つんかへれ。お鳴が事は文七を口説くづ。其上にまた訴人そねんの科彼奴そがやつは是より追拂おつらへど。家の政道せいだう偽りなき本庄か下知に任せ。若黨わかしやう足輕立あしきりたてかゝり。帶引おびひき解ときくる〜と。裸はだかに鳴が身の赤恥あかばな。割竹わりたけ手々に敲たたき拂はらひ打立〜追立れば。文七ぶんしち七れ高も諸共もろともに引立られて行く姿。誓固ちかの苦黨くたう奴まで涙で顔を染井の町。花の姿を霧島きりしまの露にしほる。

江戸本町呉服屋段

能よき絹着きよぎたる商人の軒のきを並べし繁花はんかの地。異國は知らず本町通り。江戸生ぬきの呉服店。武家方一かたばい町一ちやうばい。現銀げんぎん得意山川屋せんけんていせんせんと云ふに掛直かけなも無かりけり。夜の明あくるから物買ものかひひに見世は人絶たへなつ季の仕入。染地の注文そめぢのじゆん期日きじつ裕羽織袴ゆうお織袴の仕立の催促さいしやく。老若男女取交らうじやうなんによて。もやつく中に花の帽子はなぼうし。天台法衣てんたいはふえの出家一人。店守たんでしに案内して。詞 山川屋せんせん左衛門殿宅は是れかど。皆迄聞

ね早合点ねはやあてん。詞 アイ權左衛門店はこれ。ね袷袢衣あはせの御用ならば。紋白もんしろ金襴きんらん鋪子ふし莫臥まふい。羅地らぢか紗地さぢか金紋紗きんもんさか。縮緬ちぢめんは渡りなりと京成りとも。色は地染ぢそめの江戸紫緋いづるは屋形やかたがよござりまする。前まへ黄齋わうさい金香こんかう染ぞめくち葉茶番はてな。コリヤヤイお煙草盆たばこぼん。マア〜是へ先まづ上り。詞 イやお世話せわやるな。呉服の用事は重ねて頼たのまふ。愚僧ぐそうの淺草の寺中の者。權左衛門殿に御意得ごいよたく態々たて是迄。ハア旦那だんな義は此間内證取込こ。誰様だれさまにも御意得ごいよられず。御用有ごいよば私わたくしめに。成程〜。其れ取込との筋すぢを能く存じて。お笑止せうしに思おもふから密々みつみつの御相談ごさうだん。近付ちかづでは無なけれども何卒どうぞお逢あはさるゝ様に。ろこを頼たのむ云いふておくりやれ。ハア左様ならばと内に入る。權左衛門は打込うちこんで。寝るも寝られぬ物案ものあんじ。手代てしろが報しらせに起直おきなり。詞 淺草の出家が内證の事知つて逢あはたいとは耳みみより。聞捨きんすてもせられまい是へ通とせ。ろこの物も片寄かたよせよと其身も羽織引お織引かけて。ね通りなされも互あひの挨拶あいさつ。御死ごしならふと諺ことわざはす奥へ通とつて座まに着つけ。亭主ていしゆ恩懃おんみんに手を仕つかへ。詞 誰様だれさまかは存ぞんせず。世倅せまが事ことにれ出いでは忝はづなき仕合しあ合あ。様子御存ようすごぞんじと有ある上一かみ々々申上まうるに及およばず。行儀ぎやうぎづよい屋敷やしきの奉公ほうこう仕損しとんふた世倅せまめ。憎にくしい奴やつどん存ぞんざれど。其日から今日迄食くも喉のどへ通とらず。私斗しとりか母ははが歎なげき御推量ごおしりやう下くだされませ。詞 御述懐ごじつくわい御尤ごよし。親おやの思おもふ程ほど子こが思おもへば云いふ事は御坐ござらぬ。ろこの若氣戀わかしな

路とて救さぬが屋敷の掟。今日未の下刻不義の女は打捨て。御子息の切腹と。開て驚く權左衛門。扱は世倅が落着も今日は極つたか。ハッはつと吐息を次の間に。顔の見へねと母親のわつと泣聲山川が内は死屋の如くなり。ホ、お歎きを察し入り。相談と云ふの事。御子息を助ける手掛聞き出したも出家の徳。佛の衆生を救ひ有るは廣大無邊。愚僧に相應の命乞。其子細は。爰へつとお寄りなされ。ハア手掛とは先嬢しや。如何様の御了簡早お聞せて下さりませ。サアその事。地獄の沙汰も金次第。百五十兩金があれば。請合て助ける命。造な手筋の取らまへても肝心の金がない。一寺の住職の名斗り借錢だらけの貧乏寺。一兩の才徳叶はず。權左殿の身代で、百兩や二百兩は出兼もあされまい。文七殿の命を買ふ金素より惜みは成されまい。今日の日脚も未四ツ前。七ツ迄は三時餘り金見た上では。愚僧が働き。煎豆に花岡文七が息才な顔見せませ。否は有るまい何れ其金早ふ。早ふと急ても急ぬ權左衛門。世倅が助かるに極らば百五十兩のおろか。千兩が二千兩家財有丈否とは申さぬ。我々式が口論仕出し。人を過めた謔言ならば金で助る筋も有。先誰じやお大名。百五十兩の目腐金。是取て能いとおつしやらあか。如何にしても吞込ぬ。殊に出入のお屋敷行く事と行か

ぬ事とは。商の徳で知つて居る。夫れも免れ御出家様。お世話の段々忝なほど。おはどの乗らぬ挨拶一遍。イヤこれ御亭主。れ出入の武士附合お屋敷の拾式。堅い計りが格式でも御坐らぬ。表向は角立ても内証は以心傳心。金の入る筋打わつて申さ。扱のそふかど得心有るを。知つて居て云はれぬが一難儀。目腐金とおつしやつても。先の見へぬ事百五十兩出し悪から。爰は愚僧が二了簡。五十兩勘略して百兩で遣つて見る氣。此方から五十兩負けて出るに異變の有るまい。ハテ高が百兩捨たと思つて出さつしやれ愚僧が折角思ひ付人を助くる善根切徳無下になして下さるなど。殊勝をかしに任掛ても。四も五も喰ぬ權左衛門。返答もせず身を背け煙管相手に吹く煙り。見世から覗く手代共旦那の弱味へ付込んで。金せうとは大膽い騙め長居仕たらば棒まかせと。いふにも性まぬ出家の所作繰返し。同じ事を云ふと思はれふが。勸むる功德共に成佛。百兩の金の湧物死んだ人は再度歸らぬ。金と命を提くらべて。最一了簡御亭主と強るにむつと氣色を損じ。金と命の重いと輕さはやらうとも知つて居る。あまちな事喰ふいの。すりや何様あつても得心ないの。ハテしちくど。足元の明い中去やるが仕合。ハア是非に及ばぬ。縁ある衆生は度し難しと。悄々立て行く姿。見世の手代

が口々に。丁箇強い旦那殿かひで殘念など。指し笑ふも聞ぬ顔珠數爪ぐつて歸りける。詞手代共今のを見たか。騙と商賣に爲る程有つて落着た頬がまへ。世倅が命七ツ限と吐したも騙である。とは云ひ是か氣に掛ると。小首傾け案じ顔。詞申々旦那殿。其氣遣の晴れぬから。私が願ひ聞届けて下さんせ。詞是は女房改まつた願ひとは何事。聞きませうれ云やれと膝と一の指向ひ。詞私が願ひと申すは、今の坊様呼戻して。金進せて頼みたい。詞ハテわつけもない。騙と知れた賣僧坊主。彼奴を頼んで何になるぞ。衆生利益のひつたくれ口車も乗りやつたの。金のかの字もならぬ。權左衛門が子に迷ふて金取られたと云はれては。一分も立ぬ耻の上塗。捌けた様でも流石は女子。打遣つて置めされ。詞イヤ騙と知らずに騙られたら人が笑を。矢張騙と知つて居て騙られて下さんせ。ハテ物好きな騙られて何にある。サア何にならぶか。成るまいが。お前と私は同じ親でも心も譯も違ふて有る。詞文七とは成さぬ中。産ぬ子には格別の。義理も有り世間も有る。内に仕ふ者を先として文七の死やつ跡では。助ると云ふ金惜んで見殺しに仕た繼母。眞實の母御が御坐らば。嫌と云ふ旦那殿には隠して。何程ありと遣らしやろと思ひぬ事も人の口。詞勿体ない天子將軍様の事でも云ふが慣ひ。それを云はれまいじやなければ。萬に一ツ今の御出家がほんのの事ありや。悔んで返らぬ跡の歎。町人の子が大小指で。侍に成る嬉しさに跡先の辨へなく。遣つたが此方の仕損ひ。今日の歎きは親々の捨へてする歎き。掛替も無い獨子侍にせいでも大事ない。町人での大名と人も羨む身代。若い子の色盛。詞れ高とやらを念頭せいじや。稚名の權六ならばれ高は愚。羨足かけ置ぶが。該原狂ひ仕やらぶが。不義徒に成りもせず。殺されもせまい者何を云ても皆跡へん此間泣暮した心の晴間は助けるどの詞を便りにして居升る。願ひを叶て下さんせと。夫の膝に打伏して歎くも道理意地らしき。成さぬ中には様々の義理も。誠の涙なり。詞アレまたの愚痴などはそこを云。億萬貫目の身代でも町人は町人。米一粒でも知行を取るは。願ふても叶はぬ彼奴が出世。大切な所を仕損ふた。ハテ何とせう是迄の親子の約束。死んだ跡の吊ひには身代有限惜みはせぬ氣。和女の親も浪人衆。侍の娘でいてごらう。れ云やんな。サア其侍の娘じやさかいで。連合の了簡押返しての願ひ事。七八年の馴染でも今迄隠して置ました。私が金が八十五兩父様の云付には。詞子の有る所へ嫁入身は夫斗りの氣兼でない。先の子を大事に育て。成人に随ひ一盛は遣ふ金。事に依ては連合に隠す品も有るもの。其時に出して遣れと。先の先迄心を付け下さつた

八十五兩。取て置いて何に成る。彼の子の爲に捨る金。お前は知らぬ振をして。願ひを叶へて下されと手を合せて頼むにぞ。權左衛門持あつかひ。夫程に思やる上。何様なり共と云ひた
 いが今の坊主は最ふ往々。騙と心注に寄て寺の名も問ず淺草と聞た斗り。卅六軒の寺中何
 れが何れやら知れ難ひ。イヤ私もそふ思ふて久三を跡から呼に遣つた。最ふ戻るでござらふと
 云ふ内に。早御出家是へと聞て權左衛門。先刻の様に云ふ散し己はどふも逢れぬ。和女次第
 と云ふもの、思へば、費な金。いなぬ事をと立て行く。以前の出家はのつさく元の所へ。
 打通り。歸れと有るで又參つた御了簡が付ましたか。權左殿は何れに御座る。アイ了簡を付
 かにも主は堅い生性。云出した事變せぬ氣質。連添を私の了簡でれ前を呼に上げました。御苦
 勞の上の御苦勞様。ムウ扱は權左殿の御内證な。御子息の不慮の災難。取分けて御心底察し
 遣られてお笑止千万。御推量なされて下さりませ。悲しいと申そふか最愛いと申そふか。文七
 とは成さぬ中。思ひ切の強い連合。退けて置いて私が頼み。百兩の金が有れば助かるのお詞。夫
 れを命の釣結とも。思ふに任せぬ百兩には些足らぬ八十五兩。是は私の親里から持て參りし
 暗金。是でどふぞお僧様偏に頼み上ますと。跡は詞も泣じやくり。したりく言語を絶せ

し御真心御寄特千万。先達て申入れたは百五十兩。不得心と存るから百兩とは愚僧が了簡。其
 上が不足の金。是では如何と存ずれども。成さぬ中の文七殿大切に思召す心が千金。百兩よ十
 倍した貞女の心佛は見透し。愚僧が身にも寺にも替へて。遣付て見ませう氣遣有るな。左右云
 ふ間にはや九ツ一刻も早ふ屋敷へ參り。暮迄には能き吉左右心が急バ最ふ參る。神棚へも佛檀
 へも火を上げて信を取り。ね頼み申が肝要。願の肝要此包と。懐へ捻込で跡をも「見ずして走
 り行く妻は佛間へ押直り佛の誓只頼む。我子の勸難救ふてたべと。繰返し誦む普門品。見世に
 は手代が謗口。此方等が朝から晩迄。汗水流す商物一割掛るか掛らぬか。今の坊主は元手入
 らず八十五兩ぬくもりおつた。爰から直にぼんやへ出掛けはつちこうなく。四靈の洞金しこり
 博奕花遣り居ろふ。イヤ其花より色の花代。馴染深川品川かで鯛卵の暴れ喰。腹八はいのれ山
 狂ひ贅はり居るを見る様な。左兵衛善八聲が高い。お内儀様の了簡で爲された事。坊主を謗
 るの親方を謗るも同然。奥へ聞へる噂みや。斯は云ふ此番願も騙坊主と思へども。千に一ツも
 誠であるか。善惡を聞く辻占門通ふ物買の。云ふ事に氣を注して試して見よじや有るまいか。ユ
 レハ尤ろりや其所へ。尾張屋からの使の男。淺草縮緬の抱帯二筋色の能いやかたを切て下

れ。今内を出かこつてじや。急々急用今切て切て〜とせり立板こちいる物切て貰へ。跡は
 ゆるりと仕舞つしやれと飛が如くに立歸る。南無三寶得意門も多いが命の尾張屋。切て遣つた
 敷を二筋氣に懸る。二人の命無いに極るない〜〜奴が案内。主人の仁体御書院組とは見て
 取る番頭。御用の品々を伺へば。ずんぞ能い渡りの茶字綱戻子の肩衣。色品を見へい出し召
 い。ハイ〜茶字も段々戻子も品々。憚りながら是と斯うの取合。成程〜萌黄の立綱濃花色
 此取合も能く有るべし。繼上下と云ふ物は上と下と變つて有れど。色の取合切れぬ様に仕立際
 が第一。地代手間代詳しく書付け見せめさし。アイ〜れ肩衣の御紋はナ。丸に古文字。命
 永い壽の字と共に。身が方の用事永く頼まふ。是は千万忝なし。始てのお商隨分下直に積り上
 地代紋代仕立代二兩壹歩三百文。ム、ウ是でよいか金一兩手附に渡す。明々後日取りに越ろ
 ふ。其節残りも算用すべし違ひをい様に頼み入る。最些お休みなされませいで。まだ外に用
 も有る最ふ参る。能お御出と門送り武士の辻占上々吉左右。ナント若い衆聞てか。色の取合
 切れぬ様に繼上下。其上にまだ命永い壽の字の紋。八十五兩の投金とふやら物に成りそふな。
 アレならふ迎やら鉦の鳴る。ちやんがら〜哥念佛。ア、コレ商先通つてをらと。七ツ切

の辻占日暮林清刻限が切れて悪い。きり〜往やれとつかふと聲。奥お聞取る女房の看經しよ
 しノウまれ〜。文七の災難脱るゝ爲托鉢は云ふに及ばず。物貰ひにも報捨しやと云付たを忘
 れてか。哥とは云へどれ念佛。一聲聞くも彼の子の祈禱番頭殿錢進じやと。云ふに異變も内儀
 の指圖コレ日暮殿入申すと。さ〜ぐち投る端錢ちよいと鐘木にかけて取り。拍子に鉦や聲張上
 去程に小栗殿照天の姫と御祝言。三々九度の盃に毒酒を勧め盛殺そ。横山一家が悪心。夢にも
 知し召れいで引請け〜呑み給ふ。毒の當りは目の前に。花の盛の御姿骨と皮とに成り果て。
 此世から餓鬼道の愛身を三ツの車に乗せ。本宮差して引て行く。照天の姫の物思ひ哀れど。
 ノウ善八。辻占の風が變つて死脈〜。其上に念が入て生ながら餓鬼道。どんな事云へふも知
 らぬ。能い加減に仕舞しや。ハテ氣短い爰迄は哀れな段。此先は湯に入て小栗の本服。辛抱し
 て最些聞きやと。云ふも愚なり爰に藤澤の遊行とて。最も尊とぎれ上人。小栗殿を助けんとて
 衣の上玉澤。湯壺の中へ飛入て手づから洗はせ給ふにぞ。大道心の其不思議元の姿と成り給ひ
 照天の姫と御中能く。目出度く夫婦に成り給ふ。見る人聞く人諸共に感せぬ者よそなかりけ
 れ。哥の唱哥と諸共に家内は悦ぶ其折から。股立取つたる先手の若鷲。淺草の寺中厚徳院。御

願ひ相調ひ只今是へと云ふ跡から。豪笠立笠天鷲織の覆も對の狹箱。長刀持は出家の看板。揃の六尺綱代の乗物。左右の備は伴僧二人扈從して近付みぞ。亭主を始め家内の上下。驚り狼狽敗亡し。樋で俄のはき掃除是へとさうは招じける。以前の出家色衣に改め乗物出る其勿体。詞後から來る駕直に内へ昇入れよと云捨て通らるれば。兩戸前しろしながら續けて奥へ昇据たり。法印重ねて。詞身が用事は量り難し。品に依て是で一宿。供廻り殘らず寺へ歸つて休息々々。是は早却。權左衛門取込で禮さへまだ申さぬ。お供の衆へ酒一ツ。イヤ〜夫れは又重ねての詞に従ひ歸りける。詞扱權左殿御夫婦。愚僧が一言反古にせぬ優曇花の花岡殿。相逢なされと戸を明け。文七は白無垢に淺黄上下死出立。生顔見るは夢でなはいか。夢でも嬉しい忝ないお影〜と拜むやら。我子にひして取付て離れぬ母の悦び涙。爺もぞく〜尻座らすれ前は本の生佛。何様した手筋で助つた。おんまりの嬉しさまご誠とハ能ふ思はぬ。法印様の御慈悲と疊に喰付踏まる。詞ヲ、道理〜。命囉ふた屋敷の様子。親達へ直々に。云へとも不義の誤りに指俯いて居たりし。暫く有つて顔を上げ。お前方に此間歎きをかけし不孝の罪。主人のれ目を探めし科縛首罰る所。詞腹を切れとは殿のれ情有難う思へど。本庄曾平次殿の

言渡し。七ツの時計待つ折節淺草の厚徳院様。命乞にれ出遊ばし。殿様との御對談間もなふ御免遊ばされ。再度歸りし親の内お顔面を見るに付け。不孝の段々思ひ知るれ救なされ下されませど。歎きを見るに意地らしく。詞救さいでならふかいの。救し悪い殿様さへ救さしやつた命冥加。思へば地獄の一足飛法印様の御厚恩。其方一生忘りやんなや女房共が云に違ひぬ。親の恩は今日迄是から先生延る。命の親は厚徳院。尊いれ僧を勿体ない權左衛門の曲り根性。今流行世間の騙。波扉打とやら云ふ賣主坊主と心得。詞餘した慮外の段々眞平御免下されませし。詞イヤ曲り氣でござらぬ。萬事ぬからぬ大商人。賣主との見立ハ流石々々。うふおつしやつて下さる程權左衛門が頬耻。居た所へにへ込たい。お腹の立つは御尤ろこれを慈悲の御看免。御機嫌直して下されませど。女房諸共耻入て詫るを押へて。イヤサ眞實腹は立忍騙の證據は覽せど。すつぽり脱ぐ花の帽子。唐犬額に剃下頭。ひつこき髪五体付。ぎよつと驚く親子三人忙れ果たる計りなり。詞ホ、悔りは理り衣と頭相應せぬ。大津繪もどきの拙者が出立。咄せは知れる身の上。場を改めて下座に着き。詞私は平兵衛と申す歩中間。拙者主人の名は宅間元龍とて。則ち文七様と譯の有るれ屋敷の姫れ高殿の爺親。今一人兄が座れども是も身上稼

ぎの爲。九州の方へ罷り越れ未だ有附の便りも知れず。瘦浪人の活計覺えれらるる兵法指南。高殿の奉公も爺勝せを買ぎの爲。二人有る子も只今では只一人のお高殿。便りになる子の難儀を歎き。朝から晩へ泣續け。詞 コリヤ平兵衛。年寄つたれハ愚に返り。未練身性な涙と思はんも面目ない。兄は有つても他國の住居生た死んどの便りも知れず。杖柱とも頼む妹不義仕たれハ助からぬと。知つて居ても助けたい不便な可愛ひ。其方が了簡はないか助けて呉い平兵衛と。顔見合す度々に私にしがみ付。主が下人に手を合せ頼まつ「やるがれ尤愛いと。云ふた計り拙者風情及ばぬ事でも参り付たれ屋敷の取沙汰。文七様ハ御器量かられ召出された殿の情。外の人と格別赦し度思せども。屋敷の法は背れぬ。奥様にはお氣に入り御願ひのれ高殿。二人が二人を惜ませらるゝ爰が能い出家の囉ひ所。御菩提所御祈願所出らうな所を得出ぬは若瑠の明徳時は傘一本で寺をひらく。そまが怖さに出ての無い。今時の出家願んでは埒明ぬ。坊主に妖て仕掛て見やう。ハテ顯えれてから主の爲。平兵衛が命ハ投出して。支度の方便に盡き。思ひ付た是のれ家。手前の親方同然文七様の御難儀。金騙る能い手筋思ふ盡へ持て参つた。八十五兩は此身の廻り供廻りの装束。世人余りの雇賃。詞 常とハ違ひ足元を見れつて一人

前に一兩二歩宛。乗物代道具代すつべり拂きて二兩の不足。此袈裟衣賣代なし人に損はかけぬ工面。身に付けぬ金の冥加で二人ながら助けました。騙の因縁斯の如くでござりますると語りける。權左衛門は始終を聞きやつとも言はぬ思案の体。文七は暫が中も武士に馴れたる心の詞 平兵衛とやらの才覚で助かるは助かつて。後日のれ咎ない先に腹切るが親の爲と。言はせも果す爰な子よ何言やる。詞 澤山うふに腹々と。死で愛目が見せたいかと云ふもはらく涙ある。番頭が表から聲高山の奥家老。詞 本庄會平次様御出と。報せに遑てうろつく奥の間。平兵衛坊主を屏風の影。押込む問もなく本庄會平次。詞 ヤア權左衛門先日以来打絶申した。身が参る事余の儀でない。先達て聞召れう淺草の厚徳院。兩人の命を囁はれ事相濟ぶ其禮。拙者に仰付られた。御自分をも同道致せと心の付た殿のれ指圖。イヤ拵へめせ一所にまからさ。ハアはつと目禮斗り。返答うちつく權左衛門。詞 イヤサ遅なはれハ暮に及ぶ。早ぶくとせり立られ。詞 イヤ何者で御坐ります。其淺草の厚徳院。出家ではござりませぬ。折角お出遊はしても。寺も有やら有まいやら。何を云權左衛門。厚徳院が坊主でなふて何でぞやらふ。手前屋敷へも今日始て。厚徳院共開始め。供廻の立派さ。寺がなふてよい物か。文七の存命嬉し

さし氣が上つたか。譚言を云めさんな。イエー、氣も上らずたは言も申さぬ。形は坊主あたまは撥鬘。妖顯はれた花の帽子。則是にと指出。誰に似て誰で多い様子段々ござれ共。夫はども有杞出入の殿様。掠ては權左衛門。世倅迄存念立す。不調法で死ぬ命措いと存ませぬ。憚りなから曾平次様。文七めを召連られ。御前体宜しく仰上られ下されませと。武士も耻入親子が心底感じ入たる本庄曾平次。氣の毒がるは母の親屏風の蔭には平兵衛が。出るも出られず身の治りれをぶるふてぞ窺ひ居る。イヤ何權左衛門。れ目鏡に違はず屋形を大事にかけ。一子の命を指上ての潔白。併町人の了簡いさいく。佛の弟子にも有髮の僧とて。髪そらぬも有る物。あたまにはかゝらぬ。兎角出家は道義一偏。囉ふたは坊生の器量。遣はされたは殿のれ情け。最負の文七でも故なうてた助られぞ。渡りに船の能折柄囉はれた仕合せ。とい名僧知識を遠俗の例り多い。鼻の先にれ居やつても此方から答はせぬ。還俗と有ハ淺草も居られまい。明寺へれも無益。御意を請て是迄參れば。身が役も早濟だと事を治る了簡に添け涙せきあへぬ。親を押のけつと出。身の上の御容捨忝し。併花岡文七と名迄下され。指た刀の手前も有ハ。此分で助つてはと云はせも果すア、是々。山川屋權六刀々と何所

に刀。死裝束の丸腰親の内へ戻をば町人。とつくりと落付様云て聞する一の聲。親達もよくに聞きやれ。惣じて天下の御制法。科の重い輕いを糺す五刑とて五有。其中でも重いが火付首鉄を入鎖をもつて柱に繋ぎ。柴薪にて焼立れば苦しんで飛ぶはねつ。其中万人に一人鎖が切て。火の外へ出るも有る。出たはろやつが運の強さ。鎖の切たは天然自然に赦し有ハ公の政道。云ははろなたの助つたも。首鐵鎖の切れた同然。御赦されたを死かふとは殿の慈悲を辨へぬ若氣く。親から腰に指付た秤の冥加を忘るなど。詞に落付山川一家只有難しと斗なり。今云ふ通使者の役用相濟も亦歸る。何角仕舞て權左にもれ禮に屋敷へわせたがよからふ。是迎も急ぬ儀と立出れば親子の者。詞に盡ぬ情のれ禮門送りして内に入る。平兵衛は吐息まじくら本庄様のお蔭にて。拙者が天窓へ崇もこなんぞ。れ高様先へ戻したれば旦那の悦びれ顔も見たい。もふれ暇申しませう。チ、ともかろうせられいじやが。衣にろぐはぬ天窓付暮てからがよからふ。イヤ此天窓相應に佛の箔を只今はがす。金欄の袈裟紋紗の衣。白むく共に脱捨る下は木綿の目引縞。出家の脱がら一くるめ手巾に括り引かたげ。又重てと立出る平兵衛が証は後々迄。語り傳ふる思案の極上。渡り奉公の行末り。名にし難波の鴈金組。五人男の其一人

思案で案の平兵衛と世よ誦はるゝ

天満砂原兵法の段

同
 ろうどられた胸ぐら臂標でいかぬ時は直に頭突。ア、是平へう徹過る。あしらふておじやいの。イヤ正九郎殿ろでない。骨の碎る程當る所當らねば覺へぬ。ア、ナニ呑込だ頭突にあふてもひるまず。かう打懸らばまつかせ揚扱。まだ徹もれば岩石標引廻して腰車。斯う投て置た跡は為のころ同然とふせふと儘じや。弟子衆の中で根もよし骨も堅し覺へも早い。今して見せた一ツ二ツの々條は宅間流斗の所作でもない。竹の内流にもする事。親方元龍病氣の間稽古のぬけるが氣の毒で。師匠の代りといふも慮外。此平兵衛いんまの間に正九郎には叶はぬ。イヤ〜ならば精出して其元とは功が違ふ。一昨日習ふた行合投。よいか恐いかして見た。安い事仕まじよ。相手が素人ありや苦あしに行。覺て居る平兵衛油断なされぬ。サアいゑそ。仕らうと行違ふ向らり正九郎が衣被。うら取平兵衛を身捨放とうと板間に響音。ホウしたゝかなめに合された。互の勝負は牛角の稽古場。奥の襖の明立にも心を付て立出る。元龍が娘のお高。コレ平兵衛知りやる通父様。夕邊はよつひと喘詰てまんじり共寝ならず。

今すや〜の寝息が出た。ちつとの間正九郎様音せぬ様に頼ます。目の明次第煎立の薬あげうと。今しかけにかゝつたりや人參がないはいの。太儀ながら平兵衛つい調へて来てたも。爰なお子はい。大名に奉公なされた其癖がやまぬか。一兩が三百目餘する人參。ついで云ふて調ふ物か。弟子なれば正九郎殿聞しや作ても大事ない。去年の春江戸の難儀首尾能事は濟でも。名の立た屋敷の奉公。住馴た江戸も居られず。幸わしは大坂生れ。親からの近付を便にして此天満砂原の借宅。所はかはれと渡世のからぬ兵法指南。早速に弟子も付て。ア、婿いやと思ふ間もなく旦那殿のぶら〜病。氣を引立る配劑人參を入れねばならず。壹匁買半兩買。も亦三兩の上遣ふた。世帯の外の物入ぎちかはするを知つてござつて。候いとて候とは嗜しやませ。其様に叱りやんあお藥に氣がせくから。ついで云ふたはれが誤り。コレ此櫛は江戸の奥様に貰ふて。放し惜う思へ共寶の髪に指合した是を阿波座堀文七様へ持ていて。よい様にして貰やと指出す顔をじろりと見て。平兵衛は涙ぐみ。若お子の有るが上にもほしがるは髪飾。結構な籠甲の櫛薬鍋へ打込で。親御を大事に掛さつしやる。れ前の孝行を思ふに付て聞へぬは兄忠太郎様。三年以前九州へ下つて有附も今にしれず。昨日來た状にも實がなかつ

た。不孝な兄持しやつたの不祥。くし／＼思へどしよとがな。病も身代もあをつたらよいのを買て上まじよ。参り付密紺屋殿にのしたあいでもいふて有か。チ、昨日一寸噂した。今日は父様の御用で正九郎様千右衛門様。文七様を待ては間に合ぬ。コレは高様文七を頼ふより鼻の先な正九郎。お前の用の兼て聞たい。イヤ／＼此様には頼ぬ。平兵衛ちやつといてたもいの。スリヤ正九郎はいやじや迄。同じ弟子に依怙最負さんすない。ハテすねくさい文七殿に約束が有ふと。したのうしやる櫛の世話平兵衛がさしてやる。サアござれ南無三ぼろ／＼ふつて来た。かけがへのない傘一本相合でいませう。イヤれりやいくまい。是ハ扱又すねるか。イヤすねはせぬ雨斗ふりやよけれと。いやなわろかごろ／＼鳴る。ハ、ハ、ハ、嗚やうな音にさへこはがる人が。雷の太鼓の紋所付るが慮外。イヤ平兵衛此紋を付た心は。雷を虫が嫌み看板。アレうたてやごろ／＼に身が入て来たと耳に手あて、踏る。夫程こはくばの幸な明戸棚。雷をふせぐよい城廓はいつてござれつい往てかふ。お高様奥へ氣を付てと。尻つま取てさし傘にばらり／＼と。音をるは余所の白雨の餘り雨。ね嫌の雷殿こつちの方へはでござるまい。平兵衛の留守氣を付て下せんせと。立て行を引留め。こはがる者を獨置て。胸懸

あお高様とほうと抱へて引しむる。エ、あつくるしい父様にいふぞやの聲に驚り手を打けらひ。怖さにひよつと抱付た序に本のね情をど。寄を突退エ、何じやの。師匠の娘を澤山をふに。遊び者じやないぞや。雷を怖い／＼とどふやら怖いれ人じや。ヨ、怖いさかでならぬ間にくときます。師匠を鼻にかけける娘が。文七に惚ても大事ないか。あれには馬と云ふ女房がござる。まだ其上に新町の清川とて。涎流すふかまが有る。氣の多い者に惚ふよりおきがよがる。エ、嫌らしい。文七様と譯有様に覺へのない事いはしやんな。こなたの様な無法者に云譯するも費じやが。惚ぬといふ譯聞しやれ。江戸の屋敷を勤し中互に深ふ云かした。男の名は花岡文七。そはれぬ品で父様一所大坂へ引越ても。心は江戸に残してきた。男の事を忘れ兼明暮戀しう思ふ折から。鴈金屋の文七様弟子入の其日から器量には惚ぬが名に惚て。心ゆかしに挨拶すりや。お師匠の御息女様放埒にござります。女房の有る文七あの、物のれつじやるなどかたい氣を見すへて。江戸の男の戀咄身の上の事親の事。頼にひかぬたのもしさ。文七違ひの譯聞てか。スリヤ鴈金に心はなうて。江戸に居る文七がマア落付た。百廿里あちらの戀は二階から目薬。さー付てくどく正九郎。なるかならぬかろりや又鳴はぐはら／＼。ぴしや

「手ひどいこりやたまらぬと。重戸棚へつばかゝ逃込さまの見苦し。お高も耳に手を覆ひ立も得やらぬ續け鳴。コレお高様あぶないと桐で引込戸棚の内。戸をびつしやりやぐはた〜。これ無体しくさんなあれの〜と泣わめく。聲も打消雷の音。鉄砲雨の大白雨かさも。たまらぬ吹降に。裾も袂もぬれ角鷹金の文七。師匠の招きに隨て。さそひ合せし同門弟。コレ千右衛門今の一つは手ひとかつた。大融寺あたりへ落たかい。ホ、大らた其ぞん。落た程有て上り雨。降ねば邪魔な傘二本。手々に庭へほうりやり。鼻紙出して足駄のををれ。泥めに肌はけがされじと戸棚の外へ逃出る。お高様是は〜。雷を恐がつて箱入のれむす様。氣遣なざるなもふならぬ京の方へ行ました。イヤいかぬ爰にれる。女子じやと悔つても。よふ自由になろはいの思へば〜腹が立。髪をそこなひくさつたと顔赤めて恨位。娘々と襦でじ父の呼聲。エ、折悪い御用で文七様に告られぬ。待ておれいてくると襦押明奥へ行。イヤ千右聞てか何んじやつんと合點が往ぬ。戸棚の内を覗付て往れたが。誰ぞ居るかぞ指覗き。ヤア屈んで居は正九郎か。エ、面目あいざま見て呉れ。ハ、ハ、我禁物ヲ知れて有る。面目ないが今斗りか。イヤ千右。しれてはない。正九郎が雷嫌ひ常々合點がいかなんだ。正九郎化顯のせ

イヤほんく〜に恐いかい。いふなやい文七か見て置た。眞實に恐い物が雷の鳴最中。いやがる娘を引ずり込。戸棚を局にわりやあせしたやい。イヤ夫は。夫はどは云はさぬ横着を奴で有わい。エ、雷が手めを見出され八々九寸の下ぬきももならぬ。何の爲と思ふが隠したハ軍法智略。へ、ちつと兵法習ふ逆仰山を事いふない。コリヤ極印。笑ひ事ぢやないぞよ。おれが邊に軍書讀講釋師か有てな。子供の時からちよ〜聞た唐の軍の大將。ハア何とやら外科の様な名で有たが。チ、思ひ出した劉玄德。こはあもない雷を恐いと云ふて大きな手柄しられたげな。夫を聞込でおれか趣向。雷のた陰で後家や娘の有所でハ。押入戸棚へ一ツにひり。うまゝ軍再々した。今も其格でやりかけたが。兵法遣の娘は手さはい。好物の隣の近邊手もやらぬ。無駄骨と嘶央へ来るお高。南無三雷をたゝきにわせた。桑の木娘のふいやと極印が後にかゝみ居る。父様のをつしやるよは。お三人共によろお出追付お目にかゝりましょ。ちと思ふ子細も有バ獨宛分て逢たい。間所もすくない此家。内の用意する間暫く門へと頼にぞ。何かは知らず師匠の指圖。畏つたと三人一所表にころは出にけれ。お高は病家の襖障子殘方なく開放し。父元龍を抱起し脇息に寄かゝらせ。をこも悪ふはござりませぬか。お氣にかまへば跡

の痛弟子衆は心安い。明日でもなる事氣丈立遊ばすなへ。詞　ホ、氣の付て過分く。元龍が病中に思ひ付た弟子撰。今日と極めたれば夫か結句方に成て。此頃に覺へぬ元氣。云付た專用意よくハ。三人の衆をれから成と一人宛とぞれといへ。アイといらへて上り口。詞　千右衛門様父様が召します。ね獨是へと云渡し其身は小蔭に入にけり。詞　千右衛門にこいと有バ辭義なしに行ぞや。ハテ極印かちやの一番息子。一番乗じてこいと雷が詞に付て。内へはいつて見渡せバ。奥の間の正面に師匠宅問元龍。長病に衰ても眼中小すとき其骨柄。爰へくぞ打招く屬に隨ひあゆみ行く。中仕切の鴨居をり。思ひがけなく極印か上へ落る間。抜間稻妻のひらりと宙よ片手切。二ツに離れ落るを見て。詞　ホ、コリヤ木枕風かな落した物。ハレ鹿相仕た。イヤ鹿相でおありあい。居合抜太刀打精出さるでそばやい働き見事く。跡な兩人とれ成と呼でおくりやれ。ハア御褒義のお詞忝しと。脇指鞘にさし枕取のけるさへしたり類。正九郎サアはいれと元龍の左座に。鼻高々と押直る。文七跡からわせられいと遠慮會釋も荒くれ男。ぼつかばか行く正九郎か。眉間をこすり落るをすかさず利足上。ひつしやりと踏碎く。詞　ホ、ヲ一眼二早足でかされた正九郎。ハ、ぬからぬも指南のね蔭。去あからあつたら枕。油くさうて焚付にも

こりやならぬと。破たを殘らず取て捨て。此次は差詰文七鷹金わせいと聲かける。二人が御用何やらんと。心に恐るゝ師匠の目通り小腰かゝて行かゝる。文七がてへんの上落かゝるに身を開けば。敷居に當つてくはつしとなる。枕をとくと見届てうつと傍に直し置。師匠の前に畏る。元龍微笑み。詞　數多有弟子の中万事勝れし此三人。所作の甲乙心の圖をためしみて。印可は愚宅問流の秘書口傳つたへんと存るから。病中に工夫した枕の試み。怪我なくて満足と師匠の悦び。ハアくはつと三人頭をさげ詞を揃へ。詞　誰にも有れ印可を下され。秘書迄御傳授なされんとは。外聞旁忝しと恐れ入たる風情なり。詞　ヤイ娘よ鬘斗毘布盃々。あいと答もかいしをげに問鍋とさん丸盆に。敷紙したる肴物父の前に持出る。格式あれば辭儀も致さず老人が始め申すと。少受たる祝儀の盃誰彼あしに千右衛門と。極た極印が菊石類。正九郎が一呑にれれじやと思ふ二人はすつかり。文七盃指申そ。詞　是はく思ひがけない身の大慶。弟子冥加に叶ひしと盃三度押戴き。お酌の憚かりれ銚子是へ。何のれ辭儀所ぞい爺様の名代に。祝あてはさむれ肴とお高が挨拶むつと類。詞　千右衛門とお思ふ。鴨居から落た枕敷居へぐはたりが手柄かい。うちが働はしらぬ。此正九郎の早足きかして。人の得せぬ枕の抽子びしやとや

つたが無駄骨。われよりはれれが手際。落る枕を西瓜割。劔術早足をのけて置いて文七へ盃。依
 枯最負な印可はやらさぬ。ア、慮外ながら。イヤ腹を立めざるな。兩人の早業悪いでない。千
 右が抜打正九の早足。でかしたと思ふは未熟。たとへば變化化性にもせよ。落る物を能見
 届其上では切るもよし。又踏もよし。物に恐るゝ氣が有から生もない枕の成敗。怒氣有者も瓢
 瓦は咎す逆。身ら達の様な短氣者が軒下を通る時。屋根の瓦の落かこつて。小鬘先をいはされ
 ても相手は瓦。獨腹は立られまい。此譬のよい教訓。同弟子に最負はせぬ。驚入たは紺屋殿
 町人への惜しい器量。落かこる枕にまぶたも切す。靜ある振舞物に動せず。落付た仕方が則強し
 詞 優美といはふか寛仁大度。身不肖な元龍には過た弟子。認めた此印可渡し申す。此外に家の
 秘書残らすれ身に傳へれば我子同然。惣領の忠太郎は他國の住居。遠い兄弟より近い文七。
 高よゑい兄拵へたぞ。妹と思ふてれくりやれ死後迄も頼入。詞 千右衛門正九郎。偏執に思はず
 共身が代りの文七。師匠にして不足もない。弟子中の頭と思ひ互に中能してれくりやれ。親子
 の堅めの其盃是へしと。取かはすを。分てれ高が嬉がり酒はづれせぬ様に。二人もあかれず
 ア愛へと。挨拶しかなにしかみ顔阿れた師匠の手前。領く計り間に合たら。詞 ね目出たい

印可の相伴あやかるもよからふが。千右もれれも用が有れば吞すへる隙があい。無禮ながらと
 挨拶してすまぬ類して立て行く。詞 コリヤ待て兩人。さつきの様にひひ散し。酒も吞す往
 んで呉ては。師匠を先と文七が氣が濟ぬ。不肖ながら吞で呉。さつても堅いれ頭殿。腹立たは
 了筋違ひ師匠の差圖に異儀はない。爰で吞ぬ代祝ふて樽を入る合點。そふいへば根葉も残りぞ
 文七が氣も落付た。ヲ、又其上を落付そ。ナア千右衛門。チ、正九郎ろふせいと。油斷の透間
 双方より一度に抜て切付け。身をかい沈で二ツの柄兩の手にしつかと取。詞 叶ひもせぬ事すな
 んや。印可を買ふと手見せの仕事。わいら二人を落付ろと。ぐつと一しめ氣を釣上。れ留主
 に成たる二人が脚骨蹴返し蹴たをし踏のめせ。ほう。二人が起上り。詞 彌々お頭に極つ
 た。手並が見たさに痛いめした。もふいぬる文七殿と出て行門の口。戻る平兵衛に物をも云ず
 そ、神立て歸りける。詞 ヤア文七様。れ宿へ参る用が有たが。近付を頼んで埒明た。申お高様
 是御らうじ。てんから。打ぬ間に龍甲の櫛の人参にかはつた。仕合を以て仕り負ました。是
 は嬉しやどれれ薬をしかけんと。立を元龍押留め。詞 ろちや平兵衛の苦勞にして買て呉る人
 参。利た様でも跡へ戻り。夕邊から出た咳の病の變じや。跡へ戻る大病の兄がたこした此狀

ど。蒲團の間より取出し。おれが讀ば咽につまる。詞 文七殿に遠慮はいらぬ讀ぬ所はよんでもらへ。イヤ此文は先程に前の寝入てござんする間にうつと出して見ました。兄様の有付十が九ツ。婿の明吉左右がいふてきた。二人ながら是を見て悦んで下さんせ。詞 ヤイ娘あめをどくに吉左右。尤有付の手掛りは二所も三所も。有る口へも只はいかれぬ身の廻り。拵方事四五十兩金がいる。御不自由を暮しを存じながら申遣はすも氣の毒。當地にしたしい馴染もなし。取持てくれる方へ金の無心は申されぞ。詮方盡てお耳へいれると平兵衛書て有ふがな。折悪い此病指替の一腰。ちぎれ具足武器馬具迄藥代に賣果して。娘の櫛迄なくしたれば。詞 有付は儲に有ても金をやらねばないも同然。うこへはわれが氣も付す吉左右と思ふかやい。目出たし事が目出たらならぬそれで。此様に。ゴホラ。せくはいやい。ゴホラ。と咳入て苦しむ親の胸なであろし。平兵衛に背中擦つてと主従寄つての介抱に。文七も氣を痛め居る。詞 申父様。此間私が願ひ聞き届けて下さんすりや。此咳も發らぬはいな。ならぬ。と被仰る中に。兄様の狀が来て苦になざる。が私や悲しい。金さへ遣れば目出度お濟む。此高の身を賣つて親兄の氣が休めたい。勤めする身は十人が十一人迄。伊達徒らでなりいせぬ世の憂ふしにする勤。此

願ひが叶はねば私や死ぬる。娘可愛が定なら奉公にやつて下さんせと。心に思ふ有丈は云ふても盡ぬ涙なる。詞 ナ、能お被仰つた出來しやつた。平兵衛が申すは憚りながら爰は旦那の了簡所。覺悟極めたお高様のお願ひ。若もの事が有つた時は奉公させます悲しさより。取返されぬ跡の歎き。ろうでないか文七様と。言へども金の才覺事ならぬ我身の不甲斐なさ。指俯伏て返答なし。元龍涙押拭ひ。詞 娘が孝行過分。兄に出世を爲す奉公悲しけれど是非に及ばぬ。文七は所が新町の事知つて居めそ。奉公人に戀う當らぬ。慈悲な親方の所へ賣て遣て下されど。聲もかすりしたぐり咳。親の思ひ子の思ひ。思ひ重なる愛涙。思ひやられていぢらし。涙片手に風當じと枕屏風を引廻し。文七連れて次へ出。詞 平兵衛が存せるは迎も成されにやあらぬ奉公。一日でも早いカ勝手。心當の所は無いか能い所へ遣りました。イヤ何處其處と言ふふより。念比して居る清川が親方。備前屋が能かろかい。夫れは幸ひれ前の知音と一所に置けば。旦那殿の案じも有るまい。ナント何卒其所へ頼みます。サアそんなら直に廊へ往て相談を仕掛けて見よ。お娘の器量見たいと言ひ、親方を連れて來ふ。夫れを御太儀。イヤ平兵衛太儀など言はる。文七が本意じやござらぬ。親にかゝりの不甲斐なさ。金の才覺能ふせいで師

匠の娘に勤めさす。口惜いと云ふ斗りエ、儘よ。身の云譯をする手間で早ふ行くが働きじやと。行くをれ高が呼返して。今彼處から聞た。遠い所を往たり來たりれ前も御苦勞。親方殿が爰へ来て。相談の何んの斯の父様に聞せとじない。いつそ私を連れて往て彼方で相談極て欲しい。コレハ能ふれ氣が注た。うちかはと問取程御病人の障になる。連立て御坐りませ。詞平兵衛もれ供したる旦那の傍に人がない。文七様頼みます。西日でもまばゆい是召せと管笠を手に渡せば。父様の目が明たら能い様に申たも。己が何んの寝られうぞい。遣らふとはいふたが今日や明日の事では有るまい。四五日過てと思ふたに最ふ行くか。親方が氣に入つて直に居ると言はふとも。今一度戻れ顔が見たい。奉公は仕馴れたと思はふが。屋敷の奉公と新町とは違ふぞよ。無体な客に出合ふていぢらる言譯。切らいでならずバ髪ハ切れ指は切るな爪も放すな。美しう産育てた。母が死しなに頼むと云ふた。満足な体に疵付けてくれな。コリヤ此守りは病の祈禱。七十に及んぞ元龍祈禱はいらぬ。是を遣る持て往け。流行風疫病受取て呉るなど。親の歎きに引る娘。行きつ戻りつ幾度か。絞る袂を引分けて行くも是非なや

安治川芝居足揃の段

難波津に冬籠なる顔見世の。外に又ない繁昌は今を盛の若衆形。梅村彌三郎が初座本。安治川の芝居取立て名代の役者手を揃へ。足揃へは近所の茶屋はねる義縁を鯉屋と出かけ。灯笼か、やく軒の下。漁火に寄る魚ならで藻に住む虫の我一と鑿盡し見に北濱から。米屋じや鹽屋じやわしは鬘髪付や。三味線屋の從弟迄知邊を云ふて押あへり。潜り細目にコレハ押すまい。皆御最負故れ出下されましたも。最早方々からの先約。あかい中に内は皆詰りました。夫故座本が頭取以て御断申します。初日出しましてから出の程を願ひ奉りますと。断云も聞はこ入いやくと戸をめぐ斗り叩く折柄。問屋の手代が案内して西國方の武士の奥。稚子をおとなに抱せ供のはしたも輕々敷。灯笼の火を知邊にて。歩み寄る鯉屋が門。申角左衛門様。此表の景氣を御覽じませ。夥敷しい群集で御坐りませぬか。サレバ一年に一度國元豊後の市芝居がとんとこれさ。イヤ又顔見世の景氣に目に懸けたい。其節迄御逗留なら。親方がこれ目に懸るで御坐りませう。チ、其時分は連合鶴木水殿も登らしやらふ。大坂へ叶はぬ用事暇願ふて次手にと。大坂見がてら一所に立前日になつて。殿様から俄かの御用。仕舞次勇跡から登らふ。稚子連ての長旅。冷ぬ先一日も早ふと有故登りました。ハッア、左様で御

座りまするか。イヤとや角申中、轡盡も追付始り。御案内申まじよ。申しいと様ちつとの間ね待遊ばせ。面白い事ね目に懸る。サ、待て居る早ふ見せて呉いよ。アイ〜と群集押分門口をどん〜。開て貫を。誰じや見物なら成ませぬ。イヤ豊後屋から来ました。チイ金元のね手代衆。早ふ戸をぐはつたりひしり。コレ約束の壘のけて有かの。成程のけて御座ります。ろんあらばお出遊ばせ。道ちと避てもらひまじよ。角左衛門様御案内。サア〜ね這入成れませと運て入跡無理無体。一度にどし込一ト崩れぬいとう〜。とう〜たらり。ぶらぶら壽き祝ふ式三番鼓の音も潔よし。去れば此頭名に立て五人男と聞へし。人を羽がいの下に見る鷹金の文七を頭とし。大坂中を鳴あるく雷の正九郎。仁王造の荒男案の平兵衛。次いで極印千右衛門。跡は布袋の市右衛門とて男立。人の喧嘩を買あるき五人が中の慰に。鳴門の浪の打連て。岩も砕くる阿波座より。足撫を見物と皆一様に尺八を。腰にさす〜さすがにも。人を恐れぬ振舞なり。鯉屋が門に立はぶかり。極印よおちら町よ立てたつた大柄な男めよい仕物じや有つたに。お頭がよしにせいと云れた故。よい慰を無にした。されぬ。コレ雷夫れよりも横町の前髪め。よい仕物で有つたに。布袋よろんな物は無かつたぞよ。ハテ有つた

はい。十五六な前髪が相手に。いや若衆に。コリヤそんな威氣計りつくすに依つてな。わりや此中西口で踏れたはい。案よ滅相な事云ふない。敵れた事有が踏れてよい物か。隠すない。おりや見て居た。ムウ見て居たか。コリヤ其時に強い手柄をしたは。どふしたりや。大事に懸て煙草入に入れて置たが。有か知らぬ。ム、有ぞ〜。極印よコレ見い。ドレア、滅多に開あ散ぞ〜。コレ何んじや。踏だやつ足の毛じや。踏れながら引拔たは。摺剝た所へ付る思案。何んぞ強い手柄。何吐すやら跡へ廻つて平兵衛が面めて来ました。サアろんな事じや有ふと思ふてをりや黙つて戻つて寝た。サテ夜が寝よい物じやい。コリヤ雷何時でも夜の寝られぬ折に敵れて来い〜。阿呆つくせ。ろふ云らずと我もちつと。人投るすべ知れ。イヤ〜そりや我がのが無分別じや。投いでも敵いでも男ハ男。惣躰皆男を立ると云ふて。科もない者投たり踏だり。そりや喧嘩仕。利は利非は非を立ると云ふて。嗜め〜。何と見たか。皆降参〜。ハ〜お頭知つてか。今度の座本は布袋めが知音じやげな。外の芝居と格別愛顧してまます成ます。ハテそふはか。其代りに芝居ではの利所を見て我をれと。當にも成らぬ自慢たら〜云散し。門の戸をど〜。座本の一客布袋の市右衛門中間の者。皆腰に

引付て来た。愛願してやる程に。愛を明おれ。あけぬかい。どふじや明ぬぞよ。じやと云ふてせう事がない。エ、埒の明ぬ。明ねらねハ門口を踏破斗りと。櫻臺鐵鉞打たる草履下駄ぐつたり。紙頭の形菊石類。極印が仕業と知られたり。エ、喧しい誰じやいと。戸を明て出る願取の。首筋ちよつと撮投。どうといはして踏所を。コリヤ置け。案をせとめる。ハチさつたにもお願が云はれたを何所へ聞ぞい。コレうな人。思はぬ目よ逢ふて腹が立ふ。了簡して貰ひましょ。鷹金組が揃ふて来ました。座本に近付に成やんしよと云て貰らをと。和らかう云ふも氣味悪くハイハイは雁んでぞ入にける。又してもくほたへを止めか。無用の腕立致すまいと。師匠へ書た誓紙忘れたかと。呵るはね頭是非もなく。エ、どんげたと咬やきける。手燭手で座本梅村瀧三郎。是迄に迎に参りましたと願取諸共土に手をつき。市右衛門様には春よりお馴染。兼々ね嚙承りりをりまする。何にも存せませぬ私。皆様の御最負を持まして今度座本を致します。チット皆迄云ふまい。夫聞て居ては果ぬ。定めて珍らしい役者をたんと抱へて。顔見せには引合すで有ふの。そこでこつ方も云合して。皆揃を着て来た。石噺子では無い。此方の立者を引合そふ。あんどやふれ。扱是に居られまする。鷹金文七と云

ふて一等の立役立るの上手。其上に滑川と云ふ色事仕。其次が案の平兵衛。きやつは武道がよいでゑす。マア趣向を立る事が殿しい。前江戸で淺草の坊主に成て大きな趣向を出しました。れつと跡は云ハぬ事。其次が雷正九郎がらがよい。敵役の天じや。又こちらなが極印千右衛門。名はよいが人相が悪い。皇子事はならぬはいの。評判付するなら吉の字は白ふして置しやれ。我等差詰半道かい。五人揃ふた所は殿しいものか。ついでに己れが名の因縁女は嫌らしい若衆好。子供を愛すると云ふ心で。布袋と付た作者はね頭。ナントゑい名を付ふがの。コレわしは鷹金屋と云ふて紺屋。染物が有なられ越て貰を。其替り最負しませう。彌々頼上まする。マアお近付のお盃御酒一ツ上ましたい。先おはいり下されませと先へ立て案内すれば。跡押は市右衛門。コレ願取殿さつきには投られて痛からふ。これも覺の有事じやと。打連て奥へ通れば酒に成。酌ども盡す。呑ども變らぬ面白の。不器も傾ひく枕の夢の。醒ると思へば泉は其儘。盡せぬ芝居ぞ目出たけれ。秀句にかけて舞うたふ祝義の詞譽詞。ゑいやの群集の中。押分。主水の妻漸々表に溜息つき。のふ角左衛門見やつたか。今の先き来た五人連。ろまら幾りに人もなげな事云散し。喧嘩でもでけて騒だらば其子に怪我でもあつては

と。皆見ずに往ますはいの。詞 成程夫れは御尤も。私も左様には存じ居りましたれ共。龜松様も面白ふ御覽じて御座るにも。差扣へ居りました。手代殿今夜はまめ何角世話で御座つた。あのおつしやります事。親方が随分御馳走仕れと申付ましても。何角氣の付惣がち。幸助殿灯燈に蠟燭は御座りますか。龜様は私が肩くまに乗ませうサア。是へれ出遊ばせ。ハアこりやお雪階が片足斗り。ア、若人せりの中で落しはせぬかと云ふ内から。戸をぐらぐら。ハアこり聲。詞 コレ侍ちよと逢ひたい。ハアアではれと云ふに。身共に來いとは何んぞ用事が御座るかあ。有ればこそ呼に出た。あの様な無禮をしやつても大事ないか。無禮とは覺ない。イヤサ覺ないとい云はさぬ。來て見やつたら知れる事。懐手して居る中れじやらいで。來にや引摺て行ぞやと。嵩にかゝれば皆はあ。角左衛門は騒がぬ氣色。詞 ハテそんならバ參らふ。コレあの中へ往て若もの事の有ては。イヤ氣遣遊ばされますな。様子は何か存じませぬ共無禮と有ばこつちの誤り。誤れば濟ます。暫らくお待ち下されませ。チ、よい合點サアえいりやと。先に立せて内から戸を。引立る樞の音はつたりと云ふも人々の。臆にこたへる斗りなり。詞 申し奥様めれば彼最前の五人連。鷹金組と云ふ當所の男立。角のとれた角左衛門様氣遣ひは御坐りませぬ。との中ます物の喧嘩ハ降物。事に成すばよござりますが。サア私も夫れが氣遣に御坐る。ついの氣遣ひ斗りでない譯聞て下され。先きの連合に別れ此子は幼少。どうかかうかと評議の上主水殿を跡目夫婦此子を育よと。一家の差圖否とも云れぬ。詞 後の夫鶴木主水殿兄弟衆。大坂に御坐つても便りも無ければ尋ねがてら。お暇願ふて來ました。連合の登らつしやれぬ中若しも怪我でも有てはと。思へば心も落付ぬ。ア、氣遣しと案じ彌増す。内はとさぐさやれ喧嘩よそりや打たは敲いたいと。聞度毎にハア。何じや角左衛門様をぶつた。此幸助めがさかあいとあせれを甲斐も有らばと。とやせん門をまめたれば。入にもいられず主従四人。手代も戸口に聞耳立て。只はあくと斗なり。暫らく有て表口すく出るハ。ヤア角左衛門。詞 氣遣ふたが何事もあう濟ましたか。様子はとふじや。お聞なされませ。有ふ事で御坐りですか。最前を歸り成さるゝ時。此れ子を抱まして通りしなに。持添たお草履片し。彼鷹金文七が受て居る大盃の中へはまつたを存せぬは此方の不調法。腹立るあつちは尤。只管に詫致して何事なく相濟まして御坐ります。麻御退屈遊されませう。サア若旦那に歸り避いせ。詞 コリヤ角左衛門。ソレ額から血が出るは。敲かれたか切れたか。なせ相手をば

と。皆見ずに往ますはいの。詞 成程夫れは御尤も。私も左様には存じ居りましたれ共。龜松様も面白ふ御覽じて御座るにぞ。差扣へ居りました。手代殿今夜はまあ何角世話で御座つた。おのおつしやります事。親方が随分御馳走仕れと申付ましても。何角氣の付ぬがち。幸助殿灯燈に蠟燭は御座りますか。龜様は私が肩くまに乗ませうサア。是へれ出遊ばせ。ハアこりやお雪踏が片足斗り。ア、若人せりの中で落しはせぬかと云ふ内から。戸をぐらぐら。雷聲。詞 コレ侍ちよと逢ひたい。ハアテはれと云ふに。身共に來いとは何んぞ用事が御座るかあ。有ればこそ呼に出た。あの様な無禮をしやつても大事ないか。無禮とは覺ない。イヤサ覺ないとい云はさぬ。來て見やつたら知れる事。懐手して居る中れじやらいで。來にや引摺て行ぞやと。嵩にかくれバ皆はあ。角左衛門は騒がぬ氣色。詞 ハテそんならバ參らふ。コレあの中へ往て若もの事の有ては。イヤ氣遣遊ばされますな。様子は何か存じませぬ共無禮と有ばこつちの誤り。誤れば濟ます。暫らくお待ち下されませ。チ、よい合點サアといりやと。先に立せて内から戸を。引立る櫃の音はつたりと云ふも人々の。臆にこたへる斗りなり。詞 申し奥様あれは彼最前の五人連。鷹金組と云ふ當所の男立。角のとれた角左衛門様氣遣

ひは御坐りませぬ。とハチます物の喧嘩の降物。事に成すばよござりますが。サア私も夫れが氣遣に御坐る。ついの氣遣ひ斗りでない譯聞て下され。先きの連合に別れ此子は幼少。どうかかうかと評議の上主水殿を跡目夫婦此子を育よと。一家の差圖否とも云れせ。詞 後の夫鶴木主水殿兄弟衆。大坂に御坐つても便りも無ければ尋ねがてら。お暇願ふて來ました。連合の登らつしやれぬ中若しも怪我でも有ては。思へば心も落付ぬ。ア、氣遣しと案じ彌増す。内はどさくさやれ喧嘩よそりや打たは敲いたいと。聞度毎にハア。何じや角左衛門様をぶつた。此幸助めがさかあいとあせれと甲斐も有らばこら。とやせん門をまめたれば。入にもいられず主従四人。手代も戸口に聞耳立て。只はあくと斗なり。暫らく有て表口すこ。出るハ。ヤア角左衛門。詞 氣遣ふたが何事もあう濟ましたか。様子はどふじや。お聞なされませ。有ふ事で御坐りますか。最前を歸り成さるゝ時。此れ子を抱まして通りしなに。持添たお草履片し。彼鷹金文七が受て居る大盃の中へはまつたを存せぬは此方の不調法。腹立るあつちは尤。只管に詫致して何事なく相濟まして御坐ります。鷹御退屈遊されませう。サア若旦那歸り避いせ。詞 コリヤ角左衛門。ソレ額から血が出るは。敲かれたか切れたか。なせ相手をば

殺さぬぞと。詞の中鼻紙に浸し見て南無三寶。文七めに打れたる。扇の骨疵付たか。ハアはつとほせしか悟れじと。詞ハ、若旦那ふでかし遊ばせ。切れたらばなせ相手を殺さぬとはようれつしやつた。併し此疵は左様では御坐りませぬ。お待兼なされうと氣をせいて歸りしな。柱の角で打ましたが。血が出よふ共思はぬ怪我と。心の禮を脇道から。最早に歸り遊ばされいと何げなく。云ぬに心も落付て。いざ歸らふ先きに立て主人をト先づ旅宿迄送り届けて其上で。れのれ無念を晴さずではと。屍目に跡を白眼詰。歸る心ぞ「口惜き。更行まことに心せき脱て出たる角左衛門。足揃はず終るまじ。文七に出合て無念を晴さん心の寢刀。鋭き武士の堪へぬ心一筋に。安治川橋に差懸れば。向ふからくる人影の形は臍に聲高く。極印やい雷やいと云ふは必定文七組。爰で逢ふは天の與へ是迄はまじ半町。飛懸つて無二無三イヤ〜。うれも鼻怯來るは治定名乗懸て勝負せんと。帯を強引締〜襦小短く端折て身輕に出立。下緒はづして鉢巻しめ目釘しめして鯉口寛げ。宵の耻辱を清がんと。橋臺の欄干を小楯に取て扣へ居る。待間程なく橋板をぐはたり〜と。草履下駄の音騒敷打連て幅も狭しと渡り來る。詞ヤアうれへ來るは文七か。宵に眉間打破られて武士立ねハ樽憤晴さんと待受た。サア覺悟〜と刀

すらりと抜放せば。のふ悲しや暴れ者免せ〜と市右衛門四人が後に屈み居る。文七怯とも騒がばこそ。詞ハテ樽憤はれぬ相手にと云はれてからはとふも引れぬ。相手にならふと差向ふを。コレは頭待た。此喧嘩平兵衛が貰ひます。欄干の高床机待ていやしやれ。皆も往〜。ハテ往と云ふに。コレは待ちよと目に懸りたい。元此喧嘩は文七が盃の中へ草履の入た故。夫から起つてお待の眉間疵の付く程打たのはこつちの誤り。御立腹は御尤併し。爰をよく開て下さりませ。あの文七は私がちつと遁れぬ大事に懸にや成ぬ人。様子ハ云ふても御存ない事。何か無しにに侍頼まず。替りに此平兵衛ふちなりと。踏なりとお腹の愈程。とふ成共御存分ふ成されませ。イヤサそつちはそふでも此方の立ぬ。此刀が目に見へぬか。サア其二本差た譯も知つて居りますに依て其處を幾重にも御了簡。コレをしをサア打つしやれ。サア踏つしやれ。コレ手を下げて頼みます。チ、云懸つた事引れはせまい。コレは侍あの様に頼む事を否とも。ねつしやるまい。イヤ〜わりや搦ふな。サ只管に此平兵衛が爰を〜。イヤろふでない。一人で足ずは此正九郎も踏れまじよ。チ、此千右衛門も踏れまじよ。三人を存分に成されませ。手向ハ少しも致さぬ。コレ頼まず〜と。欺し寄て眞向碎けと打込尺八。眼眩でうんど

仰向に捨たる刀。取をり早く正九郎がばらりずんと切付る。やれ早まるなど平兵衛隙さず抱とむれは。又打懸る極印を留るゝ鷹金文七。詞 ヤア卑怯者欺打に打せたなど。痛手も屈せず指添引抜立上れば。詞 ヤア鹿相云ふまい文七の卑怯せぬ此留たが目に見へぬか。イヤア云ふなく其手は喰ぬと。又切付るを引外し先づ暫くと宥むる文七。と、むる平兵衛手向ふ正九郎千右衛門。中に布袋はうろくきよろくあちらでは踏飛され。こちらでは踏飛され。揉合五人に打交り供に氣を揉。とむるも聞ぬ強氣の二人たゝみ懸て切付れば。運の極めか角左衛門其儘息は絶にけり。詞 ハッ早殺たか。お頭とふせう。平兵衛騒な殺したのあいらなれども相手は文七。ハア是非があい此上は随分と隠せ。死骸を川へ。をつと台點と引提て。橋の上から深みを見合せさんぶと打込。詞 お頭往ふかナ、と。打連立て反さぬ氣。野でも山でも好た者には添ふたが能。おりやそら思ふて居るのいの。そうだんべい。誰で有ふとも悪い奴めは切たが能。身いろを思ふて居るはいの。そうだんべい。強い相手が扱て居るなら逆さか能。こちやうら思ふていやんする。そうだんべい。しでくの聞分してくの首尾と。打鎖き足を早めて

越後町局炭火の段

爰に二ツの悪所が御座る。二ツ二親に見捨てすとんと捨られて。三ツ見飽ぬ女郎や禿を集めて拳酒無利酒口舌事。ワイワイトサ。粹も不粹もれしなへて夜毎毎毎に通ひ廊の四筋町。冬枯もせぬ夕景色。米の門立道中に。花を揃へて花どろは。誠の花も及びなく。散事知らぬ里どかし。流の身には様々の愛事多き其中に。不便やお高は此里へどんと沈みていつ迄も身に花咲ぬ岩崎と。名を替へ風も往古に。變り果たる衣装付。出立榮せし八文字。九軒の方より是も又同じ流の姉女郎。備前屋の清川とて廊に名有全盛の。松の位も色故にはしの京屋の戻り懸け。局の前にて行合。詞 是は、岩崎主とらうじやいな。わしも昨日から居續の田舎の客でうれば、もてぬ事。ろりや道理夕邊宵に局迄文七様がみへたが夫れなら逢は成んすまい。いへいな其所は疎忽らぬ。毎もの通り太鼓過に五人連のぞめき歌。文様の尺八寝耳にも聞はずさず。漸く首尾して逢やしたが。お前今日何所へじやゑ。去ればいな。毎日く川様に身の上の難儀咄。じやと云ふて誰に相談する人もなし。をまへを便にぞふぞ江戸の文七様に二度廻り逢迄客に肌を合すまいと親の内より急度覺期して。居れども月々の紋日常の日柄を一日賣る事なら

ぬ身を。 詞 私が親元龍殿は文七様の兵法の師匠。其娘なればとて。文七様とおまへと身に引き懸てのお世話。夫ふれはこそ。勤する日より今日迄客の座敷も勤めはれふたりの隣。 詞 夫に今日は佐渡屋町の櫓屋からかりに来て。おまへも留主なりちつと世話に成恩様にかして戻ろと思ふたれば。囁ひに遣れと客も宿屋もせがむのを。どうやら斯やら間に合ひ来て戻つたが。大方今夜の親方が呼付てのふ恐やと。 詞 半に遣手の玉が走り来て。 是岩崎様櫓屋からの囁ふて異いとせきくの使。れ前ハ何所の約束で行事が成ぬへ。ほんに今迄何百人か女郎様方を廻したければ。こなんの様な氣隨者をついぞ見ぬ。今日も差詰は身揚と黒い目で見て置た。よう内證のかが廻る。したがるく銀て有まい。必ず跡で親方に袴など着さんすなど喚き散せば。 詞 コレお玉女郎黙らしやれ。岩崎様も定まりの綾日は賣んす其上に何いやる事が有る。ヨウしして牛の寝た程給銀を取んした物。相應に賣いで親方様は何んで立。斯いや卑しければ。崎さんの客からしや迎鑑半文貰はねば。云事がつとにでんしよ。貰はぬからは執成云はふ筈もない。見た事聞た事残らず告る覺悟さんせ。 詞 序じやに依て云ふが彼のふうくの文七さんを甲に着て。常々清川さんのたんが撰ひ嗜しやんせとやりこむる。 詞 玉最ふ云て下さんな川さん

黙つて下さんせ。皆な私から起つた事。此里に勤むる中の遣手衆を頼まにやならず。 詞 是を見立がましければ其方へ私が心ざしと禿に持せし香包服帛開いて延紙に。ついひん捨る山吹色。 詞 エとまりや角の有のかへと俄に作るけらく笑ひ。 詞 ハ、崎さんとした事が何の是には及ばぬに。れ心ざしじや納めて置せん度ハ私も血の道で。小宿に三日の飯代をさせうと思ふたに。捨れば捨る神も有。川さん崎さん暮る迄爰で緩りと咄さんせ。櫓屋へはよい様にめしが中で返事せう。どりや往てかふとちよこく走りかねに遣はる身を憂や。とつちりてんく。暮ぬ先より鼻歌で。人を痛めて慰みに廊中を鳴喚く。 雷庄九郎ひづみ返つてのさ張歩行。 詞 ホウ清川殿お頭に逢んせぬか。安治川の出入に付て逢たさに。阿波座の濱屋へ往て尋ても今朝からまだ来ぬと云が知らずか。いゑく私も逢たさに先きにから待て居るはいな。エ、此寒いのに濡なればこそ出張して待んすれ。イヤ濡のついでに岩崎殿。いつぞやから云て置た返事はとあじやな。お高殿の時分からじやらくらは云たれど。師匠の娘丈で腰をへてよう云はずにちよびくど端々惚。師匠は死ると差構のあい勤めの身。錢さへ出せば口たこくに及ばね共。其所を口説は實にきて貰ひたさ。 詞 殊にれ頭も世話中のこなたなれば。互ひに退ぬ中濡にさつしやつ

ても悪くない正九郎。友達共も知つて居れば是非立てと寄添は。手を腕放し引退。男立ると云はんすがそりややくたい。岩崎様をマア誰じやと思はんす。はて知れた女郎。サアさと思ふてはさんすが強い違ひ。岩崎様の爺御兵法のお師匠。文七様の器量を見立印可を許し。一人娘もそなたが妹にして。死だ跡迄頼との遺言にまへも知つて、有ふかな。へてうりや知れた事文七の妹には惚る事は成ませぬか。イヤ成ぬてはないかいな。親の定める縁付ても氣ふ入らぬ所へは。いやと云ふて往ぬじやないかへ。おぢな事を云しやるはいの。縁付の事じやない。賣が勤買が客エ、雷さんどんな事聞たうない。賣の買のといやらしい。勤する身は猶以ていな男は踏飛して逢はぬくきつう逢いぬ。とは云ふ物の文七様に貫んせ。兄御がえうといはんすりや岩崎様おれが逢す。お頭様を頼まんせ。コレ川州成る様でならぬ事云はしやる。お頭に向ふてろんな事。おどぞそこで逢して。文様の許しが出ねばいかな。エ、お頭がね頭なればお内義迄理屈臭ひ。どりやまん直しにぞめきの奴等二三人蹴倒して來まそふと頭を打振て立歸る。ほんに川様のお蔭てわしが病の根拔がした。はてごろくのした跡は氣色がよいじやないかいなど。笑ふ中にあれ見さんせ東から來る二人連。一人は借に江戸風若し近付をら此

形を見らるゝも耻かしい。暫しが中川様とわしが局で咄さふと。打連は入る其跡へ。當世風の江戸頭巾ま深に着なす風俗は。武家と町とあい駿の金持へも高尚な。問屋の手代とたぼしく廓の案内知り顔に。局格子を指覗き。行後より岩崎が禿の由彌。申くと走り付。あの局から前の名は文七様とは。申ませぬか問ふて來いとたしやんする。いや、手前ハ文七とは申さぬが。はてめんような名を問しやると不審立れば。これ旦那郎は今日が初めじやとたつしやれど。乗てた出成されたやらに馴染が有らふな。ア、お手が悪い。イヤ是は迷惑。神もつて色里見物は江戸から登て今日が初め。勿論呼るゝ覺なし。極つて人違。此方では御坐らぬと歸つて云やと行過れば。ろんなら由彌はひんしやんと。歸るを遅しと岩崎も川も諸共表に出。エ、きりり歩行いの。何とじやとふじや。文七様とは云ぬらや。いへこちやそんな者じやない。人違へで有ふと云ひ捨にして行んした。はて不思議な頭巾で顔は見へねども。風俗なら物腰なら江戸で別れた文七様に極つた。常々戀しい床しいと戀ひ焦ると男見違ふ等もなし。ほんに夫れよ今の名は違ふて有る。山川屋の權六様と問したらよかつた物。今から由彌を遣つたりとも最ふ逢れまい。エこひよんな事して退た川様とふを逢るゝ様に。思案して下ぎ

んせと。おろ／＼涙に暮合は。間夫の逢瀬の天の川。鵲ならぬ鴈金文七。霜夜に冴る尺八の音色優しく頼くれれば。そりや彼人よと走り寄。さつきにから待て居るになせ運ぶ御坐んした。されバ／＼今日は正九郎がこれの所へ往ふと吐して。一日釣くさつた。晝から爰へはこなんだか。見へた／＼夫れに付て可笑い咄。いつもの通り岩崎様をしみ買濃口説んすと思はんせ。其所でをまへの教の通り兄弟をかきに遣たれば。おのわんばくな正九郎様が一句も上らすつころ／＼と往んした。詞。ホウそりや出来た。おいつも男磨やつ其理語には云分有まい。重ねてひとつでも吐したら今度は已れに任せて置きや。見れば岩崎殿の類持が惡々。氣色も悪くば親方にそふ云ふてなせ薬を呑しやれぬ。常々頼んで置に清川も氣が付ぬ。イエ／＼あの顔持の惡いは別の事でもない。さつきに江戸の文七様によう似た人が通つた連。夫からくよ／＼物案の詞。ヲ、そりや道理したが氣遣さしやんな。大坂の文七の命さへ有れば江戸の文七殿に逢してや。これぐ／＼思ふまいと三人鼎にしみ／＼と咄の折柄。どん／＼と西口より知らせの太鼓。ぞめきの群集も口々に喧嘩／＼と騒ぎ立西を東と走行。詞。大方中間の奴等である。往て來まざるの成まいと。尺八引提行んとするを二人は袂に取付て。今夜計りは最ふよしにして下

さんせ。是手を合して拜みます。エ、邪魔するなど振切を格子に引握しがみ付。同。年寄つた母御持ながら情ない喧嘩好。若し身に過ち有らば私や何とせう悲しやと。歎けを耳にも聞入れぞ。又駈出すを取付絶り女力の甲斐／＼敷。岩崎が局へ無体に押込表の戸を。はたとさしもの文七も籠の鳥見るとくなり。喧嘩の相人は案の平兵衛。跡より以前の問屋の手代着物羽織も引裂れ。片息に成てこりや待て男。詞。踏れたり投られたは了簡もならあが。手形の入た鼻紙袋取れては。親方へも往れずも生きても死でもじや。覺悟せよと取付を引外し首筋つかみ。詞。エ、毛二才めさつきにから覺もない。難題を吐せども。くらひぞれじやと思おて了簡して通せば付廻つて盗人呼はり。其失物がこつちにないと新町橋の上から川へ埋むが合點かア、口廣ふ云ふな／＼。わが盗んぶと云ふ事は儘に證據みて置た。ぞふ吐せば猶めんばれに懐見せうと突飛す其中に。鼻紙袋を岩崎が格子へ投込こりやみたかど。内懐迄やつとひろげ是でもおれが盗んだかど。そ首擱んで擔ぎ投。溝石へうんと云はせ腰も折れよと踏飛ばせば。始めの詞に似もやらずの死すれ許しと。漸／＼に起上り足を抱へてゑつち悉ち。越後町筋一さんに跡をもみずして返歸る。連は所の案内知らず局の格子に身を潜め。始終をみすまじ飛で出。詞。物を盗れ

打擲にあい。連の身としてみていられず最ふ此上のおれが相人ぞ。頭巾擦り炭火の光りに顔見合。同 ヤアろなたは。こなたはヲ、夫れよ。淺草の寺僧と偽り命乞しられし平兵衛殿じやないか。フウ夫ならこなたさんは花岡文七殿ろ。元服故に見違へし是は〜珍らしやと。互に忙れて居たりしが。先以て其節は其元の働きで不思議に命助かり。殿の手前へ遠慮も有ば當分江戸の住居もならぞ。幸い當地中の島邊の江戸問屋に知音有て二年近當所の住居。同 扱は左様か知ぬ事とて残念。何はともあれ先づ逢す人が有。岩崎様〜早う〜。ヲ、忙しな何じやいのと云つゝ表に走り出思はず互ひに顔と顔。同 エイレまへ文七様。れ高殿か。是は思ひ懸もない。さいな私も悔くりして夢でい無いかと察じらるゝ。さつきによう似た風俗もほんになまへて有たかい。まあ何から云ふと思ふて嬉しい中にも耻かしぬ。此形を見て下んせ。をまへの事を明暮にうつら〜と懸焦がれ。ようまゝ生ていたわいなと。抱き付てさめ〜と盡せぬ。物は涙なり。ア、これ〜爰は往還人も見る互ひの咄の局の内ほんにうふじや。是からは文七様に悲しい住居見せませう。サア〜こちへと手に手を取。打連入より。局の戸きり〜しやんと。手早い陰策。同 これ岩崎様れは阿波座の瀧屋へ往て坐敷が明て有か見て來ます。ハアも音

がせぬ。道理〜と行過る隣の局の内より。平兵衛〜ちよと逢ふと呼ぶ聲に。同 ナ、誰じや文七殿か。宵おら表をさし廻してきついほめき。暗ましやれと何心なく局の戸。明る所を内より火鉢を取て平兵衛が肩間。微塵にせんと打付る。はつと驚き身を開けば炭火は散亂灰煙透を有さず引抜て切付る。抜つ潜つつ床机退取丁を受。同 マア〜待た早まるまい氣が違ふたか文七殿。此平兵衛に何の科何誤りが有て手込にさつしやる。ヤアいふあ〜〜。儂が常々喧嘩に事寄せ盗ひろぐと廊の噂。平兵衛に限りよもやと思ひ聞流して置たるに。宵の出入は儂が相手文七が居る共知らず。喧嘩の最中此椅子へ投込ぐ。此紙入何と覺が有ふがな。盗する奴生置ては中間の者の面汚し。覺悟せいと切付るを飛違へて床机をたて。薙ればしさり打ば開き受流し受留る。音に驚き岩崎權六清川も走り出。まあ〜待たと留てもとまらず聞入ねば。上着を扱身に打懸〜しがみ付て抱とむる。文七も氣を揉わけ放せ〜と捻合ふたり。チ、どう留て下さつた。たつた一言平兵衛が云事有とどつかと座り。同 から顯はるこ上からは盗みすること隠すに及ばず。去ながら身の爲にせぬ一通り聞て貫らを。知らるゝ通り少さい時から平兵衛か守育てたる岩崎様。兄御の爲に此里へ身を賣り賣なら。權六殿へ義理立て客に逢ぬ氣尤

どいとしぼく。晝夜廊へ入込み局へ寄くる客共は投倒し踏倒し。今日の今迄男にびつ共指差せず。月々の紋日は文七殿の世話になつて親方の手前七濟ども。只濟ぬ内證の拂万事に行詰り。難義の体を見ながら見る影もない平兵衛なれば。どふかかふかと心に思ふ折から九軒で大きい出入を仕出し。二三人蹴倒したれば連のやつらもばらばらと。迹跡に鼻紙袋落て有ても取たに當る是拾ふては平兵衛が男が立ぬ。何とぞ相手に返さんと二三町退駈しがかい暮に行方知らず。明ても先きの名も知えず。中に一步甘切見るよりふつと欲心起り。此銀で岩崎様の難儀を救ふて進せんと。思ひ初しが盗の始め。夫よりは毎晩喧嘩に事寄紙入巾着盗取。一錢も身に付ず皆あなたへ買だ銀。證據は則ち岩崎様。如何に主の爲じやとて武士の米喰た平兵衛が。手を出して盗みをする心の中の悲しさを推量して下されと拳を握り男泣悪いと思ふ平兵衛の案に相違の忠義なり。チ、夫ならば尤をふなうては平兵衛と云はれずと心解れば。權六も二人の女も諸共に悦びあふぞ道理なる。扱其元にはいまご御目懸らねど。れ名の兼て聞及ぶ文七殿とな。拙者は山川屋權六と申者。是迄は高が義に付段々世話れ心遣ひ。ほんに今迄大ていの事かいな能う禮云て下さんせ。いや、此文七其禮受る覺がない。竟畢師匠元龍

殿より預つた岩崎。殊に妹分なれば金輪際世話せにや成らぬ。扱々夫れは頼もしいと。互ひの挨拶聞もあへず。チ、かた。其三ツ指を取置て何と崎さんかうしよじやないかたまへ權六様と久し振の盃主と平兵衛様は中直りの盃。かあ五人の打込で濱屋へ往て呑ふじやないか。チ、成程。此平兵衛も頼もつばりと言譯立つた悦び事よかろと嘆ぎ立二人が先へ連吹に戀の歌口吹しめし。我の君故君故お爰に。勤するぞや可愛者じやと云て。コレナ若衆に逢ませぬ。吹や吹や。尺八わし成りたやナせ。いと君様お手に觸たや。とかく竹には成りたや。笛の音と颯打連。

阿波座堀紺屋の段

忍ぶ心を色には出さじ。物や思ふと問ふ斗り。色に出すなど諷へども。色を染屋の紺屋形暖簾に染し三ツ雁金文七が親里とは人も知つたる阿波座堀。水商賣に勝手よき。濱にも虎柵の竹結渡しかけて于間もやるせなき。仕事嫌ひの文七がのらをくろめる妻のれ馬。手間取相手に禪かけ。懸篋張物仕立際染刷毛とつさ。歌をむくら。越後町筋千度も行ては。涙らしやれ惣旦那殿。馴染の局に居ひたれか。れ馬機油断さんすな。此川端の老輔の商賣。清川はたへ吸取で

んせうぞへ。ア、悪業かいの焼付られても腹立ぬ。幾日廊に居やしやろが清川殿は遊びもの。此葛は本妻氣遣して下さんな。○太郎聞きや。お葛様の捌た心とこちらの喉が根性。茶袋と羽二重程違ふた。急の仕事夜に入て往ぬれば。待兼ねつてはや廻り氣。これ色が色狂ひ相應納屋の下を吟味しつけつかる。仕事片手の仇口も。時の興にや入日前。西の辻から杖ばく。文七が母妙昌。嫁女精が出ます。冬はこれ日様の照が薄て張物ら子兼。大かたに乾たら早を取入れて内へは入や。お宿老殿頼んで置た家質の銀主。今朝見ゆる約束若は管でも違ふたかど。氣遣で往て問ふたりや。お葛聞や先の銀主の銀廻しする分限者こちらの外に拾貫目から上の家質。四五軒も今日取どいの。脇を仕廻して暮方に御座る等。茶釜も替へ煙草盆掃除してたも。手間取衆仕廻してや。お葛これと運て入る。常は目をせるかみ様。仕廻ばこちらが勝手形板片寄て。籤旗ぐるめに取込染物。紺のぐいあしもつそう天窓頬に皺面作り髭。門口からわろ込。詠らひの染幕今日持て來管。來ないさかいで旦那の立腹九月切の約束十月もちやんぶらり。霜月もなく成になせ渡さない。毎日の催促奴めが足りすり子不。備前者を欺らかしすりをかはるか。盗人をひろぐかやいせ。當り邊へ筒ぬけの。聲に手當るお葛が氣兼。お腹立は御

尤様じやが。近所隣の外聞より。ちつとの間休んで居られます姑御の。目が覺る。斯云ふもこの勝手斗り。今日はこれ渡し申をちつとした間違ひ。大切な屋敷の御用藍の色は大坂がよいと。仰付られたも鷹金紺屋の外聞。物の見事に染上て張上は京の水。能いの上にも能仕上て跡の跡迄御用か聞たさ。日和まんで隙取るが。したが今夜か明日の朝か下は違はぬ。若うでなけりや。黙れおかた。お葛仕着のあつてもお喰ない。御船幕上布百五十反。京といふも抜句て有ふ。下らふが。下るまいが渡さみや白癩こか動かぬと。佞に捻込む奴かた。手間取共が挨拶もきは廻して寄付す。平兵衛は岩崎が急な身請に行詰る。談合相手文七に逢に來かりつゝか。懐手してじろくを見廻し。お葛様何であんす。手をつかへ廻つて敬んすも相手に寄る。何處からか知らぬが盛切。手を上げさんせ。用が有つて逢に來た文七の留主かへ。内にゐるなら見ても居まい。あれの逢いで悪いが仕合は此わろ。フレ煙草一服吞で往のと。お葛と奴が真中へ。膝捲りして大胡座。イヤラうじや坐んせぬ。七重の膝を入重に折て。詫ねばならぬこちの誤り。詠への染物京へ張に登して。今に下らぬ其事。ヤア同じ事聞度ない今渡さねば弓矢八幡勘忍せない。へ、へ、怖いこつちやれ葛様。京から來ぬ事。それで

よとんす。來ぬ物を渡せと無理云はんすな一文さん。愛な毛二才一もんとは何ほざく身は他人だ。ホ、ホ、云ひひても知れた他人。それが云ふ一もんは見世願しの一文奴。こやつ舌の根が延過た今一言吐して見ろ。サ、奴く土奴一文奴下臈奴。サア云ふたがどうしをる。サ、斯するはと扱懸る。柄を押へてつべいがへし筋斗うたす其纏。目を醒して立出る。母が手前を憚るれ為。平兵衛様ひよんな事頼んでもさした様に腹が立ふ。奴様耐へてやいのに付け上り。詭物を渡さぬ上投さしたぞよ覺ておれ。ヤアよまい言ほさくな。相手は平兵衛。よはい者歩に取らずと云ふ事があらばおれに吐せ。コレ平兵衛殿。こちらの野良と念比だけ。力自慢嬢じうないぞや。れかたの云ひ様が悪いと。此年寄にめんじて耐へて往んで下されと云へり云ふ程意地張奴。肩掛摺んで引立れば。アイタ、。平兵衛殿またひつ濃。怪我が有ては難義じやと。おふー思ふ嫁姑。お袋了簡か時代に會ひぬ。手緩しては往ぬやつ。最ふ打も敵もせぬ。と云ふてもうぬ次第。往ねハ今一度慰むぞ。ハテ往る。ホ、能了簡と突飛せば。エ、旦那を持なくば堪忍をせないけれど。へ、しやらな事吐すな。堪忍ならすば今しおれ。イヤならぬとは云せぬに。吐さずばとつと失う。サア行はいの。行かいでは。コレお駕様文七の戻らね

たら平兵衛が逢たがると。イヤまな奴めまだ失せぬか。ア、忙しない草履穿間も有はいあと。一よげにしよげたるやつこらさ。ついでに平兵衛が送つて来まうふ。失ひくと先に立跡からゆらゆら送り狼出あふた因果。轉たが最期。がちく慄かて往ると来ると。摺違ふたる町の役人組中銀主打建立。先に立入ら宿老役。婆様来たぞや。是はくれ宿老の若旦那。御苦勞様や。何れも様。サアく是へれ為茶。アイくあいの小火鉢も。宿老待遇馳走ぶり。冷る時分何方様も御苦勞で御坐ります。エ、いつ見ても愛くるしい。器量と云ひ物腰さへくしたれ内儀。三十二相の御相顔毎日拜みに来たけれど。そこを來ぬ謂は。連合の文七怖ふは無いが。氣味が悪い。今日は緩りと拜見致す。葬禮に行とは違ふて親父の名代有難い。何と何れもろでないか。ホ、お氣の軽い若旦那。此婆が望程銀主にも御得心か。イヤ親方が申すは。三貫目ろこ等の端銀取る世話など有所と。れ宿老の御挨拶で只今持參。證文も認め參つたど。妙昌が傍へ指寄。御宿老様のれ馴染とていかひお世話。コレ町代殿。是はわしが判太義ながら頼ます。手形の文言を聞成れ妙昌様。いやてや婆が盲の垣覗き。銀目の所違ひはない。お定りな家質の證文讀に及ばず。借主から組中連判。納めは旦那の御印形持て出なされ

たか。同。チ、親父の名代でしまはれても。印判は作病叶はぬ。コレ持て来た押てゝも。コレ婆様大切な銀借る日内に居ぬ文七。ア、評判が有ぞや。親父が生て居らるゝならあでは有まい。母育ちじやと云ふぞや。前々は手間取を雇はず。年季の弟子から食焼迄。七八人の喰口減し今でいたつた親子三人。身代をたゝき上る喧嘩好。親の譲りの家に迄手を貸せ遣ひ捨る銀じやあいかや。勿体ない事おつしやつて下さまをな。もてあましたあはらせつ。あまい母の育がらと口の端に懸るもあいつ故。ゆんにやれ愛な嫁が證據。けかな一度白歯も見せず。異見の有せう仕盡し。勘當といへば悲しがる。あんあやつにも連添ふ義理か。内にも寝ぬ男の説言とふしても直らぬ根性。屋財家財ほつかれぬ中に。思ひ付た家質の銀。と々をこそれ來年の正月は親父殿の七年法事もしたし。同。頼み寺は生玉の妙法寺。本堂の地上奉加帳も顔役。親の事構ひたらねば死銀の用意もしうち。殘る所はなんば有と寺へ上る祠堂銀。町の名前も母が直判あいつには構はぬ。心の當里は切てれります。ひよんな縁を取結んで。難義するは此嫁。修羅をもやすは此母と聞て愛いはお町の手前。主の魚負は致しませぬが正直な生れつき。芥子程も悪氣はあゝ。應につるゝ逢とやらで。友達衆に懸けて商賣も脇に成。母御へも思はぬ不孝氣短うれつし

やりますな。連添女房の役じや物。篤くりと異見して。棚から物の落た様に思し心の心を入替させ。あの様にも成物かど。お前を先きと皆様にも譽を乞て見せませう。お年の上に氣を様上血の道起して下さんす。同。さつても心中者め愛は何れもどつと譽たり。ハ、ハ、ハ。判が濟ぶら銀渡して。證文と町の巻引合して判の吟味に内儀うこへ行燈一ツ。アイ、アイ、アイ。いや火にも及ばぬまだ見へます。これも違ひの御坐らぬの。そこが濟たら一所に行ましよ。コレ妙昌霜先の銀用心時氣を付て。寝やつしやれ。ア、お若いに心の付て忝なぬ御坐ります。イヤ氣の付替じや年寄の若ばへ。成人の後さが我ながら。思ひやられて頼もしい。皆の衆還御致そふと。行に續て手間取ども。見世も表も鎖寄て打連立て歸りけり。同。ヤレ、ヤレ、嬉しや。明日は早く、此銀。妙法寺様へ持ていって何もかも頼んで置ふ。お宿老が氣を付られた。門の締も念入て。を駕是を納戸へと云つゝ包兩手に持も暫しの銀の番。するどき「冬の夜嵐や風が笛吹く。尾柵竹聲もさへたる御梅よし」。豆腐の焼立餅田樂茶碗一盃六文賣。上戸も下戸も取外さぬ肩に拐の荷ひ賣。商仕付た紺屋殿夜食の時分と荷をおろし。門の戸ほどく。是は扱四ツにはならぬが早い寝やう但し。來様が遅かつたか。渡様の好物極めてする商ひ。賣外しては癖になる。同。目の覺

る程叩かふか。イヤ起した迎寝起の口二串か三串か。ア、儘よ外に四五軒得意の夜食をこを仕廻て今一度くる分。やつと任せと荷ひ上げ。鹽梅よし／＼や世の中の。身すぎの資命かけ銀の有事曠だやら。裏の借屋へ通ひ道路次から仕込屋尻切。こほつた壁からぬつと出る。猿の面着て頬かぶり大ぶら指た大男。内の寝息を窺ひ足音せぬ様に忍び密納戸の口を指覗けば。夜ざとい嫁が目を感じ。わつとの聲に驚く母。のふおとろしやと遊戯を二人を外へ送さじと。捨付踏付どつたくさ騒ぐに連て打てかす。行燈は消て眞暗がり。盲摸の手に當る前垂風呂敷猿轡。染地の反物ひつしでいてぐる／＼巻の縛り繩。二人を柱に猿繋ぎ盗み手早き手長猿。金戸棚の錠捻切引出し有たけ引攫へ。腰に用意の大うちがい包くす／＼押入が。一時長者の擱取。夫にハあらぬ小商餘つた豆腐すへらそより。婆様今一度起て見んと立寄る門の戸。めつきり／＼コリヤ屋鳴か地震かど。ためらふ内より貫の木外し。大戸明たハすは面者と。拐搦へて待共知らず。外を窺ふ猿の面恟くりしながら目を放さじ。出るを沈んで横薙り向脚を打ひしがれうんと前倒りし泥坊より内を氣遣お荷の行燈提て入間も氣はわくせき納戸よ二人が縛られて物も得云はぬ猿轡引ほとぎ引ほとけば。搦梅よし殿よい所へ。ア、忝い所でない前倒て置た

盗人め商賣の田樂揚腹存分くらはそと。出るに引添お嫁姑縛れた返報。抓つてなりと腰愈と傍へ寄て指覗けば。被つた面の脱たも知らず。片息に成た顔は文七はつと呆れて取落す。行燈は消てしんの闇。ア、鹿相なれ内儀捉へて御座れやと。田樂火鉢に付木の硫黄灯らぬ内に送さんと引起せども。足叶はず儻れが仕様が有。こつちへ失うと引入る母もそれとハ氣の付て。嫁が心を休めたく二度灯し持來る行燈。怪我のふりして行當り。是は扱わしも鹿相を又消た。詞もふ六兵衛殿世話やかしやんな内にはれれが灯します。往んで休んで下されと盗人押へて置ながら往したがるを吞込で。ろんなら往まじよ。した／＼かな目に逢したが。燒鳥に納緒やぞやと。往る振して戸を引立庭に伏たる藍靈の影に隠れて窺ひ居る。母は態ど火も灯さず二人の傍へ探り寄。詞ヤイ爰な畜生め罰を思ひ知りたつたか。人でなしを子に持て。罪作るは親の因果。夫婦と云へど退や他人。大盗人めに愛想も盡さず。日頃と云ひ今夜のしだら燈を打消しての心遣ひ。忝いと云ふか如在ない氣を知つて居て。隠したの耻かしい。こいつの取つた是此銀を。連合の吊ひと云ふたも偽り。死銀にも奉加にも祠堂にも借やしませぬ。詞屋敷かられ詭ひの船幕渡さねバ度々の催促。今日も今日迎奴が云分寝た顔して聞て居た。あつちのが皆尤。阿

呆遣の揚錢に詰つて質に置たは定の物。渡さねば大事に成る。請戻さふも銀のあし思ひ付て入た家質。女房を袖にして傾城に遣ひ果す。我子には異見をせいで銀を遣るあまい母と。思やらふかと思ふての嘘八百で借た銀。れれが手からは遣られぬ故。妙法寺様を出しに遣ひ。梅よしの所へ往て斯くした譯じや程に。まなたが外から借出して。借様にして遣て下されど。頼んで明日の遣る此銀。待兼て盗みくさつた儂斗りが頼耻か。母も頭が合されぬ。聞いのが仕合。孝行な嫁に隠して不孝者めに遣る銀の。罰と云はふか情けなや。現在の子に縛られた是が有ふ事かいの。何もかも耐てや見へはせまいぶコレ嫁御。手を合せて拜みます。ア、勿体ない。姑の親嫁は子。子に何を云譯返つて冥加に盡ますと。拜んだ母の手に取付引分れば。いやていの結構な女房をぶにしをつて。嬉しいとも思ひかゝるまぬ。野良めが替りに拜ひのじやとこたへくし恨泣わつと叫ぶは嫁姑。泣事知らぬ文七も母の慈悲心女房の實。思ひやられて我ながら。被つた猿の面目なき身の上悔む斗りなり。罵の執を絞得すれ袋様の忝いれ詞。となさんの爲には結構な薬じや程に。篤くりと吞込で悪病のぶうく仲間。短氣な虫を直さしやんせ。布の緯から男は女からと。男の心の善悪は運添ふ女房によると云ふ。異見せうにも一

月に三日とは内に寝ず。邂逅の添臥云ふと思へばあちらこちら。こゝさんの方から先取て。かうくした義理の銀三百目無けれハ男が立ぬ。十兩なければ一分が廢る。母に知らさず。才覺頼と銀の入時ばかり寐に戻る女房嫌し。傾城殿に見かへられた私様の阿呆でも。女房と思ふてなりやこゝろ頼ましやると思ふて。當分入らぬ私が着そけ隠し盗んで出して遣り。遣り盡した揚句の果。百五十反の請取物。質に置たが手詰の難義世話せらるゝが可愛迎。妙昌様のお慈悲の家質とは知らずで有ふが。親や女房を縛し上盗んで取氣は誰付た。いとしばからしやる清川殿。よもやとは思へども根をたんだへて行時は。傾城頼から起つた盗み私や憎い腹が立。無念な悲しい勿躰ない。母様のれ心体まる様にサア早ふ。詫をくと親付妻が思ひぞ遣る瀬なき。文七ほつと吐息をつき。身の誤りを云立られ一言も返されぬ。云譯でない身の懺悔聞てたも。清川どの念頃はるなたのこちへおじやらぬ前から。親の持す女房背は不孝。中よう添と格氣する場を打越て。粹な捌に退れもせず。來るなど云程往たら成つて通ひ詰る。揚錢もれれが世話みは三分一殘りは我身を賣て銀遣はせぬ心中者。あれがさした業でない。兵法の師匠砂原の浪人。印可を買ふた恩も有引れぬ義理は娘の勤始終は長ふて咄されぬ。衰れな仕廻

は傾城に賣れて。新町での名は岩崎。前方の名は高。江戸の屋敷で念頃した。山川屋の權六と云ふ男。是も大坂へ登つての不思議に逢た深い中。外の客には逢とむない。賣ると云ふ男も旅のけ。江戸の親は身代よしでも爰では才覺成ぬ同士。頼むと聲を懸られて。引ぬかれより川がいかなる世話やいて。今日迄は逢した。一ツの難義は降つて沸た岩崎が身請。客の名は知れぬが其處へ行に極まると。生ては居ぬ二人が覺悟。あの案の平兵衛も根の岩崎が内の者。三人寄の文珠の智慧。五人寄ても出ぬは銀とせうと思ふ矢先。家質の事聞付。余所の銀盗むにこそ知れてから大事ない。西口で面買ふて引被つた猿智恵。聞ふても聲で知れる。母人には足もさへず私らかにしたとは思へども。れ手が痛みはしませぬか。何吐す知らぬはい。エ、どんな云譯。れ袋様としるならば縛らぬがよいはい。縛つたと云や憐い様な。うなたも母も繩は懸ぬつゝ木綿でぐるぐる巻。アレまぶいの。木綿はさて置燈心で縛つても。科になるとは思はずか。オ、其科を思ふに依つて。銀の入筋一通り言譯。母への詫に腹切と居直る夫にしがみ付き。のふ悲しやと泣く馬に取付母の人違ひ。鹿相な母様私じやない。文七殿これ爰に脇指を抜き掛けてじや。怪我せぬ様に留てた。女房放せイヤれ葛放しやんな。それでも

強ふて手に叶はぬ間ふて悪い火が欲しい。エ、誰もないかい。ヨ、爰にいる搦梅よしと爪つき一断寄つて。コリヤさせぬ息子殿。これの居れば聊爾はさせぬれ内儀様燈をちやつとくくりに打つ石も涙に濕る火打箱。やうく附木に移し取り。怪我な兒夫の顔を見る。行燈と共に安堵せり。六兵衛脇差引たくり。不孝のしたい程した上。まぶし足いで死のか。れ袋の可愛がらつしやる百の一ツじやなければ。これも大切に思ふてなを本の盗人と心得打はしたは向脚。目の眩たも道理。商ひ一邊の六兵衛なりや。言譯にも及らそ逃て往る。うまを往ぬはまんざらの他人でもない親の端くれ。親といふ其譯女夫ながら知らずであろ。まゝあは死しやつた親父殿四十二の二ツ子。産の儘育つては親や子に崇る連。臍の緒も落ぬ水子を。蜜柑籠へ入捨るが咒。太郎助橋の南誥わざやア〜が耳へ入た。商ひの戻りがけよ子ての有。拾ふて拐ばなへ引かけ悦んで戻つた。其跡から親父殿がよこと來て。其子の捨るのじやないれれが厄の咒。戻して呉れとの斷り。譯聞ていやとも云はれず。子の忌の明迄三十日こちらの内で育て。戻すのでは御座らぬと改たためて養子に遣た。夫から懇になつて。米は有か木は有かと問て下さる。禮は云へどれ袋が筒據じや。毛がな毛塵ん無心は云はず。とふやら斯

おやら今日迄喰兼ぬ梅よし。 詞 馬鹿律義を見込んで。 塊つた銀ぼつかりとこれに渡し。 おな
 たに遣とのお袋の慈悲。 ね内儀の心いきめそこから聞いて。 塵紙半帖涙に仕廻た。 これに迄
 損かける。 こなたの言聞へた様で一つも聞へぬ。 師匠で有ふが娘で有ふが親に見替る義理は
 ない二十五に成迄育られた大恩何とも思へぬこなたなれば三十日育た六兵衛。 親くさい事云ふ
 な面倒くさい鈍くさい味噌くさい田樂屋と誹るゝは覺悟の前手に懸る田樂に付て人の讀ぶ歌
 が有。 是一ツがこなたへ意見篤くりと聞しやれや。 味噌も大豆豆腐も元は豆なるに。 同し仲
 間の顔を汚する。 よお叶ふた歌じやの。 お袋は豆腐こなた味噌同じ親子が汚れた顔で死んで
 濟か。 豆腐や味噌に成らぬ先きのまめな顔を見たがるゝ。 親や女房を泣さすと心を直しや文
 七殿様喰はされて男の立ずバ立様に踏返しや。 殺されてもおりや身一つ悲しがる者はない。 サ
 ア踏や殺しやと身を突付。 命惜まぬ強異見文七恐れ飛退つて。 母人の咄なれば幼少の事會て
 知らず。 三十日は愚ろかの事一日の介抱でも。 御恩の請し義理の親。 詞 常の商人と心得廊の内
 で逢度事。 コレ文七様内の機嫌が悪からふ。 更ぬ先きに往ねと有真身の異見今以て思ひ合する
 無禮の段々。 眞平御免下さるべし。 産の母は心安立あまへての放埒。 其元の御一言天窓のざり

ら爪先へ耐へて。 文七が魂の洗張。 商賣冥理男冥理。 仲間付合もふつゝり止る廊へも参るまい
 コレれ二人へよい様に執成頼む女房と當つて碎くる男の心驚も落ち付悦ぶ妙昌。 六兵衛殿のね
 蔭で息子一人拾ひました。 文七が今の誓文男付合の止たがよいが。 詞 岩崎とやら師匠の娘。 死
 ぬるを知つて捨て置れぬ。 此銀で替む事なら二人の難儀を救ふて遣や。 色所の名うてに逢ひ
 男なりと云はれたそなた。 立る事は立て仕舞眞子に成てたものぞ指出す銀に涙もかけず。
 氣の切離れのさつばりは文七が母と知られけり。 六兵衛手を打。 詞 男立を子に持れたお袋も女
 子立。 家賃銀皆遣て百五十反の質物は。 ア、夫れも氣遣ひ有る拾買目上する屋敷。 借添も仕安
 い。 何處もかも無事に濟してやると残る方なき母の慈悲。 女夫の額を疊に付添け涙も暮れ居た
 る。 ヤレ目出度一内の文談らりと濟た。 又朝来て悦ぶ。 詞 コレ必らぞ息子殿云た通り違へま
 いぞお袋もね内儀も帯解解て体ましやれこちも往んで休ふと出るを送る詞の禮他人がましい事
 いはずと早寝やしやれ明日逢ふと。 拐擔で急ぎ行。 のお文七六兵衛殿が寝いと有と。 命に
 懸つた身請銀。 明日と云ふも延々。 太義ながら持て往や。 重々のね心遣ひ背くは却つて不調
 法。 ね驚ちとつと往て來おはし。 詞 アイ夫れはよからおが足は痛みいせぬかへ。 向脚は男の急

詞
 あろまでは喧嘩が有爰では抜た切たはど。相手は替れと主様へ。替らぬ名のみ。鴈金の文様
 なりと聞に付。夜の目さのめも阿波座の鳥ないて明さぬ夜半とともなし。其爰さより此爰さ。
 涙の水解やらで雪や霜夜の。小庭に獨かも寝ん寡鳥翼かはせし鴈金の。妻のお薦が諸共に。幕ひ
 焦れて操珠數の。南無妙。法蓮花經。七字の跡の二三字は。消て敢果なき妻よ。涙の玉
 の數取り。百八煩惱戀無常。千日寺へ来て見れば。人の噂に違なく懸ならべたるはた物の。南
 の端を其人と見るも妹春の星明り。木影に忍ぶ清川がそれと悟るも粹の徳。我は廓のかり妻と
 名乗ればとも隠されず。明てろれぞと。緞帯。妻と妻とが明しあふ心は共に夫の首。斯ては
 おかじ諸共に戀の白波たつや浮名の愛耻を。人には見せじ。さらさじと。思ふに甲斐も嵐吹く
 傍に一ト木の柳の枝も。うたてや風が吹退て上る便りもあらざれば。詞 お薦様どうせうぞ。清
 川様かうせうと常には淺き女の智恵も。戀には深く掘込る柱に薦が取付て。詞 これ此帯を此
 肩を。踏て上れば手の届く假の足代。ア、慮外。何の慮外も夫の爲。震ひ慄た漸と。板に取付
 首に手を。懸て引け共大磐石。岩をも通す一念力。打つたる釘も鈍け捻れて曲でおれて。抜て
 放れし首諸共飛で。たり居る鴈金に。盡ぬ契りと身に添て行は流れの。一と夜妻。幾夜か我に

憂かりし其仇人には渡さしと。今迄中能二人の妻。夫の首に向ひては。心の角も穂に出る。情氣
 嫉妬は女の習ひ。是は我殿我夫。うちよこちをと争ひて。戀に柵む戀の仇。胸のほむらは墓所
 の火と共に燃立緋縮緬。裾もほら。あらなる。塵の白雪涙の霰降みどけたる黒髪。聞は
 あやなし果しなき。恨み妬みに攪み合。組んつ轉んづまろ。傍なる池へ諸共に陥るも
 夢か夢心地。覺ての後の有様を見るが敢果なき

新町捕物の段

女郎は居てまつ火影で覗く。軒の禿が出て招く。招くも呼も宵見世は。分て賑はふ色里の經と
 緯とを打込に入込む客は布引の幅も縮むか越後町浮れぞめきの仇口々行つ戻りつ人立の中に目
 に立三人連。調子も揃ふ尺八の音よる鹿の聲ならで。目の鞘ぬけし遣手の玉。こりや珍しい
 皆さん。阿波座鳥は啼いでも見ぬぬ日もないお前達。どふやら味な沙汰も有。詞 可笑げる侍の
 彼所へ往たり此所へ往たり。うれ故に見へぬ物と噂して居やした。漸さぞんだ昨日今日。もあ
 鳴出さんす雷様。嗜しやんせと外し行。詞 ハ、ちつくりけな事云出しれた。わいらや己が何
 處にすつ込で居迎ナア千右。極印打て知れた身分。何が怖ふて尻込せう。ドレ其侍何所にけつ

かるちよつと出てして見たい。コリヤ譯もない事云ふなやい。侍に逢ふといや此布袋は往るぞ。エ、どんなこちらの仲間かみなりに雷かみなりが有るでござるがきた。殊に霜月冬雷は時外れ。コリヤ拜まがむ鳴なて呉くな。へ、きたない奴やつ往いたか往いね。れりや岩崎いわさきに逢あねバ往いぬと局つぼの戸かど。れ客きやくが見みへた爰こゝ明あいと。草履くさり下くだ駄たにて四よッ五ごッ碎くだけて退のけと踏ふむ拍子ひらかけがね外はれ戸かどの明間あきま遅おそしと這は入いる岩崎いわさきが胸むねづくし取まつて引出ひせば。續ついて駈かけ出いる山川さんせん權六くわんろく。こゝ狼藉らうじやくと押お隔へつ。詞ことばムウ斯か有あふと思おもふた。岩崎いわさきは此雷このかみなりが首くびだけ。そつちまつちと付つ廻まわしても。權六くわんろくと云いふ虫むしが付つきて手てに入いらぬ。今出いまあふたが百年目ひゃくねんめ。サア權六くわんろく。岩崎いわさきは鼻はなか貫くわんふ。チ、貫くわんへへ。斯か兩りゆう人にんが腰こし押おからは。心こゝろようやればよし。四よの五ごのが有ありや三人さんにんが腕うで先さきで貫くわんふて見みしよと。相手あいてを見透み透すし高たかゆすり。權六くわんろくは返答へんたふし兼か耐たり兼かて。立上たれば。中なかに岩崎いわさき立隔たちへだたり氣きを揉もむ後うしろに案あんの平兵衛へいべゑ。詞ことばわいらこりや何なにするのじや。イヤ貫くわんふのじや。誰たれを岩崎いわさきを。ハテじやらへしと事こと云いふないやい。此二人このふたりの深ふかい事ことは知りぬいて居いるでないか。陰かげへ廻まわつて又またしてもひこつくと。仲間うち中なかでも了り簡かんならぬ眞事まことにする。出入でいなら彼衆あいつらを推退おしひきて。れれが相手あいてと居合腰ゐあひし。詞ことばイヤ惚ほれて居いる岩崎いわさきを我物類わがものかたが勃おどとげ。ちよつとせびらかした分ぶん。高たかりじやれじやがいへいふな。らんならよいはと打解うちまれバ。詞ことばコレ極ごく

印いん若浦わがうらや小井筒こゐづつが局つぼへ出いかけふ。したか布袋はていは子供好宗こどもこうしゆう旨ちが違ちがふてイヤへへ。今夜こんやはれれも一向宗いっかうしゆう女人成佛にょにんぶつしかけふと三人打連急さんりつれんきゆうぎ行い。詞ことばア、能所よいへ出いくわしてお前達まいたちの氣きを休やすめた。是こゝと云いふも大切たいせつに思おもふ念ねんの届とどいたと悦よろこぶ内うちもいさまぬ岩崎いわさき。私わしが身請みかけの日切ひぎりも今日明日けふあす。文様ぶんやうのいかひ世話せわで三貫目さんくわんめと云いふ手付てづを渡わたし。是迄こゝは延のべたれども。あの立銀たてぎん遅おそなはればいやとちよつちへ談合だんごうすむ。と云いふて今更いませう事こともどうして下くだんす事ことしやぞと。吐胸をついたる二人ふたりが顔かほ。詞ことばチ、其事そのことは氣遣きづかひない。こつちに工面くめんして置おけた。夫れに付つては川主かみに逢あいたい。私わしは隣となりの局つぼへ行い。れ前方ぜんぽうは限かぎり迄まで。そこでしつぱり願ねがひの細ほらぬ様ようにと打笑うちわらひ。内うちから締しめる戸かどたへく戸かどの音ねに。目覺めひる清川きよがはが戸かどを明あけさへ氣きもろろ。其首そのくび遣やぬ渡わたさぬと平兵衛へいべゑに取付とけ。詞ことばエ、氣き味あじの悪いわるい首くびとは誰首たれくびぞいの。酒さけに酔よてか寝惚ねぼけてか。コレ案あんの平兵衛へいべゑじや。ハアほんに平兵衛へいべゑ様よう爰こゝは千日せんじつ。アレまだ思おもへない。ア、ほんに私わしが局つぼ。扱あは夢ゆめで有あるかア、嬉うれしや。文様ぶんやうは何なに所にじやへ。イヤ其何所そのなんじよにぞは此方こゝから用もちが有あて逢あひに來きた。身請みかけの後銀あきぎんうち付けば余所あまへ取とる。取とれては二人ふたりが死しぬ。埒らちが明あく欺たぶして置おけたか明あぬへ。れ頭かしらを捕とり來きた阿波座あはざ堀ほりの騒動さわどう。其夜そのよから内うちには居いずじや。鹽梅しんばいよしの所ところからくぐり心當こゝろあてを一い邊へん尋たね。とつまにも見みぬ故ゆゑ。爰こゝに

で有ふと思ふて叩いた。イ、へ夫からは爰へもつゝり。此間のもやくやには御坐んせん最能御坐んす。イヤ御坐んせいでは跡銀の才覺。エ、どふぞ逢たい。濱屋にか知らぬ迄。をりや一走り見て來ふと氣を急切て走り行。跡見送つて。清川は。詞 扱もしや故主の爲に身を碎く夫を知らずに二人共。局にしつぽり寝てろふなど。獨言してイむ折節。若い女房の小灯燈手に提みから開はしげに。清川と云ふ女郎衆の局は爰らで御坐んすかな。詞 アイアイ爰は爰じやがろふれつしやんすれ前の顔はと云んすお前の顔も。何處でやら見たやうなが。お傾城に是迄近付に成た事もなし。ヨ、夫よもちと先夢に見た。こちの人どれ馴染の。アイ清川で御坐んする。れ前夢をか。私も恐い夢見てな。千日で逢たれ葛様か。ア、葛じやないな。ア夢どば云へど耻かしい。胸はするし〜と思ふ上べり心の化粧。底はやつ張汚ない氣。魂と魂かしがを見せたか淺ましやと。互ひに顔を見合せて懺悔も心せかるれば。詞 アアれ前何の用。さればいなわしり恐い夢咄し。妙昌様の氣遣ひがり。文七が居所を廊へ往て問ふて來い。岩崎様の身請の事も。序ながら濟だか聞たさ。イ、エ其身請もまだ濟ねバ私も逢たい文七様。どよに居るとの文も來ず。文より直に文が來た。エ、イと驚く二人の女。詞 そち達は此男を出

し抜て誰が引合せて此しつほり。コレれ葛母の健で御座る事ハ六兵衛の方で聞た。百五十反の質請も濟だげな。何もかも親の慈悲。濟まぬ者は岩崎が身請氣遣ひさにちよつと來た。清川平兵衛はこなんどか。サアたつた今見へてれ前にどふぞ逢たいとて濱屋へ尋に。トレ往て逢ふと云ふ折節。西の辻から夜番の太鼓。縮出しが有皆出た〜と叫はる聲。騒立たる人崩れ。マアこつちへと清川が局へ一連て入にける。廊は東西門打固め風も洩さぬ勢なり。捕手の人數備へを乱さす。鶴木主水下知をな。詞 去十月安治川芝居足揃への場をり。口論仕出し身が家來角左衛門切捨た鴈金組。一々に名は知たり。風を喰ふて手に廻らねバ廊の詮議を四五日ゆるめ。袋の鼠を取ごとく油断を見せたる謀。案の如く五人の者共心を許し入込たるを見届けた。今宵の捕者きやつらは袋の内の鼠。サア手を分けて四筋の町々。局々を驅り出せと。下知に連て捕手の者左右へ別きて驅立る。極印は此場を遁れんと腕を限りに切捲るを。右手左手より棒すくめ極印が腕や弱りけん。持たる脇指打落せば後に群がる同勢共。捕つた〜の聲早繩。三寸繩にしめ上る。用水桶の小蔭より市右衛門つゝと出。詞 遠き者は音にも聞け近き者は目にも見よ。布袋が最期の死物狂ひ。手並口で云ふ斗りと遊行先きに捕手の小頭。どつてい失ると腕

付れど。アイと我手に手を廻し。何と強いぞ有ふがなど。云ふも男の端くれあり。詞 サア是かは文七め探せくと動聲處へ文七是にと駈出る權六。詞 斯名乗て出るからは手向をする所存でない。サア依て捕れよと覺悟極めし一言に。岩崎驅出。詞 ナ、よう名乗て出やしやんした。そうあつては叶はぬ筈。とは云ふ物の尤愛男に愛目を見するも浮世の義理と。歎くを突退立懸り終に繩をぞ懸にける。鶴木主水は平兵衛に繩を打て引來れば。岩崎夫と見るより早く。詞 ヤア兄様か忠太郎様か。見知りごしな平兵衛に繩をなせ懸さんしたと。取付歎くを収て突退。詞 親より使ふ平兵衛に繩を懸るも武士の義理。此忠太郎が名を改め。鶴木主水に成たるは。幼少の鶴木龜松後見せよとの殿のお指圖。鶴木家付の角左衛門を討せたる相手なれば。所縁有迎救されず。平兵衛の物語で元龍殿の死去そちが身の上。江戸の文七大坂の文七。何角の譯も皆聞た。殘念の身が到着御用に付て遅なはり。先へ妻子が供させた。角左衛門が不慮の喧嘩是非もなき仕合。うちが身請に假名して。田舎大盡と云いせは國の關へを憚かる故。二ツには今の妻子馴染も薄く義理も有。隠し過したが仇と成り恩を請けし平兵衛に禮をも云はせ縛めし侍の身のせつなさと思ひ遣れ妹と。愛目にせまる落涙に。連て妹の身の上も恨怨て泣居たる。御

兄弟の御涙の平兵衛めが來世の土産。詞 お子達の身の納まり案し死に遊ばした元龍様にれ目に懸り。忠太郎様には。鶴木主水とお名を替一廉の御出世。れ高様もれ馴染の權六様と一ツに成しやる。れ氣遣ひ遊すなど知らせまするが心の樂み。平兵衛は死るの嬉しい。御了簡が有ならば。先程も申通り。文七殿義は何とぞして遣しなされ下されの聲の中より清川が局の内々はた〜。女の泣聲とひる聲邪魔なくと戸を踏放し。鷹金文七飛で出。權六を替固せし捕手を左右へ投退〜。縛の細引解き。詞 大坂に二人と無い鷹金文七人達は鹿相〜。此權六に科はなし。コレ主水殿。角左衛門の相手は某。是を以て縛られよと主水が前に繩を置。詞 元龍様より預つたる妹御を貴殿に渡せば。權六の身の上も安堵致して満足〜。サア寄て捕れよと。命惜まぬ文七に取付き歎くは二人の女主水文七に打向ひ。詞 平兵衛と云うなたと云。懸り繋がる身の上と疾くにも知つたらば。角左衛門か意趣ばらしは斗らひ様も有べきに。五人の者共罪科遁れぬ一々次第。代官所へ訴へ詮意を受けて向ふたれば。私には助られず。一應も再助命の願中上。其上は銘々が運次第。近比殘念千万ながら文七も覺悟をめさ。詞 元より存儲けし事。是に控へ罷り在一人の宿の妻。又一人の遊女ながら。數年馴染の情の女清川とす者。

内には老母も残し置く。跡の事共憚はにかりながら。夫は更々さらさら氣遣きづかいひ召めるな。若し御仕置ごしちが極ままる共由縁ゆかり懸かりは未々もくもくまで此主水このしゅすいが請取うけとりた。サア、細こを懸かられよと。後へ廻まわれバ二人の妻岩崎權六さきまきけんろく四人の者。又今更いまさらの愛別あいべつれ。取付とり纏まとるを突退つまたげ。くつともすつとも物云ものいはず。捕とたの聲こゑをり早繩はやづなの。かゝる身の果埃はこりとも思おもはぬ風情ふうせいを潔いさよき。サア此上かみかみは雷かみなり一人雲くもを分わけても尋ね出せ。畏かしこつたど猛勢もうせいが一所に成りて驅立かきる。彼かの局つぼはらう。くはつたりびつしやりうりやまろ爰こゝに正躰せいとくを。見付みられたる正九郎せいくわう。戸を蹴放けいして踊り出。詞ことばサア雷かみなりの死物しもの狂くるひ。臍へその風穴かぜあな。用心用心せいと抜放ぬきして切立きりれば左右さゆうより捕手と共。滅多めつたなぐりに近寄ちかかね梯子はし子を繩なはよと狼狽うろたるを。主水しゅすい見兼みかねて立向たち向むひ。捕とつたと云ふ間に雷かみなりが一打いちと切付きりるを。身みを替かへて一當當あてあて。性しやうむ所ところを膝ひざに引敷ひき。繩なはを打うて引起ひ起おせば五人も一所に引立ひく。連立つんたつ五ツ雁金組ごつかり五人男ごにんと難波江なにはのみに浮名うきを流ながしける。

江戸文七髻結
大坂文七紺屋 男作五雁金 終

錦 文 流

俳名を錦頂子と稱し大坂座摩社の邊りに住す寶永の頃より西鶴の流を汲みて浮世草子を數多著せり人口に膾炙はいせる所の書は棠大門屋敷たうもん（屋敷五郎ノ出で）二年熊谷女編立くまがひ（因州鳥取女いんしゅう）八年出で）等數種あり淨瑠璃作者としてハ趣向筋立しゆきやうハさしゝる事なければも櫻塚西吟西澤一鳳と共に淨瑠璃作者中文者の三傑と稱せられたり

○錦文流作淨瑠璃本目錄

- 東海道虎か石 元祿十一年五月
- 傾城八花形 同 十五年正月
- 柿本人丸出生記 興行年月未詳
- 仁徳天皇万年車 正徳三年七月
- 男色加茂侍 寶永三年三月

仁徳天皇萬年車

錦文流作

善を取て仁を布く時んハ 則徳日々に進む。仁を爲る事己による。而して他人の能預る所に非ず。君成かな仁成事今此御代を映すなる。鏡の如く明けき「曇らぬ道の有難や。天照す御未人王十七代の聖主として。内にハ五ツの道を正し。外には百司の政怠らせ給はねば。民間憂ふる事もなく。根次柱らに石すゑて勤か惣國とぞなれりける。同 君武内の臣を召れ。當夏大旱地を枯し。旬服の外百里の間。空しく赤土のみ有て。青苗絶へ 餓葦野に滿て飢人地に倒るの跡へ。是帝徳天に背けるゆゑと歎きても猶餘り有。併し朕不徳あらば天我一人を罪すべし。黎民何の咎有て此災にあへるぞや。定て朕が政事疎忽なるの所以なりと。或は下視し歎かんハ不便にも又淺間し。明日よりは朝餉を停め。飢人窮民の施行に引切ての救助に得させよと勿体なくも御衣を絞らせ給ふにぞ。堂上堂下に至る迄勅定の有難さ。胸に堪へて思はせもあつと斗に聲を上皆々袖をぞ濕る。同 武内の臣謹で。コハ勿体なき救定哉。民の竈の烟薄しと。御賁の外課役を許され。御衣破るれども更め給はず。御殿の修理をも止め給ふ。是迄の君

思ふに世に有難き事成に。御代迄を滅せられんとの救。民又却て罰を被りいか成天の責をや受ん。豊年飢渴は其時の順不順。追付五穀豐饒にして。萬民の悦び遠かるまじと救答ある。所へ唐愍帝の使王仁の王子王寛と云者。手を盡しぬる鳥籠に鳥を云へる鳥を入れ。唐人の宿禰を以て是を献じ。謹んで奏しける。當今第一の王子去來種別の尊。當年八才にして未尊言をなし給はざる事。異迄も隠れ無く當帝深く是を難き。一籠の鳥を献せらる。此鳥に梅の枝元を踏せ。其足の中る所をもつて尊をば打奉れば。尊言忽ち出るの咒詛。唐に於て專なり宜奏し給へれと謹んで居たりけれ。君愍感の餘り王寛が申に隨ひ。急で咒詛致すべきとの繪言。の時に竹内の臣暫くと押留た。尤百舌の踏みたる枝元を以て。物を云ざる小兒を打て咒詛事。唐に其理有の義略開及し事にて有。去乍ら一旦評議をも加へずして。唐の詞に隨ふ事近頃もつて不詮議也。救定なれ共某が存する旨を申上ん。何も聞て評せられよ。御父應神天王御在位の時。當今御誕生の日本菟と云へる鳥來て御産殿に入る。某が子の産屋へハ大鶴鶴といふ鳥入ぬ。此儀先帝に奏し奉れば。君臣其印を取替御諱を參らすべきと候也。我君の御諱名を大鶴鶴の尊と崇め。我子の雅名を木菟の宿禰と名付し也。御成長の節御位を譲らるべき

との繪言。臣等謹て畏り。我君一の宮にてましますば御代をば知し召れんに。何條事の有べきと奏聞を逐けるに。二の宮菟道の稚郎子の王子。御寵愛の御子たる間皇子へ御世をつかひしめよと。既御位讓合給ひ止む事を得ざりつれば。先帝も宸襟を惱まされ暫く御即位延引す。お節是成王寛が父王仁。貢の爲來朝し。御位讓合給ふ賢成事を感涙し。難波津に咲や此花冬籠り今をはるべと咲や此花と。唐人の珍しく三十一文字の詠歌を綴り。敵覽に供へ奉れば先帝愍感ましくて。誠に梅の諸木の兄たり。王仁が詠歌に任せ急で即位を勤めよとの。繪言に因て御代をば知し召されしをり。紅梅を以て御愛木とて崇奉れ。其愛木を以て御子を打ん事は不吉の至り。去乍ら遙々の波瀾を凌ぎ來朝有。詮無き歸國發念ならんイデ。唐の鳥の沙汰を日本の鳥に捌せ。王寛心を休むべし夫。日本の鸚鵡を奏し參せ上よと有ければ。時の檢非違使畏て御飼鳥の内よりも。玉を磨きし丸籠に入御前に差上る。武内の臣王寛を召れ。此鳥は唐にて鸚鵡と云ふ。我朝にては鸚鵡と云ふ。異鳥の嘯り事紛らはしき其時は。此鳥の舌を切るに必ず人言を爲すに妙あり。夫々鳥の舌を切れ鳴音を聞んとの給ふゆゑ。時の役人畏て鸚鵡の舌を切れ。世にも妙なる聲を上げ。正に此鳥はげき鳥と云へる鳥には非ず。鳩と名に呼ぶ

毒鳥なり國使も誠の使にあらす。雷明こくりと云ふ外道此國に望を掛け。智を測るべき其爲眷
 屬を差越しぬと羽たゞきして告にける。人々すはやしれ者と禁庭大きに騒合。一度にどつ
 と取巻けば王寛少とも動かす。同じき鳥の咒詛御心にいらすんば御用なされぬふんの事。達て
 御勸め申難し。萬里の浪路を凌ぎ越したる使をば。小鳥の鳴音を證據に取外道の眷屬成べきと
 は。君臣智恵の暗きに似たり。何にてもおれ儘成。證據を出しいか様にも斗らはれよ。少も恨
 に存せぬと驚く氣色は無しけり。詞 武内莞爾と笑ませ給ひ夫程の事を唐人にならふべきか。と
 かふの詮議は無益の至り。先々手近き證據には王仁に子無し。先達て來朝の節子細有て我に語
 る。先刻參内致せしより王仁が子といひし故。いかにとしても疑敷夫故段々詮議を遂ぐ。但し
 王仁に子や有と。問詰られて王寛。今は叶は是迄と。誠の姿を顯はし玉座を目掛け飛入を。盾
 人透さず後より肩先擲んで引擔ぎ。彼取へとうと投倒し細首宙に打落せば。有つる形の消失
 て。一つの魂と變じつゝ雲井途に上りけり。君重ねて武内を召れ今に初めぬ事ながら。忠勤他
 に異成事世にもめで度覺るなり。 雷明外道此國を窺ひ寄るとのやうくはい。此上何成事あら
 ん愈々民の苦しみと成べき事こそ悲しけれ。朕四海安平の爲萬城の離宮に籠り。諸天善神の

星を祈らん。次に其序を以て近國の荒蕪をば。願覽せんとの勅定にて既に御車轟きぬ。いで其
 時五つ緒も飾らぬ御代の印とて。今に平野の御社に遺し留むる御寶物。万年車と申せし此
 御車の「事なりき。去ば邪道は雲水に便有ものとかは。此程妖怪打續く中にも不思議の雲立て
 日月の影定かならずいか様これも雷明が。障得ならんと天上の御沙汰次第に聞傳へ。民口更に
 息む事なく肝魂も身に添はず。手足置くに所なし或夕暮の事成しに。一村立たる雲中へ一ツ
 の逆星飛入れ。雲波忽ち左右へ分れ雷明が形忽然と。光り渡つて立たりし恐ろしくも又凄
 まじ。有つる逆星二ツに分れ盾人への手に掛し。眷屬角外顯れ出。 詞 此度帝郁に紛入り禁裏の
 庭を窺ふに。智勇を兼し忠臣共前後に列りゆへば。なか／＼輒く天王に近づかん事及び難し。
 剩さへ一身を盾人が爲に破られぬ。併爰に屈竟一の事こそゆへ。此間天王は萬城の離宮にて諸
 天を祈りやよし。皇后別を悲しみ跡を慕ひて都を出。此所へ參る旨傳承てゆ。 詞 何とぞ是に
 便らせ給ひ。事を窺ひ賜ふまじやと云けれ。雷明莞々ど打鎖き是幸の事なんめり然らば是に
 待受け。姿を變て忍び寄皇后の命を取。我身を變じて天子に近付忠臣共を同士打させ。其後内
 裏を打破り數日を過さず魔界となし。日頃の望を達せし父緊那羅も一度は。我法を弘めんと

様々心を碎く所に。釋尊と云ふ為せ者智辨深さに我父を。まんまど佛位に勤めいれ眷屬殘らず隨いぬ。最早天竺震旦には専ら佛法擴れば。我々が住家なし去れ共未だ日本に。此佛道を知らざるゆゑ。住家となさんと思ひ立我父此所に飛行せり。大聖釋尊入滅し當年一千三百年時ころ來たれ何に事も此雷明に任すべしと。云ふかと思へば翁の姿。雲を離れて風に乗る木の葉のとく翺躩と。刹那が内に大地に下り。皇后の鳳籠を運しとよろは「待いたれ。斯とはいざや白雲の。明暮とたゞ皇后へ天王の御事のみ。かど斗の露の間も忘れ兼させ賜いつつ。許多の官女具せられて切ての事に麗迄。訪せ賜はん御心にて慕ひ詫させ給ひけり。皇后折居の局を召れ去にても天皇は。御慈悲うゑはり風雨に痛苦みて。育兼たる民草の身の成果を有難や。御心にかけてまぐも御憐愍の餘り。葛城の離宮にて玉体を抛ち。諸天を祈らせ給ふと聞く。自の徒に玉樓殿の妙成ゆ。多くの人に待かれ粧ひを作る事。冥加の程も恐ろし。切て心の運伏なれば。此難所をハ暫くは君恩の報せん爲。歩行をせめとの玉ひて召もならはぬ草鞋に。御足を痛ましめ迎「あゆませ玉ひけり。いつしか君の邂逅に。御築山の其外にかゝる山路は珍しく爰に彷徨彼所に立。御手づから折草花に。御つま紅を染つべ。皇后ゆうしつたの崔鬼と御

覽するに。八十餘る老翁此處彼所の岩根を穿ち。一心不乱に營ぬ。皇后間近く立寄玉ひ。是れ翁ハ何の爲斯る事をば爲しけるぞ。さんゆ蕪草の根を掘りて今日の命を繋ぐ翁にてい。見奉れば只人ならず斯く貴なき御身として。恐しき山中に迷い玉ふハ何ゆゑぞ。折居の局隔たりて。同 コリヤ下々己は果報の者成ぞ。渡らせ玉ふ御方は當今の御后。磐之の皇后様成ぞ。假初の御物出何にてもお慰み。面白き事あらハ中上よと有けれハ。翁遙に飛退りそら恐ろしや恐あり。存せぬ事にてゆへば眞平御免下さるべしと。草に平伏し居たりけり。折居重ねて成程尤斷り也去乍ら御旅路。何事も御免成そ何ぞ變りし事あらハ。委敷中上よとある。同 斯る賤しき山賤の何を存て中上ん。然れ共此山には年比住馴ゆへば。案内はよつく存じしなり爰に一ツの御慰み。此の山を彼所へ越へ南面の深山に。蓬萊山のゆを。世の人曾て是を存せず。八十に余る此翁も漸々此頃見附つ。同 人にも語らず只一人山稼ぎの暇には。参りて樂み中也。誠に目出度蓬萊山。内裏様への御土産に詳しく御目に掛中さん。いざさせ玉へと先に立道無き所を技折草。別つゝ行は咲かへる桃林甚た緑林と。落葉暫くせぐまら數百歩過て活然と。美を盡しぬる風景あり是ハいか成所ぞと。皇妃を始奉り供奉の女官も諸共に。あつと感じて立玉ふ

不思議や遽かに空陰曇り。闇夜に等しき雨催ひ。雷鳴騒ぎ方木を吹折し風土塊を「動かせり
翁と見へしは雷鳴が有つる形ち願はれて。皇后を擁抱み車輪のとく振回し。谷底深く投墮し其
身は忽ち皇后の。有し姿と變じつたらぬ体にて立ければ。晴行く空は濶々と日蔭まばゆく照
添へて夢の醒たる如くなり。皇后折居其外の女房達を召れつ。ナウそなた衆は何とした怖し
いでり無りしか。先の方々恙無く悦ばしやどの玉へ。折居を始め官女達怖いと申は常の事。
初めの程は面々に臆を用心致し。互に探合けるが後の暗さと雨風の殿しうなつて吹時は生
たる心地ゆらはず。兎に角御上の御事を何とか渡らせ玉ふぞ。最期の際迄存しに。御前にも
何事無く拜まれさせ玉ふ段。世に有難し忝なし斯る目出度折あれば。夫々次女の房達。九獻
しどのゆめけば。又賑々と幔幕の内ぞゆかしき。またと行まぬれしはけわざに。逢ぬ憂さ
がうい程につらさが逢ぬ。あぬぬつらさがうい程にと。國語唄ふ賤の女の手々に質を携へて大
根引じやと。一柯がうちうるひし土おほね手毎に引て質に入。サア休まふかと高麗に腰打掛
て一服の。烟草輪に吹き玉に吹き。お幕の近所遠慮も無く。取々の物噂男噂色噂。中にも
谷の木介が娘おねと云ふの云けるは。夫とては世の中に合點の行ぬ事共の。有が中にも合點

のゆるぬは辻のどち兵衛娘。すんべりのおしがの事。アノじやうの嫁入はまた跡の月二十日
頃。夫に來月産月とはうらが思案に落付ぬ。皆の衆是はとうした事此内に此わかち。知れた人が
有ならべ云ふて聞しやと言ければ。新家のおなべがしやらり出て。さつてもおと無い爰な人。
まだ嫁入の無い先に莖大根のぬみされり。饅で束ねた蕪菜も。わりなき中のなかぬきと一夜が内
に揉込で惣加減よき床の内。畠大根のはへ口のぬぶかふいつた二股の。むつしやらくしやらし
た事が。狎じくしてあの如く。身の皮剝て裸体となり。おろし大根の談合も。膾大根のはりの
さきめぐる因果の恐しく。辛味大根の親達が開たか聞かぬか知らね共。別の仔細も無い様子
切て彼子が來年の三月子なれば。能のにと束たやうに饒舌けり。ねね、愈々合點せず。わし
らも父様や母様の隣村の孫助へ嫁入をさするとして談合の眞最中行ぬ先から恐しう病に成程案じ
るに。嫁入させぬ其内に男と寝ると云ふ事は怖い事じやと云ければ。ヨウ、怖かぬとして見
や。夫はし、いとしてどう共かう共成ぬもの。まさかの時には骨々も摧くる様に成て來て。
ちりけもとから寒氣の立日本國が一所へ。寄様に成て來る是はもう死ぬるげな。いつそに死で
退たいと思ふ様など我知らず。顔をあかめて話すれば。イヤ、夫は皆虚言じや。夕邊もわ

しは寝たけれどもないな事は何も無いと。云せも果す口を揃へヤレ。是は開所。サア。と寝たけれども有様にいやといふ。ハテか。様と寝たけれども死ぬる様にも無つたと。皆迄云せすと寝つた。か。様に抱れて寝て何のこそばい事がある爰な阿呆がいふ事は。一度にどつとぞ突倒し。か。様に抱れて寝て何のこそばい事がある爰な阿呆がいふ事は。一度にどつとぞ笑ける。所へれしのは夫婦連是も山田の大根引。手を引合て來掛れば女子共取巻て。コレれしが。今日は目出度一村の大根引と身祝で。男持たも持たぬのも女子は女子一連に。大根引に出けるに其方斗が夫持の顔夫婦連。置てたもやと嫌がらす。夫の與六が云ける。成程おしが。其方衆と一所に行かふと云つれど。身の重ひ女房を手放して遣る氣遣さに。山田へ連れていた事じゃ。爰は了簡してたもど。女房勞る睡じさ憎うは無産前じやが。どつとも好かチウ。氣遣しやるな息才な。追つ付男子悦んで皆の衆にも抱せうぞ。あやかりややいのと云ければ。成程おしらもあやかると。産衣の用意して置た。此方等が居るからは氣遣しやるな腰抱て。安ら産せよと打笑ひ既に「彼所を立けるを。皇后の御幕より鳳輦の力者共追へ」に走出懐胎の女夫婦。御前より御用のある参りませいと有ければ。女子ども立歸り。夫の衆は仕合じや。彼方は内裏のおか様じやげな。今朝から爰へ野遊びにお出なされて慰み。何ぞ下さる事じやあ

ろ。ほつてりと貫かておじや。こちとは先へ歸るぞと。打連山をぞ下りける。何事やらんと夫婦の者頭巾取やら置手拭。小腰を屈め揉手をして懼々御前に出けるを。一言の仔細も云せず高小手手に縛め。先女房を松の梢に括上げ。夫與六は雙方より小腕を取て引据る。折居の局走出是はまあ何の爲。何慮外を致しまし斯は縛め玉ふぞや。少々事ならバ御許を蒙ふらんと。思ひ入てぞ詫らる。皇后仰下さるは。犯せる科は無けれども幕越しに聞つるに。此女懐胎の由慰みの爲腹を裂せ。孕みし様を見ん爲と。仰も果ぬに折居の局。高きも身きも女は互ひ其上彼を殺すれば。腹成世倅も死は遁れど。現在女を殺されて夫も生てはよもいられじ。然ば益無き御事に眼前三人殺し玉ふ。其罪何方へ行べきぞ。天皇様には民の憂救ん爲玉体を苦させ玉はずや。今朝鳳輦に召さる迄其御心で無りしが。いか成天魔が入替り斯る惡事を思立。最前の大風よれ案内申せし老人の。行方無きさへ不便成に科も無き夫婦をば。お慰みに殺さんとは胸欲心とやさふか。御慈悲の無いとやさふか。日本開闢以來に斯る后妃の御身持あるべき事かと席を打泪を流し諫めぬる心ざして道理なれ。皇后御氣色變らせ玉ひ。十善帝位の後と生れ是程の榮耀が成まいものか。推參な今一言云ふて見よ。命が惜くば諫むるなど以ての外

成御氣色。御局猶も止まらず假令命が惜いとて。自付添奉りた諫すまで置べきか。汝ら細を切ほと急いで返せと立けるを。皇后御足に掛玉へば大事の急所を蹴られしか。うつと斗に息絶ぬ。御局諫め玉ふ上御承引無きのみならず。命を取らせ玉ひぬれば。重ねて諫むる人も無く静まり返つて居たりけり。皇后力者を御前に召れ夫々女の腹を裂き。孕みし様を見せよとある御使度々に重れば。多くの力者立覆ひ既にかうよと見へければ。女ハ暫しと聲を上げ。扱々是れ胸窓。科あるごにもお慈悲にて助かる事も候に。罪科とては候らはす殊更只の身では無し。一人ならず三人迄御慰みに殺さんとは。餘りに酷い成され様御近習の女房達。何とぞ詫して玉はれと身慄ひしてこそ泣居たれ。夫は餘りの悲しさに物をも云す差俯き。泪に暮つて居たりしが誠に親も許さぬ中。此子を身に持ち候ゆる夫婦の者は幾程か思ひぬ苦勞を致せしが。子ゆゑに親へも詫立て。漸夫婦に罷成り今はと安堵の思ひを爲し。此子をだにも産だらは兩方の親にも見せ。悦せんと思ひしに是はいか成因果ぞと啜咽て居たりける。皇后重て然ば十の爪と離たん。木の根を掘て木を倒し。連て歸れとの玉へば。男泪に暮ながら叶ふべきとは存せぬと。私が一命は捨てても一人。女房は親子二人の命也。爪は無くとも木の根を掘り女房親子を助

けん。手を差出せば力者共我もくと立掛り。十の爪をは離せしは目も當られぬ責苦也。女房泪に暮乍らコレ與六殿。譬へは爪があればとて幾年経とも知らざりし。此松が根が掘れる物か愚なり。わらわの命も是迄ぞ。舌喰切て死すべくば。御身も共に續かれよ假令命は消るとも。二人の魂魄此土に留り。生を替ても此恨。已返さで置くべきかと。二人目と目を見合せて身の苦しさを思遣。堰上く聲を上齒嚙をなしてぞ泣き居たる。皇后稍打笑せ玉ひ。不甲斐無き夫が有様中々木の根は掘得まじ。疾々女の腹を裂夫にも能見せてしやつめも跡も刺殺せ。是を肴に御酒くと。大なる盃に酒とらうくと酌持て。臂押張て立玉ふは。垣根に咲る花棘針を持たる如く也。還ましげ成力者共左右へ分つて劍を持ち。服十文字に切明れば。アツト斗の一聲に血汐流れて子歸りし朱に染つて流落つ。左しも切なき苦しみの。身に餘り木や小高き松。折る斗にめつき。風吹すさぶに異ならず。夫は思はずすつくと立苦しいか女房。チウ。断尤也最前契約せし如く。身はずたに成迎も一念違ふ諸共に。二人が魂は荆棘の露に留り此恨み。晴さでなをか置べきと躍上り飛上り。大地も拔上と踏鳴し血の涙をはらく。腹立や口惜やと。齒嚙をなして立處を。左右の脇坪ごとと刺す。少とも痕まず眼を睜き。サア

女房今成が一念は違ぬか。氣遣召さるな我夫と互に聲を掛合せ。舌喰切て一時に。ついに浮世を見果ぬる念力こそは恐しき。今日の御遊も是迄と既に風籠夕陽に。輝く斗の粧ひにて還御を急げば不思議やな。二ツの玉は鳳籠を遙かに追駈たりけるが。又立還る谷陰や皇后の亡骸に入よと見ゆれば御形忽ちむつくと起直り。只茫然と山住の月に暮つゝ花に明。木の實を食し起伏に。心の動く時も無く。此所に遊行し彼所に遊び。天生風の心を知り。天生水の心を知り。虚空を翔り學ずも。不思議に得たる仙術を名付て今の西王母。日本仙女の始りは此御後の蘇生なり。

第二

君は臣を以て躰とす臣又君を心とす。君臣一體成時の政事定て國家泰平成とかや。爰に忠臣武内の長男木菟の宿禰とサせしは。文武の長臣殊に又。琴棋書畫を弄ひ世に類なき聞へ有。此度皇后逢萊山の還御より。御心例ならず假初の御遊にも。御酒興の餘りに放火を好み人を害し。悪行日々に長過して民を苦め玉事。父武内の臣諸共にせいゝを誦させ玉ひぬれど。何故斯とも決し難く。晝夜心を碎き玉ふ枕も限なかりけり。日頃に好る道として多の繪具要め

よせ。正書しやうまきの草の花心を夫うらにうつし繪の。其心にも其一きつ胸中に横たはり。好事思ひ出せしと郎等らうとう金堂丸が母を召れ。同。汝等も知る如く皇后の御有様。御病氣共障碍しやうがいとも黒白くろくわくそれと分け難し。然れ共我々の御側そば近く參らぬ身。常の御身持いかゞ渡らせ給ふらん。ゆかにどしても覺束かほつかなし。何とぞ女の忍しのびを人れ事の様をと思へ共。是ぞと思ふ者もなく此事のみ屈托くつたくす。頃日御使者下されしは若き女の酒飲有らば。御酒相手に差上よと度々仰付らるゝ。をとほ我に乳を分て育上たる事成ば。亡り給ふ母同前。幸其方は酒も成智恵敏く力強し。お尋有こり仕合なれ御宮仕へと偽り。御酒相手に罷出方端はんたんに心を注げ。様子を伺ひくれよかし偏ひとへに頼むと有ければ乳人謹んで承り。何が扱あつか主命と中養ひ君。頼むとの御一言假命令を召さるゝ迎。何にしに否とや上ん去ながら彼方から。若き女中とゆに此七十に餘る白髮婆々。御酒相手とやては中々召され候まじ。何とぞ若き女中の内今一度御吟味もやと云ければ。宿禰すくねいか様其顔では掛酌けんしやくも尤也。併し某が身に替入置事なれば酒が成つても若うても。智勇を兼し者ならねば一大事の役にたらず。ハテ扱難儀千万と眉を擧めて在せしが。暫く有て打領うなづき。同。コリヤ一ひと姫ひめよ此方寄れ。物の見事な智恵が出た。幸い某畫をかけば彩色事に妙を得たり。繪具を以て汝が顔七八十

をひつくり返し十七八に若やかせ。其白髪も今の間に眞黒に艶を出し。色の盛にして見せん黙つて居よと引寄せ。畫筆を以て彩色は何かは知らせ白髪は。かうろぎの墨を流せし黒髪の。銀を出して照輝顔は白ふも赤ふも爲し。返り花咲く櫻色振袖着せて姿見に。うつして見れば天桃の春を悼める粧ひと。なり振違ふ畫工の妙いか様奇代の筆勢あり。宿禰締つすがめつ見て。去迎尤當世女房云ふべき所更になし。併し何所やら一所寂しい所が有様。誠に夫よ肩がない振袖着たる女房に。眉がなうては叶はじと又筆染て書添て。是であうく眼の内に張も出來戀と情の二側の。目に描てばす倅げや急いで乗物拵へと。同 コリヤ姫。最前もいふ如く御酒相手に成内も。又御宿直の其中も。随分方氣を附て心に落ぬ事あらば。忍びて文を書認め婢の女を差越べし。諸事をぬかるな大酒して。此方の化を顯はすなど云合むれば乳人は。万端氣遣遊すな譬ば皇后御酒過て。酔狂ひを遊すとも此かま婆々が居るから。取つかまへて捻据 急度御諫サさんど。腕まくりして皺聲宿禰ヤア〜此處な者。十七八の女房に爾した聲が有べきか。搦いて其聲出すまいと互に笑ひつ叩ひつ。御所を指てぞ「上らるゝ。斯て御所には天皇離宮に御幸成民の籠の薄煙。立や立すやわらなんと敬慮を困しめ玉ふゆる。帝都の還御も何時となく滞

らせ玉ひぬれば。皇后の御方には御徒然の餘にや。御酒宴日々に長じつゝ御酒興の御事共。段々奏し奉れば逆鱗甚夥からぞ。御震翰だに絶果て君恩業よりも薄かりき。或夕暮の事成しに御湯ひかせ玉ひつゝ。金閨障の夕日御鏡に向はせ玉ひ。茫然たる御有様折節侍く官女もなく。能折柄の御化粧去にても我日毎の酒。顔色いかゞ氣遣はしと有し倅顯して。やゝ打眺我ながら去りとの憐愍き面色と。又皇后の面に替左らぬ体にて在しける。兼てお召有けるゆる天皇の御弟。郎子の王子御入とね案内申上げれば。珍らしの臨光それ此方へ招せられ。兼て皇妃の御心に御企有事なれば。様々變し玉へ共王子は少しも打解玉はず。禮儀正しき御應皇后斯ては思立。併せ合ざる御事共御言の葉にも出されずと御案じ頼ひ玉ひしが。日頃の魔術爰こそと。御息を吹玉へば怪しき姿顯れて。有つる長柄の御銚子に身を懸じてぞ入にける。去ども王子を始として多くの官女に至る迄。御側近く有乍ら夢にだも見ぬ。魔術の程不思議と云ふも餘あり御土器を改玉まひ王子に進め玉ひぬれば。謹で頂戴有一蒸ほして御覽有に。本より魔術の事なれば其味甘露の如くにて。心身忽ち乱れつゝ珍らしの美酒今一ツと。三献續けて了し玉へば顔色殆ど常ならず。朱を濃ぎし如くにて。稍亂れさせ玉ひけり。皇后折ころ能めれと王子を

近く招かせ玉ひ。密談の御事有。暫く御次を仕れと仰出されたりければ。數の女中は幸いと皆々御前を退きぬ。皇后王子に御身を寄せ申上るも思はゆく。又悲しさに打過ぬ。別の事にも候らばぞ。自葛城襲津彦の娘として。皇妃の位に備り一人の太子を設く。然るにいか成宿業にや八才の今日迄言舌叶はせ給ぬは口惜くも又痛はし。後世記録に留まりて世の謠とならん事。返すくも恥し。成長有に隨ひて御いとれしみ深う成思乍らも相延ぬ未だ稚き其内に命を取つてたび玉へ此事頼み申さんため。臨光を希ひぬ劍戟を以て殺さんは。遠親子の事なれば。見る目も宛悼はし。傳へ聞毒薬に若き女の生肝を。毒酒に浸し與ふれば必命を畢るを聞。何とぞ王子の斗らひにて。亡身となして玉はれと思ひ入たる御風情。王子臨光有迄は本心違はせ玉はざるに。魔術の酒に本性を失ひ玉ひ。あらぬ懸路に踏迷ひ皇后の御手を取。成程安き御事也去乍ら。我爲にも正しき甥の事なれば不便には存ずれど。仰せも重く候へばいかにも失ひ申さんが。又我戀はいかにぞや申さぬ迎も大方は。御心に覺へあらんつらさに替ん我命。全く惜はいたさぬと諄ち玉へば皇后は。打蕩れたる戀衣。色染渡る思川淺からぬ御言葉。いかにあらぬ船舟のこぐる斗に候へ共。當今在しぬる内は許させ玉へと有ければ。王子猶

しも戀の山登り詰たる岩が根の。重き事とは云乍ら我の思に比べは。近頃輕き御一言兄天皇だに無りせば。只今の詞の海心迄來滿汐の。ひかせませぬがいかにぞと仰も果ぬに何が扱。憂身一ツに成から何にか懼り候べし。神鏡の御罰を受ん法もあれ何しに偽り申さんと。御寶を誓に入れ誠を明し玉ひぬれば。王子の嬉しく小睡して然バ太子を始として。天皇諸共討申さん兄天皇を討上は。我万乗の位に備はり二代の后と仰がんに。いかで仔細の候べし。併天皇を討迄は万端穩密然るべし。武内親子が聞つれば殊外かしがまし。先々太子は毒害にて只今殺し申べし。夫れ先肝を取らるべき女を召れ。此方へ渡さるべしと有ければ。皇后重て幸今宵始ての奉公人。宿禰が方より差越ぬ此女こそ然るべけれ。夫々と召れつと籠中「深く入玉ふ。初めて出る御前の首尾束もなしと思ひけん。太子を誘ひ奉り御前にこそ出にけれ。王子御覽は是の聞ゆる御酒相手。酒は知らぬと先器量。御酒宴過ば某が添臥に申受。床盃の相手ぞと御藏おれに事寄せ。胸づくしを確と取太刀に手を掛玉ひぬれば。彼女びくともせず二の御腕を確と取りどこへと云て踏止り働かせんず氣色なし。王子大きに仰天有何とも仕舞附難く。近頃女め慮外者。戯ふれの餘り手を取に敵對致すは何事ぞ。去るにても已恐ろしや。男勝りの剛力者何共

胸に落ぬやつ。まぎらはしやどの玉へは彼女顔振上。胸に落ぬどの玉をのわらはが胸に猶落ぬ御戯ふれにも致せかし御添臥を致せとの御情けにて候へば。何とぞ是はお優しひ。お事共の有べきに胸すくしをば取らせ玉ひ。御太刀にお手を掛玉ふは何共まゝが落付ぬ。但は一度も寐ぬ内からは口説かまだ早い。先々口説は後の事思ひ設けぬ初戀の。花珍した初枕かはしてからと締附る。さしもの王子堪へ兼愛な女め痛かなあいたくあいたくと身を悶く。あいた見さへ飛立斗籠の鳥かや恨めしや恨めしの御仕方つれなきの情無君やと締付る。王子うるさく持扱ひほぐれと取て引上げ。彼所へとうと打附れば胸うはに有つる酒瓶の。御秘藏ニツ打こがし夢見た様に酒浸り。是はの身悶へに顔の彩色首の墨。一度に剝て忽ちに。七十越た白髪婆々振袖絞るぞ可笑けれ。王子つくつく思案して生肝取て酒に入。太子を殺すは手間遠也踏殺さんと引寄て御足の下におつひしきふんじかつてぞ立たりける。木菟の宿禰は金堂が母が知らせに驚きて。眞一文字につつと入先づ尊たごを奪うばひ取。弓手の小脇こわきに引挟み。同イヤ珍しの臨光。御氣色みけしほ只ならぬハ奈成御事候ぞ。王子御此皆に角かどを立。ヤイ朝敵の張本。已生てハ返さぬぞ。急度覺悟を仕れと反打掛て怒らるれば。宿禰聞てやらく變つた御一言。シテ又某朝敵とハ何を以て仰らる

王子重ねて云ふまい。夫程の工たくまばを此王子めが知るまいか。七十に餘たる白髪婆々をば。彩色いろひて十七八の姿すがたに作り皇妃の御殿みどのに入置て。事を窺うかがふ爲ため体謀叛たいぼうはんで無ないとは云れまい。返答へんたうあらば仕しれサア何なにじやくと膝寄にりよ。宿禰かつらからと打笑ひ。去ば皇后此頃このころは晝夜御酒しゆゑん宴えん好このころみ玉たまひ御酒相手に成べき女一人差上奉れと。御使度々に重なるゆゑ色々吟味ぎんみ致せ共。御酒事の御相手に罷出ひだべき女無し。漸々彼女を求出し差上んとは存すれと。御覽みかんの如く七十に餘れる程の老女也。彼是詮索致す内怪うちがやしからぬお使ゆゑ。若し御機嫌ごきげんを背そむきてハ御慰ごゐの妨さまたげ。某好このころる繪具えぐより存付ての細工也。身不肖ながら父武内むねの臣おみが一子。木菟の宿禰すくねと呼ばれては官祿くわんろく共に不足無し。然しかに何の益えき有あて謀叛むぼんを存立ぞんたべきぞ。此方の云譯いひわけは千度とはれ拷問がうもんにあふても斯このころの通り也。扱御前あつかひには何の爲太子みこを足下あしもとに掛玉かたまふ。此云譯いひわけは何とく。去ばく皇后より御使ごしを玉たまり。御召ごまに因よて参上まゐり皇后仰らるゝには。我十善の皇妃みかひに供ともはり斯不具このころなる太子みこを産うみ。末々後紀ごきに留とどらん事返すくも口惜くちがし。何とぞ太子を殺し参らせ天皇様てんかうさまと自みづかが。悪名あくなを雪ゆひでたべ偏ひとへに頼たのむの玉たまふゆゑ。いか様是は尤このころと足下あしもとに掛しが誤あやりかど。空嘯うつろいてぞ居たりける。宿禰愈々得心いよくこころあり。同誤このころともく日本一の大誤り。其云譯いひわけは立申たてまさぬ仔細しじゆをゆつば太子今年八才このころよ。八ッ迄

嘔にて渡らせ玉ふ。夫が只今知たるか。左程に思召れば四五赤斗の御時に。其御沙汰の有筈
 よ。其上太子不具でも苦しからざる例有。其上二柱の御神天の浮橋の涉下にて。尊のまくば
 い有しと一女三男を設け玉。一女は今の天照御神。月よみ日よみ蛭子素戔嗚鳥。第三蛭子の王
 子三才迄是にて渡らせ玉ふ御事は。和朝に於て隠なし。剩さへ商人の富貴を祈る大福神と祝は
 れ玉ふ。夫は此方も合點にて。俄に嘔を氣の毒に。思召るゝ皇后と御密談有事は。此方が朝敵
 叛逆人。爰に一ツ厭と云はれぬ誤り有。嫂溺るゝ時んば手を取らずとまを承れ。夫に御兩
 所密々に手を取又は手を取られ。兄天皇を打殺し我万乗の位に供り。天下を納めん其時皇后は
 二代の后。夫が合點でゆはゝ此尊をも殺んど。もうもゝ云れたのふ。木菟の宿禰が聞か
 らは最早許しは致さぬぞ。急度觀念致されよと鏢本四五寸寛げて。兩方互ひに目も離さず動かば
 打んず勢なり。所へ岩藤金堂丸雷の落たる如くにて。御殿の内へ突と入。官人共立器り是
 より奥へ汝等は通さぬ還れと衝戻す。金堂少ともたじろかす尤々去乍ら。夫は常成時の事只今
 主君御殿にて。王子の惡逆顯れて御詮議最中たるの由。聞と等しく駈付たり。いらざる戯行
 かはかすと急いで退て通をせし。惡ふのさばり召るゝと片端土足に掛。頭未塵に踏碎く。サ
 ア退け退ぬかゝと握拳で張廻せば。敢て近付者も無く一ツ所へ躡蹠り。ぶつくさ云ふて居
 る所を。わつと云へば一時に。むらゝと逃散たり。左もろろと障子蹴倒し御簾か
 ぐるり。玉殿指て突と入我君是に渡らせ給ふか。金堂丸輝御迎ひの爲参りし也。承れば郎
 子殿皇后様と心を合せ。御謀叛企てらるこの由。ハテ涉詮議に及ぬ事。片端捻殺し。さらりと
 掃を明たが能い最前をりの御心遣ひ。些御休息遊ばされよ恐乍ら拙者めが御詮議を代らんと。
 王子と主君の真中へ。會釋もなくすつと入一刀に反打掛け。はつたと睨んでさしよるは。單に
 天魔厄神の荒たる氣色も斯やらん。王子少しも相手に乗らぞ。コリヤ官軍共匹夫には目も掛
 な。宿禰尊を洩すすかと眼を配つて下知すれば。一味の者共畏まり。前後左右より追取巻く。
 金堂何所へと追捲り。跡の義は金堂の宜敷斗ひ中さんに先我君は尊をば。誘い給へ母ヒヤ人御
 供中て退るべし。跡はむすこが受取と力を付れば母は悦び立歸りテウ頼もしく。跡をば防
 げ自も年の五十も若やげば。力も心も若やいど。いざとよ我君此方へと。先に押立退けるに
 手を指者も無りけり。金堂今は是迄也扱是からハ王子をば。御供中て退べきの脊高く御肥満で
 中々抱てハ退れまい首と胴とを別にして。サア取滅で退くべいと扱たる所ろが四尺八寸。幅四

寸二分二筋の繩に朱を入れしぐんびら物。すはと抜て追拂へば四邊へ近付者も無し。王子は隙を伺て命辛々何地共。行方知らず成給ふ。金堂さつても氣散じな。廣い所に只一人暫く休んで參らんと。たぐらひつかき腕擦り。心を許し居る所へ。屏風が隈より。岩崎左近倅川軍次躍出ユリヤ捕つたはとむすと組む。金堂莞爾と打笑ひ。己等も王子より糊米程の知行を取る。冥加の爲と思ひつゝ組だ所がしほらしむ。組だ代りに組せうぞサア。其所で酒汲ぎ。イヤ御出と素首取りニツ並びし酒瓶へ。眞逆様に打込だ。ハア。まいるは。可笑さ見惚て居たりけり。二人は壺を引擔ぎよろり。よろり。ととろほひながら漸彼所を逃去ぬ。金堂可笑耐られず高笑ひして立所へ。一度にどたと駈寄を或は蹴倒し踏倒し。追捲り追戻し心靜に還る波。逆巻波に狂波立波漣波さ々れなみ。時に取ての荒波と。岩波越て行浪の。引は返さじ武士は片男浪ころ姿なれ

第三

夫孝の親に事つるに始り。君に事るに中頃し身を立て後畢るとかや爰も宮外宮方領の百姓よ。白ひ黒ひも辨ぬ暮乱太川原の金吉迎。堅い翁の夫婦連武内の御所方に。宮仕ぬる姉娘一兩年は事絶て。音信だにもあらされば遺親子の中々に。恨つ又は歎きつゝ今は有にもあられぬば。手土産の手作りを番に荷いて片々は。糸瓜の皮のたんぶを締たる御門に差掛り。何と思やると時ならぬ御門の戸さし。案内をみて見ばやとて。御門の扉遠慮もなく頼りに音便たりけれ。物見の窓より下部面何者成ぞと尤めける。イヤ苦うもははず。奥女中の其中に小夜照ら由縁の者。内用あつて在所より遙く參侍なり。御取次を頼ますると云ければ。下部共口。左様の女中有無は我々が存せぬ事。仔細有て今日ハ御門の出入成難し。其上他所より參る衆はなかつく奥方へ。中通する事難し。是より疾々還るべしとぞ答へける。夫婦重て我々は小夜照が里の親。用々の事有て折角參ゆなり。是非。中次でたべ頼ますると云ければ。御親子の事御尤併此節は親子兄弟縁類共。男女に限らず御對面罷ならぬと有ければ。夫婦の者は是非もなく。這は抑いかにと呆果只茫然と佇ぬ。所へ雜掌四五人に先を拂らせ年の頃。七十斗の女武者小具足につば折掛。大長刀を掻込でゆらりと歩み寄何者成ぞと尤めける。夫婦の者は片寄籠んで居たりしが。能折柄と差寄て。私共は宮様領暮乱太川原の百姓金吉と申者。私が姉娘小夜照と申せしを。四五年以前御領へ御奉公に出せしが。一兩年は事絶

て音信迎も仕らず。餘りに心元無くて顔見ん爲に今日ハ。阿翁媪共に存立遠々参り候に何の御事成けるにや御門厳しく追返さる。哀れ扱御慈悲に一目逢せて給はれと恐入てぞ申しける。かの老女打領ぎ。成程御門は嚴敷等。此度宮のお謀叛ゆる御所の騒動夥敷。上々様には親子御共御所を守護して在します。御館は我々親子して斯様に固め申なり。其方達は奥女中小夜照が親くどや。自は執權職岩藤金堂丸輝が母の親。大方の義は自が万端支配の事成が。何共合点のゆかぬ事小夜照事は御前もよく。随分勤申されしが妾か子の相役に。紀角の舍人と云ふ人と不義の事は有て。遂にれ上のれ耳に立兩人共に追拂はれ。最早三歳に餘りしがまご其方衆は知らざるか。定て面目無さのまご自害か遠國仕つらんが。不便の事やと有ければ。夫婦の者は興覺てはつと斗に聲を上泣より外の事どなき。女房漸々泪を押へ。上々様には斯様の義御存なされぬ事ながら。御謀叛ゆるか宮様より下下の米穀盡く。召上られて只今は我々共を始として。村中飢に及しゆゑ何とぞ娘に歎きつゝ合力をも願はん爲渡兼たる浮世川游ぎもつくが如くにて。遠き所を参しなり。我子の行衛なき事は夢にも存候へで御所には飽な娘みれば。詞心便りと存まし八ッに成し妹をも。養ひ兼は致します他の村の百姓へ。養子に遣はは是迎も

今ではわしらが子では無し。どうやらかうやら一時に娘二人を失ひて。世に便無き老の身の行末何と成べきと。夫婦諸共もつれ合ひ地に平伏てぞ泣居たる。老女も不便と立寄ていか様歎くは道理あり。詞何とぞ少し合力し里へ還して取せんが。王子御領の者なれば只今でハ敵味方は思ながらも左は成らず。況て御家は二人共追放の者なれば少し斗りの合力も上へ對して成難し。返すく自も笑止には思へ共。右の仕合是非も無し急で在所へ歸りつゝ。憂をも凌ぎ小夜照が行衛も尋らるべしと。つとく検校事畢り御門の内へぞいられける。夫婦の者は厭れ果御門の方を打眺め。扱々是非無き事共子ながら憎き女めかな。男に見替二親を有共無共思はざる。去とハ不孝な世倅やと。恨詫び掻口説き齒嚙をなしてぞ居たりける。女房も涙なごら。恨尤断なり。去ながら死失したる身ではなし。何とぞ行衛を尋ねつゝ恨は逢た時の事。便りせぬにも譯がある。滅多に腹を立ずとも先々在所へ戻らしやれ。何しに親を棄おぞと夫の怒を宥めぬる。母が心の悲しさも恨むる父が心根も。何れ劣らぬ思ひ草分つゝ行けば「一夜隠し假初の黄庭。今ハ涙を重てぞ。敷に付つゝ床しきは忍合夜の綾鞋。住浮れぬる今は只。人の逢瀬に敷妙の。庭織てお營ハ。昔しに變る傍けや男細なう女は禪機に馴たるゆと拍子。習ふ

としもは無れども。手馴易き下司仕事。夜は夕なべに更て行。年間はおより世を訪の。世帯姿ぞ恨めしき。難波の京の片里に紀角の舍人とやつ。一人の浪人有。元は武内の執權職紀角の小達が一子也しか。奥女中小夜照と色の中垣越へて。折々ごとの忍ねり人も知じと思ひしに。花に嵐月に雲。かゝる妹背をおなめに。さかしらをする女有。夫より段々御吟味の上沙汰に成二人共。大内を追拂はれ繼の知邊を便にて。今此里の民すらの中に交り暮せ共。夫婦一所の愛住居。憂中なる樂みど。茶をあまなひて暮しける。然る所へ木菟の宿禰危き園を金堂が。勇猛の働きゆる漸々逃給ひ。怪氣なる韓樞に。尊を忍ばせ奉り甲斐く敷も背に負ひ。賤が管錢身に纏ひ竹の子笠で顔隠し。庵の外面に忍び寄。網戸に佇立音便。主の女立出て誰人成と咎めける。いや苦しうもいらはず。旅の者にてゆが。若此邊に紀角舍人とや京浪人は在せぬか。成程是にてゆが何故のお尋ぞと。顔差覗けば主君宿禰昔にあらぬ御姿。是はいか成御有様先此方へと杞案内し。夫に斯と告げれば舍人驚き走り出。コハ訝しと御供し一間に招じ奉り。怪からぬ御有様恐乍ら覺束なしと尋ぬれり。宿禰舍人を近く召れ。去ば此度郎子の王子御謀叛を企てられ。禁中大方一味して以ての外の騒動。君は万民困窮の御祈の其爲。

葛城の離宮へ御幸なる。父大臣は御病氣残るは某一人也。金堂丸が働ゆる尊を助け奉り。是迄は立退しど。韓樞の蓋押明。尊を出し奉れば舍人夫婦は。首を地に付。斯る御事無りせば奈でが君を拜すべし。去乍ら賤が庵萬に付て思しど。織下したる管絃二枚重て二疊臺。御座をしつらひ奉り粟飯調する其隙に。栗焼立て堆高く柏のてり葉に盛並べ。御前にころ捧けれ。宿禰大慨限りなく。其方夫婦の者どもへ不義ゆゑ父大臣殿。勘當なされし事なればもし別心も有べきかど。心元なく思ひしに。底意なき有様へ近頃祝着申して有。尊を失ひ申さんと王子一味の官軍共。方々を捜すに付。御身を隠すに所なし。其方達へ大臣殿勘當受し者なれば。敵思掛もなく詮議致すに及ぶまし。然ば尊を隠さんには屈竟一の所と思ひ。是迄忍ばせ奉る。汝等夫婦力と成尊を隠し奉れ宮の御命恙なく。朝敵退治の其上は。勳功に申替父大臣殿御勘氣は。某奏し奉り君よりの勅諭にて。本領共に申下し。安堵の思ひをさすべきぞ單に頼との玉へば。舍人謹んで畏り。コハ勿体無き御説や候。我々夫婦か御勘氣。御目を掠めし科有れば恨申さん様はなし。斯はふれたる舍人めを侍と思召。是迄の御出は未だ武運に盡ざる所。身はずたゝくに成迎もいかでか尊を朝敵の。官軍共に渡すべき只御心安かるべし。併し此所は則ち王

子の御領分。一村の土民等が王子の威勢に恐れつゝ。奈成事をか仕出さん時を越て山跡には。由縁の者の候へば一先是迄。御供中候べきやと伺へば。誠に汝が云ふ如く此處の宮領あるを事急なるに取紛れふつゝと失念やてある。然る上此の所の長座宜かるまじきぞ。早々御供仕れと御前に畏り。此一村の敵の領御爲宜しからざれば。主の舍人が供奉致し山跡の國中迄密に忍ばせ奉る。何事も只夫婦の者宜しく斗らひ奉らん。宿禰は都氣遣はしく御暇中も都の騒動静らば。御迎には某の早々参りべし。返へすも夫婦をば世に懸敷く思召せ。れ暇中もと申上れを一言の。御返答も叶はこそ只御泪に暮ながら。打領せ玉ひぬれば。宿禰の塚來る涙を押へ。誠に十善万乗の尊と生れ給ふ身が。啞にて渡らせ給ふと。是は奈成報ぞと搦口説てこそ歎かるれ。夫婦の者も涙を押へ御断りや去ながら。時刻移りて悪かりなん。其上斯るお姿では。人の尤も氣遣はし幸ひ美じき生れ付。御髪を取上て賤が娘に御身を作り。御供中もべし折こそ能めれ近所より。縫賃取て仕立し負衣。是重疊と召させまし。別れく行末は覺束涙ぞしるべなる。未だ時をも移さぬ間に。官軍數多乱入庵の前後を追取捲。爰や彼所と探す体女房ちやくと心得て。尊を機のうちへ隠し鬘打被て素知らぬ顔。忙そふにぞ營みける。

雜兵外面を取捲は願立たる者共はずかしくと内に入。方々様子を見巡り。伺こりやくと土民。此所へ韓櫃負ふたる者來り。暫くの内間取身すがら出てかへるの由。訴人が有て詮議に及ぶ。預者を取り出し急いで渡せと云ければ。舍人彼所に蹲り御覽の如く小家の儀。見へ渡りたる分の事其上昨日晝過より。急ぎの物を受取かぶり掉間もゆはず。韓櫃とやては是より外に貯無し。此詮議有て下さるべしと云ければ。官軍立寄蓋押明。コリヤ明櫃だが中成は。何處へ遣たと尋れば。ハアイヤ夫は曲ましたと。云せも果ぞ口々に曲たといふは何した事。眞直に白狀せよと實ければ。成程以前の十分に入れて置たる櫃なれど。其十の字の引捨を右の方へ曲まして。つい七の字にやりましたと願搔く答ふれば。侍共可笑がり。ハテ扱己は大きな當字をいふと有りければ。扱はコリヤ皆様も當字の下地が有るふなど脊中叩けば。土百姓白ひ齒見すれば附上る。いらざる頬げた利すとも此方な鏡のをりたるも。明て見せよと。罵れば。是斗りは御免あれ。拙者の命に替まして。必人に見せまいと預り置し物なれば。此儀に於ては御宥免下さるべしと云ければ。捕手の者共立腹しイヤ爰な野鴉め。此度尊の討手を蒙り。唇々の侍共吟味に掛つて見せまいと。違背に及ぶを了簡し。其儘差置還らぶか不敵なやつが有もの

かな。先我々は何の爲是迄來たと思ふぞと。為りがね欄んで引下し錠捻切て見てければ。古き傘馬の履紙子の破れ敷義。破菅笠明德利天目或は鰐魚節。かくても浮世は暮さると何も興を覺つ。べしても無い事此方へと打連彼所を出にけり。夫婦は可笑さ顔合ひ尊を抱奉り。又輦欄に入參らせけんにようもない顔付で。あげ股打て居る所へ武士共取て返しつ。最前此機の先見殘し置たる不念さど。重て機場を探しつ。此轡轡は先達て。吟味仕れば別儀無し何も此方へ。表面を指て出けるが跡に下りし若侍。織下したる菅鞋捲て見れば這はいかに。濃紅の御袴扱ころ尊は主人めが。隠圍置しに紛れ無しサア。急いで渡すべし。左無きに於ては脇坪にすいあな明て受取がと。右手左手より小腕を取咽の鎖に太刀押當。動がは衝んと突掛る。詞 舍人莞爾と打笑ひ。扱々御念の入たる事。成程御不審御尤然し私が女房事。少し針手が利し迎方々より縫賃にて。萬の仕立仕る。あのお袴は前つ方京都に住居致せし時。去公家衆よりお誂寸尺を聞損じ。御丈に合ざる迎突返されし御袴。町方にては買手もなし切ほをひても遣いんと。色々工夫致せども在所の事にて候へば。袖裏どに買手なく誠に帽子と鉢巻とは此れ袴の事也と辨舌賢く云分けと傍共合点せず。詞 イヤ其云分は暗い。宮御元服なき内は女中

の如く育る法。去に因て御袴も女中の様に仕立れど。君臣裏に相違有。正敷是は宮方に召しあさる。假袴。縫賃にて町方へお出しなさる。物で無し。受領の役人は有て己等如き匹夫等が手に入る者で更々なし。云れぬ事を云ひす共早々渡し申へし。サア。女房。只今夫の一命が忽ち終るが云ぬかど。差附。見せければ女房ハット差當り。宮のお命助けふか夫の命を助けふか。云ふて退ふかいふまいか。ア、何せうぞ斯せうぞ急な所で無い智恵の。出たり入たり戻つたり更に性根は無しけり。所へ隣在所よりハツ斗なる娘の子。風呂敷ひらりと肩に掛け脊戸の口よりそつと来て。詞 アノをか様にわしが着る布子が出来たら下されい。うらが往度ものなれど今宵は晩稻の剝磨できつう忙し御座るゆゑ。うらそば取に遣すすと在所詞のあどなきを叫きまはる。女房嬉しと打領きは幸と思案して。詞 ナ、彼客が往んでから出して遣ふと云捨追手の者に近付。成程宮を打ましてれ首を渡しませふ。夫を助玉はれど又脊戸口へ走出何心なく暗がり。すつくり立て居る所を。小脇指をばするりや拔首搔落し刀に乗せ。詞 何隠しませう宮様は去御方に頼れて。折角隠匿ましたれど夫が命に替られず。御首を玉はつより夫を助玉はらば。お首を渡し申さんと小脇指をばひつそばめ誠しやかに詐れば。討手の者共夫を許

しいしくも致して有ものかな。官をば打て出す上其方共に云分無し。御前宜敷中爲し。褒美の重て取らせんと仕たり顔にて歸りけり。夫は遙かに見送て女房に近付て。急成所の謀ヲウゝ出來た出かされた。扱々危き事共や先々尊を出し參らせ。早々爰を立退んと未だ舌をも引ざるに。幼者の親共は娘が遅さ氣遣て。松明點したれ夫婦連。脊戸口よりも來掛りて。娘が死骸にけしとみ是はといふて見てけるに。首は無れと着る物の模様ハ萌黄に時鳥。泣々骸を搥抱き夫婦が前に直し置。泪片手にコリヤ浪人。何の意趣何の恨か是有て。幼死者を此如く首は討たぞ横道者。扱ハ己が世忤めに此着物を着せんと。慾に目が眩殺したな。天地が引覆がへつても全く其座ハ立せじと。山刀をばひねくり廻し。餘に堰て泣れもせず齒切をしてこそ居たりけれ。舍人夫婦は一言の返答もなくま俯き途方に暮て居たりしが。斯ても事の濟ぬと思ひいかにも。腹立尤也去乍ら御息女の。衣服を剝て拙者めが娘に着せん爲でいなし。何共進ぬ首尾有て拙者も存せぬ女房が手に掛斯の如く也。此上は免も角も存分たるべしと思ひ切たる返答也。娘が親共聞届け何様故有浪人と。聞及しが其通り。常体の者なら。叶は忽迄も一往は陳じても見らるべきに。覺悟を極めし返答何様武士の一言也。段々様子を聞届け了簡し度もの

なれど。養子の事にてゆへは自分の了簡付難し。見ませハ其方にも同年位の娘有。彼子を殺し渡さるべし。實親共へ此通中て得心させんと有。舍人近頃心ざし過分の至りに存れど。扱々物に似た事有此方世忤も養子也。仰の通り首を打實親達の怒をも。ね心人にて休めんが爰をハ聞て給はるべし。種腹分ぬ斗かは啞に生れてゆへは實親後日に承り。一旦義理に養へ共不具に生れし子なるゆゑ。解死人に出せしと恨られんも口惜し。元手に掛しは女房也然は現在此子の敵。我人を害すれハ人又我を害すの道理。爰に於て一言も互に不足云分無し。女房覺悟を仕れど宮を助けん其爲に。あらぬ偽。其上又命よ替し女房を。殺さんと云ふ身の切なさ哀にも又頼もし。女房いかにも舍人殿わたしが死ぬるは。彼子をば手に掛るから覺悟の前。急で首を召さるべし。此子をだにも助くれれば。働當は討たもの今際の時の悦び是に過たる事はなし。色なればこそ爰ゆゑ。此年月の御苦勞海にも山にも譬へ難し。只今死する今迄も。忘れはやらぬ忝けなや。申度事共は數々限無けれ共。中々忽迎も御存と心と心を汲合て。堰來る泪の瀧津瀬は。石の袂も朽ぬべし。去れ共女房起直り。ハア、我身ながらも未練也。人手に掛る事ではなし二世と兼たる夫の刃。歎きの中の悦びサア、急で給はれど首差伸て待ければ。夫も云で堰

狂ふ心迄くる憂涙。留兼たる斗かは胸苦しさか霞出し。物をも云ず太刀を棄啜咽てぞ居たりはる。女房後ろを見返りて是は聞えぬ舍人殿。思切たる自に物思へどの御事か。日頃にも似ぬ御心底取乱しる御有様。可愛くばあせ討給はぬ彼子をだにも助くれれば。此方の望の達する也。夫の出世を見て死する。妾が今の悦び察し給はぬ愚痴侍。男に持て悔しいと或は怒り或は恨み些共情れぬ目の内に。合む泪は泣よりも泣ぬ泪を哀なる。夫も女に辱られ涙なからに太刀振上。既に打んとせし所を娘の親は抱止。歎きの体を見ましてはいかにとじても痛し。幸ひ娘が實の親族がけの一宿を。我等が方に留置く親々共に云聞せ。心次第に致すべし。ソレ嗚呼で來さしませ。先暫くと留むる間に二人の親は駈付。互に顔を見合せコリヤとつ様か。様か。のふくは是の珍らしと先立は只涙也父金吉の小夜照が胸庫取て引寄。扱々己は不孝者。男狂ひに親を忘れ三年此方ぬつくりと此所に居ながら一度の便宜も仕おらいで。不慮な事にて顔見合何じやアとつ様か。己が目からも二親の顔が見へるか不孝者。此度内裏の弟御が御謀叛とやら云ふ事。兵糧米に成さる。逆御領分の麥米は。云ふに及ばず豆小豆粟黍迄を無体に取りられ。今日一日の畑さへ得立ぬ程に成たれば。どう共から共暮されず少し買で買ふと

阿彌彌連てとほくと霧を拂ふて往たわいやい。己が殺した妹もナ喰せる物が無いゆゑに爪離すより切ないを。渴殺さん不便さに思ひ切て發子に遣る。人の子にして置たとま。同じ浮世に存らへて居る斗が樂と心便りにしたものを。とうもく殺したな。扱々憎い己れ免は子にてはあらで敵なり。切ても衝ても飽は無い餘の事の腹立に。熱い涙が溢る。と拳を上て打叩き男泣きにぞ叫びぬる。娘も道理に責られて恨の段御尤。併し思ふても見て下され親父様假令我身は死する共年齢も行ぬ者と云獨ならでハ無い妹知て命が取れふり。三の年に別れまし五年が間見も遣す。夜目と云心は急切無い場所の事なれ。微塵も心の附忍専先の世からの約束。現在姉が手に掛て妹を殺すと云ふ事。いか成因果の報ぞやとつ様にもか。さまにも。とら云分が立物ぞ。御所を出ると其儘に恥をは捨て親里へ還らは今の悲しみを。見まい物をハ其時は只叱らる。斗りが。怖ふて音使しませぬが重くの不幸と成る。是皆わしがいたづらゆゑ端折屈の兄弟を殺すといふは何事ぞ四五年振に逢まして。何の詞も無い上に憎しみを受恨を受。天にも地にも是程の不孝が何の座らふぞ。とつ様か。様許してと悶焦れて泣居たる。母尤泪の際よりも若ひ時には有習ひ。男持まい者で無し追出さる。と其儘なせ。親里へは歸ぬ

ぞ。夫婦連ではなせ來ぬぞ。御は子よりも可愛いと世の諺にもやさぬか。誠の親の忝けなさ
 打出し又は叩出し。酷うも辛うもせまいのに。三年此方近所に居て。便りをせぬ何事ぞ直に
 來のが否ならべ。文にて云ふか一門をなせ頼まぬぞ不孝者。うなたが心一ツにて老憊ふた二親
 の。片手落たる如くにて便無き身と成けるはど。恨も涙悲むも涙に咽ぶ斗也。是ぞ哀の限なる
 小夜照涙に暮れなから。誠に母のれ慈悲程世に有難き物は無し。第一は色故にお主の勘氣を蒙
 りて親の苦に成是一ツ。夫れさへ有を三歳迄音信をせぬ是二ツ。剩さへ又妹を手に掛殺し二親
 に歎を掛る是三ツ。御憎みの餘りには打も叩きも仕給はで。只今の御一言冥加の程が恐ろしい
 親はれ慈悲子は不孝。生ても死ても此御恩。何して送りませうぞと身の誤りを歎つ。身を
 擲ちて歎きしは斷り責て哀なり。父は歎きに伏沈みとかふの事も無ししが。養ひ親も泪ながら
 二觀の歎の段。娘御の悔みの段尤至極致したり。爰へ拙者が申て見ん。一旦貫ひし娘をば姉
 が手に掛殺せしは。子細有氣にゆ上知されば又是非も無し。幸い姉に養子有拙者が娘の替には
 此子を貰ひ申すべし。其方に兄弟二人の内一人相果申せ共。屈竟の諱出來女子が男子に成たる
 分。然れば恨も歎も無し身共ば斯様に存ずるが。扱鞆殿には何どかは覺召ぞと云ければ。舍人

いかにもは尤。小夜照妹を殺せしは段々様子有事なり。何れも聞て給へれど。尊に裝束參らせ
 て上座に直し奉り。元私は武内殿執權職を承る紀角の舍人と申者。小夜照と密通した目を偷
 めし科に由り。遂地を拂れ申せし也。拙者が養子と申せしは御身を隠さん謀。誠は當今第一
 の宮去來翻別の御尊。王子の謀叛に襲れ給ひお身を置に所無く。主君の長男宿禰殿より預け
 深く頼ませ給ふも夫夫婦かくまひ奉る。所へ追手の者共がお隠家を探出し。既に危くは故妹を
 知らず此仕合。出かした妹は手柄者年にも足で一天の。帝の御用に立事は死後の面目家の譽何
 も悦びやさるべし。方々も力を添ひ味方を申され上騒動静論たる上は。官祿などか薄かるべき
 斯る時節に非ずんは。いかでか玉体拜すべし。何れも拜み奉れど。様子を語れば百姓共コハ勿
 体なや忌はしやど。渴仰の首を垂謹しんでころ居たりけれ。尊始めては聲を上。夫人界の因
 果は隔生即忘とて。我人共に前生の業を知らず。因果を満て是を知る。我前生の周頓とて。
 大聖釋尊滅して後。迦葉尊者の會下に列り。教を學ぶ沙門也。是成小枝が前生も同學の僧寶
 禪とて。分て縁故も深かりしが。我寶祖が才智に蹴押れ。法座の下るを憤り忍で彼に毒飼
 し。音聲を止て學を妨ぐ其科遙かに免れず。天子の胤は受乍ら啞といへる病を受。今八才に及

ふ迄言通せざる事は。是皆過去の業因也。毒を飼れし其恨忍ぶに堪む寶禪は。詞劍を以て我を害す。其科報ひて我爲に只今姉が手に掛り。双方の罪爰に滅せ。汝等恨むる事勿れ是太照御神の御託宣。有難やと虚空を拜し給ひつゝ。神路山月さやかなる誓有て天が下を照すなりけりと。詠吟せさせ給ひぬれば。舍人の餘りの嬉に是は不思議と斗にて。搔抱き奉れば。有つる者共前後を圍み。御父御門の在ます離宮へ臨幸なし奉る。實有難き御神孫。神武のたう十八世。履仲天皇八才の。御詠吟とは此の時の。さやか成ける月影の。廻々て末の世も照さぬ一國ころ無かりけれ

第四 皇后道行

頃ころは小春こはるの初はじめてつ方かた。長閑ながかん成なるきに歸かへり花はな。咲さてふ枝えだの若わかくど。まど鶯うぐいすは鳴なねをもあさる梢しやへの諸もろ翼つばさ。日に映うつろひて美うつくしき。春はるの姿すがたぞゆたかなる。御傍みまわりや皇后こうごは蓬萊山ほうらいざんの初景色はつげしき。忘れ難わすれがたきせ給ひつゝ。數多あまたの官女くわんにょ御供みまがひにて忍しのび「出いさせ給ひける。御物みもの數寄ずきころ唯ただならね。からの大和たいわの酒さけ瓶かめに。泉いづみを漕こへ小車こぐるまに乗のりて五色ごしきの綯な交まの。男綱おとづな女綱めづなを引延ひきのて所々ところどころの御酒みさけ半な。世よに例たとなき御遊みあそび玉たまの盃さか。玉たまの酌しやく。汲くみ交ましぬる風流ふうりゆうの。御酒みさけ相あ手て里りの女めも。花はなを摘とへ一ひと如ごとくにて。優やさくも又また貴たかな

や。下戸げこならぬころ男子おとこも。女子おんなもよしやよしやの。世よの樂たのしみは此こ一ひとつ。一ひとつ受うたる盃さかの。中なかに流ながるゝ憂うれさ辛つらさ。思おもひの數かずも氣きの毒どくもさうりやめて万歳ばんざいの。手秋てしゅう樂らくの祝いはひを。重ね重ねる袖笠そでかさに。時雨ときあめ初はじめてつゝうばへつゝ。風かぜに裳褌しやうふんの仕度しど氣け無なく。思おもひ乱みだるゝ心こころの分わち。實じつや高たかきも卑ひきも。戀こひに隔へだたの無ない浮世うきよ。怒いられたり恨うらんで見みたり。憎にくい中なかにも顔見かほみりやいと。此方こちの心こころの眞まことから送おくる文かみにも偽いつはりりの無ない丈だけを。書かいて遣うたは思おもひの種たねかいの。根ねから厭いとなら厭いととも云いはせぬを無なや。いとし殿御とのみも見みゝ斗とねぬにほつるゝ黒髮くろかみを。たう取とりあげて暮安くれやすき日影ひかげもまだに高たか々と雲うみに舞まえし山々やまは色葉いろは脂あぶら添そふ唐錦からたしな。風かぜのまにく折をはへて。柳やなぎが枝えだを吹ふき散ちる。夫つまで名なに呼よぶ玉たま柳やなぎ。吹ふきほどきて谷影たにかげに颯さつと流ながるゝ川柳かがやなぎ。落おつて碎くだけて岩柳いわやなぎ。すげなき物もの上うへ冬柳ふゆやなぎ。塘たう求もとて有あるがら枝えだに力ちからもなく鴉からすなれもやもめの類たぐひ成なりかや。コレサく。是こゝは。是こゝで。と差掛さしかる。鶺鴒せせりの橋はし。橋はしの橋はし。下に栖すむ水鳥みづとりの。中なかに契せきの深ふかき瀬せに羽打はね交ます鶺鴒せせりの。離はなれ遣はならぬ妹いも脊せの道みち。御二方みにがたは何故なにゆゑぞ。離はなれゝの御旅みたび寢ね慮りょの程ほどは白雪しらゆきに。立たやしるしのさほの數かず。思おもひを埋うむ詠えい哉や。子持こもちの積炭せきたん釜かまにかいつくばふて。ひつづくばふてすつくりりよんばりど。夢ゆめの迤路たうがも覺おぼ東あづまな。覺おぼ東あづまなくも呼よび子鳥こどり。うれかあらぬか山田やまだもる。人ひところ見みね猪いのこ小

屋は。二人寝るかや獨かや。ア、くねた床ししと。問つ問れつ戯合て。跡の笑ひに風俗もらるさや今朝は出立へへ。よしと云れし身成しよ姿崩れん恥しと。人の見る眼を恥らひて。互に直し直されつ。伽羅の香溢す冬草に。稍木嵐の吹送る。何地の誰にかやとめん。見ずや知ずや白鷺の。群居る方は雲黒く皓々として隠々たる。玉馬躡つて越犬吠る詩の心。宛然にころ思ほゆれ。山層々と重りて里又遠近たりとかや。窓に掩ひし寒菊は金銭未だ繋りざる形と爲して鮮に。枝重々と葉の艶の日影まばゆく閑に。咲も續し冬牡丹見るに心の暖さ。一英折て手に觸ん八手の花や山茶花や。茶の花薫る賤屋垣。隔無き同士語らひて行ハ程無く。山隈のわたちの景色爰とると。又酌交す盃の重る數ころ「日出度けれ

女狸々

老せぬや〜薬の名をも菊の水。盃も浮ひ出て友に逢ぞ嬉敷。此友に逢ぞ嬉敷。抑酒の盞觥といつば。古天竺摩利陀國に夫婦の者有。慈悲心深く親々に。孝心を盡すのみ天道を深く貫み。毎朝御供を天に捧げ。直成道を祈りけるに。常々黄色の鳥飛來り。御供を加て。歌竹の切節の溜水に。浸し浸せは何時となく。アリヤアリヤ酒となるよの一啜。雨露の恵に和合して。

遂に泉と流行く。深き教を人知らず。或時夫婦の者共竹の林の下蔭に。暫く休ひたりけるに數多の蝶の群らがりて。彼方へちらり此方へちらり。ちらり〜ちらり〜ちらり〜。りんりん〜りんりんと跳たる揚羽の蝶。又飛返すふせん蝶。花を數寢に向ひ蝶。さゝめ盡せぬ抱合蝶の。戯れたゆく其風情。花のすがりの散〜になつて歸り歸りては。原の如くに舞遊ぶ夫婦のものは訝敷。有し所を尋ぬれば。其匂香はしく。味甚甘露に等し。いかあるものにか有けんぞ。名に呼ぶ事を案じけるに。去ば一つの鳥來り。御供を運びて水に寄る所謂を以てさんずるに日讀の書を書添て。酒と名附て今の世に。長命水不老水。不死の薬と申せしも二人の者の飲初て。八百餘才の壽命を得る。其壽を呼ぶとかや。命ならえの銚子にも蝶花形を附る事。此時よりの例なり。或は酒を竹酒とも。又は女の言の葉に。さゝと祝ひて華奢成る。是ぞ妹脊の緑の水。汲ばぞ心も若々ぞ。幾度見ても見飽ぬものは。哥盃の五文字うらへ。模様てまはす。當世好やるは輕いが命。春正ゆうち。だいはがさく。こけいふしたし。色縮のよるなしたや誰でもなつむ。なつむ心はに何時と無く。我を忘れてうつつなや。歌さいた盃手元がもつる。相の押はすけて進る。やろいの〜よもすけし。よも盡じ。万代迄の竹の葉の酒。論

涙共盡す。夢の醒ると思へば泉は其儘盡せぬ。いざ此方へとの給ひて。御先に進ませ給ひ免れば。御供の女房達御酒相手の賤の女も。ともに興じて氣も替て。所も變て盃の巡來ある。山路なる扱ても小初瀬盾人の雨脚は。都に残り在せしが。郎子の王子逐電有。與方の官軍召集め離宮を伺ひ給ふの由。内裏は木荒の宿禰の臣殿敷固め給ふゆる。兩卿心を合つ。離宮を守護し中らんと。葛城の山々に隠勢を構へ置。手合せの相圖と定王子を打取奉らんと。方々へ忍びを入れ事を伺ひ給ひしが。武内の臣病養迎帝都を退き給ひつ。皇后の在します蓬萊山の片邊に。深く忍びて在する事何かの心底訝し。且は病中見まいの爲且軍談有べき爲。病家へ尋給へ共如何成仔細有てにや。遂に直談あらざれば今日は是非對面と。一間成處に扣へ暫く機嫌を伺ひぬ。然所へ賤の女三人光澤なる。木の實を數多手籠に入れ。兩卿の御入有席に遠慮もなめ過た身振氣合もはしたなくけふは御見舞中さんが。大阿爺様は何成れた些參て逢ふかと。人を人共思はぬ振摺てすつてぞ通りける。兩卿暫しと召れつ。我々共も昨日今日御前へた目に掛度。斯様に詰て居せと御病氣に御構ひ迎。御達成れ下されず。其方達は何ゆゑに。お心安

ふ御前迄推參は仕る。三人の女は口を揃へ。あの云しやんす事はいの。誰殿の御座つてもいかなく御逢被成事ハ無し私共は此里の女子共で御座んすが。皇后様の御酒相手毎日毎夜彼方へも。御出入を申ましお后様と膝組で。夜晝酒を喰ます。何した事かお后様。食事ハ曾て參らいで。酒をば食になされます。毎日の御さうさ責て冥加の爲と思ひ。此菓物を取揃へ御着の水物に。色々冷して上ます是の爺様も菓物が。きつひお好で御座るゆゑ。御后様への次手にはこないに見舞ふて進んせませ。殊更愛なが相口でたてふと伏うと夫は儘可笑は爺様で私しらも念比に思ひます此方様達は内裡から。お見舞に來たれ醫者衆が彼病には煎薬を。おびせした迎も利ませぬ根の爺様のお懸煩。夫もわしらが取持て此日世話をやきますが今の世界も同前じや。安ふなりそぞまだ成らぬ。云ながら此の四五日の相場では。安ふなりそに見えます。ホシニ世界に連ましてまめ迄て安ふは成らぬと大口いふて行所を。コレ女子衆と呼戻しさりては面白いはなしを聞て目が覺た。夫は又爺様の誰をバ戀に成る。彼年をして夫のあの何成物ぞと擲すれば。三人どもに口しに惚たと云ふは原何ぞ。みな夫からでは無いかいの夫がならいでなんの惚。連者うなる爺様じや惡ふ仕たらば。此方等も怪我をしようは見ます

今時の爺様には油断が成ぬと笑けり。兩脚可笑さ堪られぬ。扱も一其方衆は。陰口の悪い衆
 ぢやいとしげうふに木の年で。何じに戀を召れうぞ。去とは女子のはした無い。大きな虚言を
 つく衆ぢやそんなら相手は何處にある。是は正しう偽りならんと有けれべ。左程疑ひ給ふなら
 いつそにしらで云ふて退を。同アノ爺様の煩は皇后様を懇説て。夫ゆゑ煩い給ふ由餘りの事
 のれ可憐さに。れ后様へ云ふたれば夫は不便な事なれど。成ぬ事じやとの給ひて文をお手にも
 觸られず。其後いなせも無りしが道戀路と云ふ物は。優い處が御座んする餘に聞くと悼はしい
 然らば是れを取すると常に成されし枕を。爺様の方へ送らせられふつと思ひ切られよぞ。
 御返事有けれべ。忝と悦で夜は終夜盡と涙に暮なから。御枕を擁抱へ其移香を聞かからに。猶し
 増來る物思ひ遣方なさに搔暮て。文の便も絶果る此身の何と櫛の葉の。うらみつ泣つ此比の物
 狂はしう成給ひ。人には見させ給ひぬが逢で叶はぬ事ならば。何とぞたらし參らせて是迄誘ひ
 中べし。何れも忍びて在しませ能比れ知らせやまし。逢せませふと約束し兩脚の忍ばせ置。三
 人諸共打連立猶興ふかく。論まくら物にや狂ふらんく。ぬるも寝られず起きもせず。理や
 枕の跡より戀の攻來れば。安からざりし身の狂乱は木枕成けりありやさこの張枕くのぬじぞ

戀しかりける。其主ぞ戀しき。つらからバ只一筋につらからで。情の交る浮枕うた、枕の夢に
 だに。交す枕の荒磯に。舟打寄る浪枕。管を敷深の楫枕。夜只待夜は假枕いつが逢瀬の新枕二
 人寐ならん長枕。なかばの飽て寂敷を。是ぞ別れの枕とは誰がいわ枕昔清水。寢に通ひゆく草
 枕いつ菊返し籠枕。秋の錦と織榮しいまくら捨て臂枕。樂む内も物思ふ。逢ふ夜は君が手枕
 來ぬ夜の己の袖枕。枕あまりて床廣し。よれ枕こち寄れ枕。まくらさへ疎むか。實もさありや
 よがりも。そふよのやよがりもそふよのど。ゆらめかすぞ可笑き。兩脚立出御機嫌のいかに
 ど。伺ひ給ひければ。珍しや方くは何と思ひてのお尋ぞ。さんし御病氣の由承り。何にもし
 ても氣遣は敷れ見舞の爲昨日より。此所に相詰て御對面も待けれど。勝れさせ給ふぬ由猶又
 心元無に。今日の御容体世に麗敷相見へ。歡悦斜ならずとある。何と仰るぞ昨日より大爺が方
 へ御見舞とや。左は知らずして人々に最早大爺を見限りて。音信にも絶果ると。よしなや恨
 ましてスハ。マア一此所へ寄しませ。つれ一語申べし。ハテ重疊の御機嫌で我々共も悦ば
 し。扱承れば大爺様にはこひを爲るゝと申するが。ヤア一大爺に鯉と呉ふ。成程鯉も進せ
 ませう承れば。大爺様にはこひを成るゝと申るが。こひられ人は何の何誰。委敷語り在しませ

何じやア。大爺が懸をするウハツア。はて扱其方衆はつがも無い事云し升。夫まひをす
 ると云ふは十九や二十の身。こそあれ大爺の年に有べきか。我景行天皇の臣とあり。成務仲哀
 神后應神。當今仁徳天皇迄六代の臣。壽命三百十六才。目出度忠臣成けると君の御覺へに預る
 身が。いかで左様の事有ん。よし無事なやれど。懸よこひよ。我中空になすなこひ。こひ風の
 來の袂にかいもつれて。こひ風の重い者哉。同ハアこひ風はか程重者かの。兩卿打顔き是々大
 父御。最早れ色に出けるぞ搦てお隠し成るゝあ。何じや大父がこひは色に出と仰るか。誠に思
 内に有れば。色外に顯るゝ。あら耻しや悲やしと。伏沈みてぞ在しける。兩卿三人の女を召れ
 其方達が云ふ通り。疑も無きてひ煩。年抜群に長給へば。老耄どころ見ゆつれ我々斯て有なら
 ば。猶障ともなるべければ今歸るぞ汝ら。何卒心を慰めて汚病氣本復あさしめよ。何程は年
 寄られても天下の寶成けるぞ。必汚穢嫌背くなど打連「歸せ給ひけり。賤の女共は御側へ近々
 と立寄て。左様に心弱て何とて戀の協ふべき。何事も只私等に汚任せしめし。幸ひ今宵は
 酒宴有随分酒を仕掛つ。思ふ様醉せまし正体も無い處を。遂とじぐじに埒明ん生中に改めて
 口説掛ては行かぬ事疾より斯した分別に。何に出なん事ぞいの。ハテ下司の智慧は跡から

じや。いざせ給へ大爺御様。年比日頃の物思ひ。今夜の儘に受合ふて。成せまするが嬉し
 いか。嬉しう無ふて何とせふ。久し振での初枕夜長な時分で嬉しいと。どつと笑ふて行末は
 老の坂を越々て戀の山路「わけまよふ。奥に御酒宴。入乱れ」たる御酒合。三人の賤の
 女は命限りと飲立れば。さしもの皇后大蓋の押にほうと息吐姿。後を見せて御寢所へ踞躑入せ
 給ひつ。此休まで呉よて衣引被き臥給ふ。三人の女は折能と武内忍ばせ奉り。大蓋をお枕
 にどつかと置て皇后様。夫は御身性是非一ツ召上られて私へ。下されませいと押ゆればもろも
 う許して呉よかし。其代には何成と望の物を取せんに。是斗りは許して呉拜むゝとの給へば
 同イヤく七珍萬寶に更く望ゆらはず。兼々中上升る大爺御様のれんぼの暗。迷せ給ふも悼
 ひし今宵叶て給はらは。許しませんと云ければ。チウく夫も何成と望に任せ得せんぞ。
 仰も果ぬに大爺御様早々此方へ。と。御手を取て案内しお羹の下へ勝へば。皇后現御心に可
 愛の者やと抱附。緊と締させ給ひぬるを取て引寄せ御胸元に太刀押當。同忝も皇后はおろつ彦
 の御娘。懸之の皇后と申ては日本一の大賢女。某何程口説けば逆何でか不義の有べきぞ。蓬萊
 山の御遊より甚御酒を好み給ひ。科無者の命を取酒興散乱大悪事。段々長遇致すの由某父子共

枕を碎き。様々心を盡せ共其實否正しからず。同 去に因て道ならぬ懸幕に事寄せ斯の如し。サ
 ア正体を顯すべし左無に於ては此劍。裏をかゝせて問んと云ふ。皇后今は是迄とあらぬ姿を顯
 して。同 エ、口惜や仕損じたり。我は是中天竺緊那羅が子の雷明也。未日本に佛法渡らせ。幸
 ひ成哉今此時和國を魔界となし。住家となさんと工みしが。時到らねば是非も無し實ては己が
 命を取。今の無念を晴さんと取つて返すを三人の女。後に立て臂押張はつたと睨めハ筋骨折
 れ。起んとするに力無し武内愈々力を得。腦頂より劍を差し彼所へかつばと突倒し。同 此御
 劍は仲哀天皇御枕に立られしに。己と拔出三韓を亡し給へる寶劍也。拔で其儘差置ば二度魔王
 の障碍はあらじと。其儘彼所につきこめ給ふ。今の世迄も鬼取が嶽とすは此回縁此御劍の威徳
 なり。二人の女は武内を扇立し。同 われ二人も雷明に命を取れし夫婦の民。是に在ます御方
 ころ誠の皇后成けるぞや。雷明が足下に掛り命は取られ給へ共。我々夫婦が魂魄の皇后に入替
 り。忽ち蘇生在ませ共今は仙家の術を得て。仙女の第一西王母術を譲りて我々も。金しや金王
 二人の仙女形に影の添ふ如く。附添魔王を亡して仙家に歸り入給ふ。此事奏し給ひれと云ふか
 と思へば仙女の形。雲に乗つゝ行空の風より風に吹傳へ。種を殘せし園の桃三千年の歸花。實

の成御代の久敷を移して今に語りけり

第五

天下の生民有事久し。一度は乱ると雖も。君臣私無き時は又治るに復るとかや。扱も皇帝萬城
 山の高樓にて民安全の御所既に満座に成ぬれど。半年餘の早魃に草木絶て地を焦し。國民餓
 死に及ぶ事敵慮を碎かせ給へ共。更に驗も有されば猶宸標を惱まざる。慈惠ころ有難き。去共
 老臣武内は雷明が障碍を討す。子息宿禰は尊を圍ひ禁裡を固め事故無く。取治むるの忠勤別し
 て尊八才にて。名哥を詠吟し玉ふのみ目出度事共打續き。敵感甚た限無し。次に又武内の執權
 職。紀角の舍人夫婦が事尊に命を奉り。忠節他に越たる事敵感の餘り。紀角の連と召れつゝ穂
 別の尊の御後見。女房はれ局役二人の土民夫婦に。三千丁をなし下さる。所へ岩藤金堂丸皇
 子を供奉し御劍を献じ。主君宿禰の臣を以て魔王の障碍に誘はれ。暫く禮を失ひ給ふ實御謀叛
 に非ざる事。委細に奏聞有ければ天皇遙に敵覽有。雷明が摩術に奪はれ禮を失ひ給ふの段。
 障碍は他より爲る業更々逆心あらざる迹。竹の園生の別殿に庄園厚く寄せられける。宿禰の
 臣の執權職金堂丸輝。未若年なりつれど。逆臣障碍の實否を正し。乱を鎮る策智仁勇の三徳を

兼。武の備つたる勇士として。禁裡の守護職賜はりぬ。重ての宜旨には。我万乗の位に供り。斯迄民を憐み。諸天善神に祈誓を掛万民のがしを祈るに。天帝納受は無き事は猶朕が不徳の至り。自ら帝徳天に背ける事万歳の壽も何う其益あらざるべき。思ふ仔細の有る間此高樓に火を掛よ。斯ても驗無らんには十善帝位も何ならん。詔を成下され諸天善神將に今。一の驗を見せしめ給へと一心に御祈誓有。老臣如何思されけん勅定に任せ。清を點じ火を放たんと仕給ふ所に。近郷隣郷の百姓共雲霞の如く走參じ。君に不徳の有らんには民の恨も有べけれ。聖徳備らせ給ひつゝ民を救せ給へ共。其命は無き事は皆民の冥加に盡。命の終らん時成べし御門に炎掛ると見ば。飛込ゝ火に焼れ責て御恩を報せよと。君々たれば民すら迄。命を惜まぬ心ざし哀にも又奇特なり。老臣笏を上させ給ひやれ待土民等早まるな。十善帝位の御身を棄斯宸襟を苦しめ給ふ。皆汝らが爲成ぞ玉体に炎掛れば。臣等を初め日本に一人も人種無し。御世滅するや但は又五穀豐饒に民榮へ万歳謠ふ世に成や。善惡此に眼前たり皆玉体を拜せよ多くの公卿殿上人。心々に祈願を爲し片唾を香ぞ扣へける。時に一滴万石の恵の雨をを流しつゝ。高樓の火を降濕せば。烟の内に玉体の拜れ「給ふぞ有難き。近國の民百姓追々に走參じ。

去ぬる八月八日の風民屋多く吹崩し。地ハ土塊を動し海邊は潮に浸り。米穀種を失ふ所に不思議や田園俄に濕ひ。或は腐り或は枯たる田畑共。青々たるに立歸り晚稻は一粒万倍にて。がし忍ちに富に逢ふ世界と罷成事。偏に君恩有難く御禮の爲に參上と。引もちぎらず訴ふれば。段々富を告る所是皆朕が巡覽の地。其所爲どころ覺へつれ。然共發無く廻國心に叶ひ難し。此後朕の像を刻み。日本國を宿送りに隈無く渡しやさるべし。朕が心を彫刻の形に寫し止めつゝ民の榮を守るべしと。勅定有バ宿禰の臣謹んで。恐れながら小臣事年月畫工より存付。彫刻致せし御尊像。世々の守りに殘さんと漸々成就仕る。希くは徹覽の上かいげんもやと奏すれば。誠ある哉。君臣の心合体致す事。偏に國土安穩の兆ならめと敬感有。然處へ商人共追々に走參じ。私共は近國の津々浦々の買積共。西國北國南方東方の米穀を買占。景氣を見合せ少しづこ。綿賣りに仕り金銀を儲け所に。頃日夜なゝ童子遊行し。此大成米穀を買締致しし事。天眼遂に明け之。其科を罰せんと評誑只今最中なり。急で殘を積上せ罪をも懺悔仕れど。願に告いゆる何卒罪科を遣れんど。開付次第に上船し凡西國北國船。都合三萬八千艘只今湊へ入り。米穀の儀は何様共罪を許して給はれと涙を流し訴ふる。武内の臣聞召れ斯る時節を幸と

大分の米穀を買締。締賣致しつゝ。諸人の餓死に及ばず事其科甚輕からじ。然れども先き達て其罪懺悔致すに付。亡罪は免成るゝぞ三日が内に賣拂ひ。早々出船致すべし。万一延引是れあらば本人は中に及ばず。部類をお絶し成さるゝぞ急度其旨相守れど。仰出されりければ首が有ての金儲け。ア、此米が捨たいと泣くく「涉前を下りけり。其後帝高樓より四方を觀覽有けるに。三万餘艘の米穀價に掛はす賣拂へば貧家則富家と成り。其景色長へに物賑敷成ければ。高き屋に上りて見れば烟立民の籠も賑ひにけり。目出度御製を殘し玉ふ全たる和歌ハ君徳の祖たり。且又百福の宗たり賢たり聖たり。中に勝れて臣たる道。徳たる道そ「ゆたかなる

蓬萊山

竹の林に緋立。女松男松の抱添へて。笑合たる二品の中に香をはく紅の。舌振如き梅が枝の。玉を結べわをくゝる万づの鳥囀りて。幸い心に叶つゝ。絶すとうたりたへず。詠ぞうくど鳴は淵の水。流れくゝて淺瀬川。鶴の洲崎や龜が島。いぶき繁て洞をなす是ぞ誠に蜻蛉州。落猿岩も喧びすし。石橋霞に横たのり。柳素直に枝垂て。虹帯正に金銀の山を「繋ぎて富る成る

斐接きて。爛々と瑠璃の砂子も敷妙に。硯硯の行桁瑠璃の橋珊瑚琥珀の玉の塔。月に輝き日に映す。其壯觀燦々として又觀々たり。此方は間壁帝々と築ち。單へに屏風の如く成るに。諸花列つて盛成り。畫具彩色に筆を費し。心を碎きし繪に似たり。八千代の春色々に白玉紅。どび入の姿をさけば其外の。草香ばしく若葉をみす。若紫や早蕨や。五色の薊花筆つ花。いつの間よやら黒くど。誰に習ひてはを染て。つがい燕の渡るて。又歸る鷹暫く花を惜むか水鳥の。中に群つゝ村鳥の。立や羽音にこぼるゝ。空に知られぬ小雨成らん。是ぞ誠に梅天の景色ありけり夏木立。影は冷しと夕ざれば。池水に舟を浮べ。心に隨ふ菌の漿。こがれがたる磯の波。青海いどささやかに。咲乱たるかほよ花菖蒲蓮葉水葵。岸の岩藤纏るこは。薄紫や打ぐれの。綱もて繋ぐ風情なり。扱岡の邊は若楓。木の下闇と雲見草。さながら夜半の時鳥。鳴つる方を詠むれば只有明の月見の亭。高樓高く鷹門の秋も半の空晴て。ようくばくとして量無し。時成哉えんなる哉。客は臻る後門の邊。梅は香し。迎送の時。好風能く自ら至る。明月機をまたすとや。露白ふして草猶青く明はなる。日影待間の朝良も朝なくに咲かへて。盛り久敷花と見る。歌の餘情も面白や。野菊芝蘭に咲まじへ。香を争へば苗香の増

をの薄葛蔓。葛かづら花かづら根のかづら末長く祝ひて君に奉る。時に錦鶏一偶十二の雛を生鞠へ二六時中を告渡り明れば。一陽來復の地に妊まるゝ力にて。木の葉散積む庭の面。霞たはしる有様は。銀の砂子の高詩畫。美を盡しぬる年波の。とるかと思れぬ。晝となり。忽ち四時眼の前に。見も盡されぬ山の姿川の流れに至る迄。又立返る新玉の宮殿多く棟を並べ。悠々寛々として面白や。仙樂風ふかふて所々に聞ゆ。緩く謠ひゆるく舞。糸竹をこらす遊樂は。月宮に入て天女に逢ひ。傳へ傳ふる紫雲曲揚けはだつが波羅門曲。是を台て霓裳羽衣の曲と名附。斯る聲調成連も今此舞樂に及べしと。御心を寄られし。實に蓬萊の島の形世々に殘て。山跡の國の名所と成けるは。此御後の仙境を。千秋万歳万々歳。万歳樂とそ詠じける

仁徳天皇萬年車畢

金平法問諍 忠臣身替物語

作者未詳

煩惱の家の内の犬打て共去す。菩提は山の鹿招け共來らず。迷悟只一心の中に有り。抑源家四代の武將伊豫の守頼義公。天下安平に治め玉ひ。帝都を守護し在せば民の寵も賑へり。頃は文月七日むせいを祭る夜なれば。御公達義家公。義綱義光諸共に御廉高々と卷上させ。れまし近く在せば御家臣外様の人々も。次第く伺候して御慰みの爲にとて詩哥狂句様々の興を催す盃の。影に連なる初雁は何れの文字と疑ひし。心も深き池水の。濁りに泌まぬ蓮葉に。玉かど見へし白露の。戦ぐ嵐にはらくと。落て仇成る粧ひを。君つくくくと御覽じて。人間の一生によろやくによてんもまのあたり。我天下の武將と成り今生を榮ゆとも。無常の刹鬼に誘はれば元より爲せる善はなし。爲置にし罪科を何にとしてか免れん。百年の榮耀は風前の塵。一念の菩提心は黄泉の燈火。所詮三人の子供の中一人は出家になし未來の爲にと思し入る。次男加茂の次郎殿を御側近く召き。我來し方を案するに。國々の兵亂に滅ぼせし者數を知らず。尤政道と云乍ら。因果の報ひ脱れ難し。それ一子出家すれば九族天よ生すと聞。御分父が菩提の爲

出家沙門の身ともなり。後世を助け得させよと世に染くぞぞ仰せける。義綱暫く有て御誼違背申に似たれども。某當家に生を受乍ら。武勇を捨出家せん事仰せば重くはへども。眞平御赦免下さるべしと。受給ふべき氣色なし頼義聞召。實に若年なれども道の器量。去乍ら武士を立て家名を揚るも。又遁世し父が罪を助くるを以ては同じ孝の道。其上家の世嗣には八幡太郎有るなれば是非御分は出家に成り。釋尊のゆいていに隨ひ。佛法修行の身となれと和田左衛門爲宗を召れ。東山の満容上人を招じ。剃髪させよと宣ひ御座を立せ給ひける。猛きも恐るゝ無常の風凌は御法の「花衣。色には迷ふ人心爰に白井堂の娘に。柏の前とて今年三五の秋月。雲間を出る品容。未幼き時よりも御臺所に侍し。何時の間にかは義綱殿と隙を求めて濡衣の。つまよもやはとの兼言も情あや仇と成り。れ出家ならせ玉を由。若左もあらは。自は何と成るべき。去乍ら主様は此事を嘗て御合點あらぬ由。どうぞ思案もがな實に思出したり。兵庫の督金平は此頃煩ひ出仕なし。未だ此事聞き玉はむ叶はぬ迄も頼みて見んと。其夜忍て只獨り金平「方へ尋ね行き。番の侍に近付て。兵庫の督殿兼々御存じの者成るが。夜中乍ら急用なれへお目に掛り度と申てたべ。番の侍内に入り右の有増述べれば。同やあら不思議思ひ

寄らす先此方へと申せ。畏つて立出。此方へとて通しけり金平目早き男にて。同なふ誰ぞとまそ思ひしにれ身は柏の前か。して夜更て只一人何として來られしぞ。只事にはあらむ早々語られよと云ひければ。柏の前悄悄々。義綱御出家のれ障我身の上の戀衣。裏無く交せし詞の未始終を委敷語り。此上の御身様を偏に頼み奉る。御出家ならせ玉はぬやうをと云ひ捨ててこら欺かるれば。金平呆れし顔はせにて。同いやはや今時の子供に油断はならぬ。次郎殿も御身もまど童かと思ひしに。大人恥かし其は其。義綱殿を御出家とは何事が目に見へしぞ。心安かれ此金平が。屍の有る内へ御出家にはなし中々しと。詞を放ち居る所へ義綱私に入り玉へば。金平驚き謹んで這は勿体無き御光來。定て御出家の義に付御入りと覺へたり。同其段は柏の前が先立て告知らせし。憚り乍ら御前の義は此金平めに任され。先此事落去の内見苦し乍ら是に在ませ。身はひしびしほに刻まれ。微塵の如くはたかるゝとも一念の君に仕へ。御出家にはなし中々し御心安く思召せ。擬柏の前へ世の取沙汰も如何なり。早々與へ還られよ誰か有る御門迄。檻に送りませと云へば柏の前力を得。返すゝと頼みを掛出るも惜き御名殘。君に引るゝ後髪。いふも云われぬ「心なり。既に其夜も明ければ頼義公の御前には。東山の満容上人を招

待有り。詞。ほくの御勸に信心彌増候へば。今日加茂の次郎を剃髮致させん。授戒を頼み存ると宣へば満容は。扱も尊き思召立かな此世は僅か五十年。永き來世こそ貴賤を限らぬ一大事。若君御出家在まざれば御一門悉く。一蓮托生有らんと何疑のゆべき。憚り乍ら拙者師弟の契約なし奉り。授戒を勸め奉らんと有れば君御悦喜斜にて。急ぎ義綱召せと有る畏つた各。若君の御殿に行き尋ぬれども見へ給はず。彼方此方と問廻れ共御行方知れされば。這は抑何にと動轉し。詮議區々なる内に度々召の重なれば。是非に及はず御行方知れざる由を申上る。武將甚御機嫌損じ。詞。扱ハ我命を背き逐轉せしと覺へたり。適れ不孝の大悪人最早我子と思ひ怒む。何處迄も搜し出し。來るべしと云捨てさせ御座を立せ給ひしかば。上人を勿論伺候の各々色を替へすハ大事ころ出來れど。目と目を見合せ片唾を呑み。靜まり返つて居られしは苦く敷て見る見へにけれ。然る所へ金平は赤地の錦の直垂の上に。墨染の衣を着し三枚鎖の甲の緒を締め大太刀を横たへゆらりと來りけり。各々興醒め。詞。這は抑兵庫殿は珍らしき出立かな。して先義綱公の此事聞れたるやと口々に云げれば。さればあれにて承つたるが。近頃笑止千方にこそ存ずれ。去乍ら是は今生僅の間の事なれば左のみ頓着有て入らぬもの。只々來世の勤て

を一大事ならめ。幸ひ今日有難き御法談有る由承り。聽聞やさん爲參上致し候が。憚乍らお上人へ少尋ねや度事御座は。御覽の如く某洞斗沙門にて衣を着しゆへども。頭は修羅の奴にては。此分にて死するあらば胴は佛体頭は其儘金平。佛の成損ひ迎朋輩の佛達に笑れんも口惜しかるべし。迎もの事に上下すつきと九佛に成る様を教へさせ給へ。但愚知の某なれ共一不審やて見ゆるする間。万一論じ負なとし給はば。慮外乍ら此甲を御坊の頭に着せや。某の弟子よし人の首切る様を教ずさん。先淨土門に。一念彌陀佛即滅無量罪と唱へらるゝ此心いかにと問ふ。上人氣疎き顔にて。扱も兵庫殿ハ。風流成る出立にて日頃嫌ひの佛法沙汰。近頃不審に存せれ共。安身を問ひ給ふにやさぬも如何なり。只々邪氣を捨て心を鎮て聞給へ。抑一念彌陀佛の不文といつば。たとひ五逆十惡の罪人成り共一念發起歡喜の鉦を打鳴し南無阿彌陀佛と唱ふれば無量の罪即滅し黄金の肌と成り。暫時の間に西方淨土へ往生するとのとなれば。信心を滅し尊み給へ金平聞て。詞。フム扱は念佛さへやぬれば。何程惡事を致しても佛に成るとの御勸め。近比有難きころゆへ然らは今よりして僧俗に限らず行逢次第に首を刎。南無阿彌陀佛と回向し成佛致しやさん。又鉦打鳴し佛になるとの教へ是金平が身に叶ふたり。此年月の合戦毎

に太刀薙刀のかね打鳴し。打合せしと數を知らず。然れば此金平は今生からの生佛。何と光が差すか。何れも拜み給へやとかなら〜とぞ笑ひける。上人大きに赤面し擧莫大成る無法人。我傲しくも恵心の僧都より五代の弟子。一代諸經を胸に納め佛法に於て不足なし。譬ば金を以て一丈の塔を組し功德より。一日の出家の功德莫大なりと釋し給ふ。三世の諸佛を身よまどひ彌勒の出世に遭らんずる。釋迦同体の僧に向ひ傍若無人の雜言かあ。六根しんるの通内ころ口に任せ云へる共。忽無間那落にだし。青責の責に逢ん時。只今の惡言千万悔とも甲斐あらじと。面色筋をいら〜げ血眼に成てやさる。金平打領き。阿、哀れ扱其無間地獄とやらんに落入。鬼とやらん阿呆羅刹とやらんに参り逢度ものにてあれ。去ば御坊の教化に任せ。來世こそ恐ろしけれ迎我も〜と出家せば。士農工商の四民絶田畑を耕すものも無く。五穀國土に絶果ば。敏し氣に嘯り給ふ御坊も渴し勞れはて道路に倒れ死し給はん。其上來世は一大事とて六か敷様に宣へとも。古へより幾万人死すると雖も。佛法の大事を知らずで行損ひたりとて還りたる者一人も無し。勿体なくも我君へ。由無き異端の虛無を勧め参らせ構ひて汚坊。後に我ハし恨まるゝな。法師とても容赦をせぬ此金平成るとぞ。若々敷云ひけれ共上人猶も閉口せず。

阿、愚なり〜。一句千万兩の金言を虚言とは勿体なし。御身が様なる外道の耳にの猶入まじけれ共。夫佛法を信ずれば。現世にては横難の災を脱れ未來は九品の臺に生ず。阿字十方三世佛彌字一切諸菩薩陀字八万諸聖經。皆是彌陀佛の秘願汝何で知べきと。居丈高に伸上り大汗流し怒らるれば。阿にも〜我は元より愚人なれば阿字も彌字もいざ知らず。して佛法だに信ずれば。災難を逃るゝとの教夫には證據はしゆか。中々其證據には。利劍即是彌陀名號迎念佛中行者に。打つ太刀も身に立ぬとの經文こそ證據よ。チ、頼もし〜然らば汚坊も念佛の力にて能災難を逃れ玉はん。いで試みに切て見せん。随分逃れ見玉へと。太刀をすばと抜ければ。上人是れと動轉し周章狼狽逃らる。何處へかと追掛るを人々取付かけ塞り。御前近きに先暫くと制すれば。金平齒齧をし道は聞へざる人々かあ。無間の劫を勧めぬる邪慢我慢の外道めを。活て置ば口を利くなと討せては玉はらぬぞ。阿、必定あの入道めは源氏の武力を碎ん爲。大六天の魔王變化て來ると覺へたり。其を其とも辨へ玉はぬ君の御所存。方〜の心底いやはや無念口惜し。公達あまた在ます迎も弓矢取る身は定なし。明日にも乱逆起り義家公義光公。若も討死遊しなば源氏の御家を。誰有て繼せ玉はん。五人十人在す迎も多しとは先此金

平は存じ申さず。況や僅お三人中をひ出家と仰左れり。是魔王めが勸ならずやいかに入々。
 同 次郎殿ハ此金平が隠し奉れば。構ひて外を尋ね給ふな。某命の有らん限りは。義綱公の御髪
 迎は下させし中さぞ思ぞ。サア斯云ふを憎しと思は。誰にても討止よ。いやはや無心千万兎角物
 にハ限り有り。源家數代の御厚恩も今日迄にてゆぞ。朋輩達の好も今が限りを左らば迎。鬼を
 欺く類はせに涙を。はら〜と流し立歸りたる所存の程。忠とや云はん義とやせん通れ古今の
 稀者やと。皆感せぬ者ころ無かりけれ

第二

兵庫の督金平は急ぎ我家に立歸り。義綱公の御前に罷出御前の始終を残り語り。君御立腹斜
 あらぞ定めて討手や向ふべし。一先帝都を御忍びなされるべし。幸い江州石山に存じの者のゆへ
 ば。あれへ御越ましませと。手勢引具し都を出江州一指てぞ急ぎける。此事隠れ非れば頼義大
 きに立腹有り。扱も義綱めは父に背く不孝者。其上金平が匿まへて江州石山へ落けるとや。佛
 法せほうを破り主にたてづく大悪人。急に押寄せ討取れと御嫡子八幡殿に討手の大將仰付ら
 れ。侍大將には三浦の和田左衛門爲宗。鎌倉の權五郎景政。其勢七千五百餘騎石山寺へと

「押寄る。是は扱置兵庫の頭金平父子義綱公の御供中。石山寺に忍び居て移は變る仇し世の。
 變とや云ん現とやせん。昨日迄は天下の武將の御子成しに。今日は何時しか引替て。人目も稀
 成る山寺に。幽の体にて暮らせ給へ。は袖子く間も無し。時しも秋の半にて名におふ月の夜
 成りしに。住持元より情有たて様々の珍菓を調へ。若君のほ前に出無沙寂敷ましますん。牙
 行く月を涉覽有り浮心を晴させ給へ。我々も諸共に月の前にて酒を汲み。秋の徒然を晴し申さ
 んど。常に圍ひ置たりし底前に浮供や。哥を讀詩を作り様々慰め奉る。實にも今宵を秋も最
 中の空清く。二千里の外に隈も無し。義綱仰せける様ハ何に方々聞給へ。左れば小野の小町が
 詠じにも。あすの夜を今宵になして月もかな。命もしらす曇りもやせんと。口吟みし言の葉も
 今宵の月に雨を厭ひし眺かな。かの紫式部と聞へしも。此石山に籠り居て三五夜中の月の色。
 海漫々たる湖水に映る影を見て。ウタイ水相観を開きつ。桐齋帯木須磨明石。關屋蓬生數々
 の源氏の巻を書しるし。今も昔をみての糸。縁に引れて我々も。清き流れにすみの江の。松の
 梢は變ねど四方の若業と紅葉して。木の葉乱る。谷川に風の掛たる榎ハ。なべて絶せ思思か
 な。我の草迎色々に桔梗萱萱女郎花。萩や薄の乱れおひ。涙の露の自ら峯にさわたる小男鹿と

雁を比べて。鳴斗り虫の鳴音もいと弱く。草葉にすだくきりくす。鈴虫機織蠶虫。雲井の雁の群がりて。都の方へ飛行けよに羨しや我も實に。翼のあらば九重に立還るべき眺かな。颯々たる峯の葛かづら蔦の細道物凄く。さうくと鳴るは瀧の水。岩に碎けて飛散る。雪にまがひの糸櫻春の花かと疑れ。いと昔の戀しきに覺束無くも呼子鳥。せめて我名を夕月の。神の誓ひも曇り無く都に還るよしもが有。南無石山の觀世音悲願たがはせ給はずば。二度故郷へ返つてたへ念彼觀音力也。肝膽挫死御起請ある心の中ころ「殊勝なれ。斯る所へ寄手の勢道一家の殊勝なは。さも大様に寄せ掛け聞の聲をも上ずして。ひつろと種取居りけり。和田太左衛門爲宗ハ萌黄匂ひの鎧を着。甲を脱で高紐にかけ。供をも連す只一騎門前に歩み寄り。詞兵庫の頭へ對面しや度事有り也。たツからかに呼はれば急ぎ此由訴ふる。金平木戸を開かせやあ爲宗。御分討手に向はれしかテ、太儀と云へば。去ばいの上意なれば義家公是非無く向はせ給ふなり。何と思はるゝ金平。一旦仰せ出されしとなれば急に御詫も難し。次郎殿さへ御出家あれハ何の別義無き間。是非に御意見上御髪下させ申されよ。憚乍ら某も共々御意見申べし。先篤と思ふても見られよ。假令何体の事迎御親の命に背かれては。未代迄の御かう

なん。只々御身が心一ツで納まりさうに思はるれば。どうぞ了簡致れさとも是非を圖つて申さるゝ。金平聞いていやと爲宗。御身は知らぬ某ハ世は末と見受れば。片時も生延るをうるさくころ思へ其仔細は。何が天下の武將たる身の買主坊主に進められ。悪道に赴き給ふ御心底こそ憂なけれ。御身も文武の侍也。諸人に呼れしものなれ共今又次郎殿を出家とは。夫は掛らぬ爲宗世を諂らふか見苦し。大海が干瀉と成り富士山に翼生ひ虚空を飛で廻る迎も。次郎殿の御髪とてはふつと下させ申さじ也。父金時ハ位牌の前にて誓言を立候へば。力及はぬ仕合なり。義家公へも宜しく申上てたべ。渡邊兄弟にも北國より還りなば。能々心得玉はるべし。誠に御身と某も竹馬に鞭の古しより。連枝の如く親しみしに今敵味方と分るゝ事。前世の劫と云ひ乍ら思へは拙き武士の。多年の誼も是迄ぞ。公達の御事を必ず頼み申ぞと。涙に咽び口説にぞ。左しにも猛き爲宗も共に袂を濡けり。暫くあつて爲宗先此段を義家公へ言上せん。互ひに討とも討るゝ共尋常の沙汰成るべきに。構ひて聊爾し玉ふなど念比に云替し。涙乍らに爲宗は本陣指てぞ「立歸る。斯て金平手勢殘らず物具させ思ひの。出立は。上を學ぶ下都迄命を惜む氣色無く。勇み進める有様は心地能こそ見べにけれ。金平が裝束は紺地に龍は直垂に。黒

系威の大鎧草摺長に着なしたつ。赤銅造りの太刀刀十文字に脇挟み。軍配團扇携へ義綱公の御前に参り。誠に不慮の軍陣御難儀に思召れん某も幼少より。今此年に及ぶ迄數度の合戦に出けれ共。多勢に恐れず難處にひるます。怖きと云ふ術存せね共。此度の戦ひに寄手と云ふも御恩の主。味方と云ふも譜代の主君。向ふ敵は傍輩なれば只恥かしき勵みなり。左れば武士の身は父子兄弟の中をも避け。攻戦ふに禮多し必ず本意無く思すまじ。いせく軍の門出に御盃を上参らせ。某を一ツたべ下々にも下されん。夫くとゆふは山入日欺く盃を。盃に据へつゝ巻上る。義綱取上らせ給ひ金平に差し給ふ。謹んで頂戴し引受續けて三杯了し。並居たる軍勢にさいつはなれつ夢の世の。今日と名殘の酒盛ぞや慮外は涉免さるゝに飲や歌へやまひの袖。返くも面白やとしどろもどろの足拍子。軍の境とは「思はれず。去程に三浦の和田左衛門爲宗は。金平が所存の通り始終を中上げれば。義家あぐみ思召銀儀千方扱何にと。の給ふ所へ父上より二人が首を討てやある。なご遅はりし早くと涉使重なれば。義家赤面ましろ。是は餘りなる仰せ哉。よし此上は是非も無し急に攻掛討亡し。二人が首を持参して涉憤を休めよと。飛振上て。下知差給へば力及ばず軍兵共。一度にとつと押寄て鬨の聲をぞ上にける。館の内に

も六百餘人共に鬨を合せつ。得物くを手々に引下げ討つ討たれつ。追つ巻つ鐵火を散して「戦ふたり。軍半に味方の陣をり二八斗の若武者の。紫裾濃の鎧を着一陣に進み出。某は金平が養子秩父の十郎頼平なり。凡主君の命には親の首をも切る習ひ。然れば味方に屬すべき法なれ共。悲きかなや其他門よりの養子たれば。今涉味方へ参りては養父を振棄強きに附しど。世間の批判を憚りて敵對中なり。日頃誼の人々首を取れやと云捨て。薄雲と云ふ太刀を眞向に指翳し。大勢に破て入蜘蛛手環違ひ十文字に秘術を盡して「切迫る。手元に進む兵を三十六騎切倒し息を繼て居る處へ。寄手の陣より同じ年なる若武者。花やかに鎧しが白綾の鉢巻し。鎌倉の權五郎景政と名乗いかに頼平。日比の廣言に彌増し眼を驚したる働きかな。扱又涉邊り金平の養子。某は烏帽子子なれば其兄弟の誼なれ共。親子兄弟逆も敵味方と分るは武士の習ひ。思へば淺間敷次第なり。元より討ても討れても互に恨の殘らぬ中。いざ参るといひければ頼平莞爾に笑ひ。實にこれとがいか如く兄弟同士の中なれ共。思ひも寄ぬ軍にて今敵味方と分るれば。他人の見る目も恥らし尋常に致さんと。兩方先身繕ひの有様を寄手も味方も諸共に。當時無双の若者共を由無き味方争ひに。殺さんとの殘念やと手に汗握り見物す。

時に二人の若者共互に太刀を抜翳し。参りさぶと聲を掛け丁々ど打合せ。受つ流しつ抜つ潜つひらり〜ひらり〜と。蝶鳥あどの如にて更に勝負も非ざれば。一引々て息を次ぎ又揉合せ入違へ。半時斗の戦ひに危くも又潔きよし。然る所へ渡邊兄弟飛鳥の如く駈來り。二人が中へ分て入暫く待方々と双方へ。引分け扱槍に向ひ。兵庫の頭殿は夫にましますか。我々只今罷上り此一乱を道にて聞き。驚き直に駈付ゆ。此國綱が歸りし上は何様にも首尾を繕ひゆさん。必ず早り給ふなど云捨味方の御陣に参り。八幡殿のお前に出。只今歸京仕るが驚き入たる御仕合。察する所天魔の所爲と存づれば御思案有るべき所にゆ。是々爲宗殿。若輩者の推参をやすは何にゆへ共。君を諫むるは臣の道。假令我君何体に宣ふ共。理を立道を立幾度なり共諫言中其上にても叶はずは是。千年生ぬ命ならぞや。但名よりも命が惜うゆか。此上乍らも何卒思慮を廻らされよ。先此陣は我々が預やすと云へば爲宗至極に攻られて。扱々御分は若けれ共父武綱が子にて有。ナ、過つたり某が一生の不覺を。負ふた子に教られ浅き潮を渡邊よ。何にも思案の有るべき事先々陣を引けや迎。露を片敷草枕粟津が原に陣を取り。各疲れを晴ざる、危うかりける次第なり迎。舌根を標はぬ人は無し

第三

和田左衛門爲宗は今日渡邊の國綱の。名よりも命が惜きかと恥しめしに心付。一子竹若丸を傍へ近付て。何と思ふぞ竹若丸。斯様よ挑み戦ふも主君への忠と云ひ。且は家名留めん爲。然れば汝も某て明日の命も圖り難し。同じ死すべき命ならば未代其名を殘す爲。何ぞ二郎殿の御身替りに立やすんとは思はぬか。今日渡邊が詞の末。必定汝を義綱公の御身替りに立てせよ。云はぬ斗と察したり。斯朋輩に氣を付られ。今は逃れぬ所なりとは思へ共汝は扱。我一命にも替えまじと。思ひ育てし事なれば。是非に死ね共云難し。爲間敷ものは官仕へと不覺の涙に咽ばる。若年乍ら竹若は道三浦の子孫とて。わろびれたる風情無く。仰は左にてゆへ共。父のお爲若君の御身替りと有るからに。何で命の惜からん。假令今宵生延し迎明日の軍に討死せば。君への忠は有りもやせん。父上のお心み叶ひで相果ゆえ。黄泉も如何と存れば疾々首を打給ひ。義綱公を助けてたべと潔よくころゆけれ。爲宗大に感歎し扱もおとは我一子程有りけるよ。ナ、満足せり〜。然らばとてもに此段を金平に云聞かせ。首尾繕ひ計らはん。いざ左らば迎只二人忍びて「館に案内し。金平に對面し。同。扱只今來る事別義に非ず。兎角武將の

御一言翻し爲給はじ。然ればとて若君を打奉らんも。冥加の程恐しくも御痛のしく。是非
に行き當し心底を世倅竹若に語りしかば。恐れ乍ら身替に立ち申度由すに付。具して來り
ゆ。命に恙無くば程を経て何様にも成間敷にてな。身は若君の供し何方へも立
忍び。來らん時節を待給へ片時も早くも有りければ。金平暫く押俯きはらうと涙を流し。去
どては我連も義を重んじての事なれ共。分親子が忠義の程骨體碎けて覺へたり。尤心ざしは
切なれ共。斯面白からぬ世に永らへ。何を樂み有るべたぞ。今生の思出に明日の軍に花を散し
若君諸共自害して死なんと思ひ立て有る。人口憚り多ければ早還られよ爲宗。いやな金
平。面白からぬ世を見て相果んとは分には似合。道の道たる時死なんこそ侍の本意なれ。
敷ならぬ共我々親子斯迄思ひ極めしを。無下にせんと侮つて云はるゝか。但心底見ん爲ると
色を違へ申さるれば。チ、過つたり理りなり。此上は兎も角も身身の所存に任すべし。爲宗悦
びやれ竹若。汝が望み協ふたり急で最期の用意せよ。畏てゆと命を惜む氣色なく。首差伸て待
ければ爲宗太刀をするりと抜き。振上んとする手もあへて。氣も消え眼も眩みつ。太刀を
らりと打棄てどうぞ伏して泣にける。竹若も共に心は乱るれ共。父に力を附んと思ひなふ後

れ給ふか父上さま。若も軍の場み出入手に掛りゆはば。さぞ本意無くも思召さんに御手に掛討
給ふは。歎きの中の御悦び早疾々と勇められ。漸々心を取直し。扱面目あや兵庫の頭。最前の
詞に違ひ只今の有様を。賑や未練に思はれん。去乍ら山野に遊ぶ鳥獸類迄。子を悲まぬは無き
習ひ五人十人有る子さへ。況てや我ハ二人共亡世の後迄頼みにせし。只一人の思ひ子を然も手
に掛殺す事。奉公の身ならずば斯る愛目ハ見まじもの。あら恨めしの浮世やと堰上り歎くに
ぞ。差もの金平諸共に聲を上て泣にける。竹若も涙乍らいかに金平殿。斯時刻移りては共
に未練の出ゆ。父は途方に暮給へは。憚り乍ら貴殿遊ばされて給はれと云ふ。チ、聞へたり尤
なり。某討んと云ふ儘に太刀追取り立寄しか。見れば見る程顔形ち義綱公に似參らせ。雪の肌
へ爪外れあら勿体なや。ならぬと太刀打捨て立退ば。爲宗今は思ひ切我子と思へば不便増
す。過去の敵よ南無三寶と太刀振上れば金平おさへ。やれ待て暫し此事を母の方へ知らせた
るか。云置事も有るべきに。今暫くと制しつゝ何に竹若。溺れれど幼けれ共世に例なき思
の者。末代家の譽と成り先祖の名迄も揚るなれば。必ず死するを悔まるゝな。して又母の方へ
云置き度事ハ非ざるか。きんゆ申置き度事數限り無くゆへ共。却て御難きの種あれば態と扣

へやさぬなり。此肌このはだの守りまもを形見かたみに参らせたび給へ。思へば墓はかなや母上かみの斯かる事とは知し召さ
 で。今朝けさ此軍いんぐさに出る時。目出度めでた無事ぶじにて還れ汝かへの年としも行されば。高名かうみせうせでも苦くるしからず。深入かひり
 するな魁さかきすな矢面やまてをば除よぎて居よと。様々に云いひめ難がたてと有りし言ことの棄はるも。永ながき別わかれと成り候
 ち只返すくも今一度。最期さいごの名残なごりを惜たじぬが。是これの黄泉よみの障さばりなり。先立まきたち消る此身このみなれば雪
 折竹せりたけの逆様さかさまも。前世ぜんせいの事ことと思召し思し諦あきらめ給へやと。能く諫いさめ給はれと打伏し沈しづみ歎なげくにぞ
 爲宗ためむねいと心消へ途方まほうも更に涙なみだ乍ら。ナ、其段だんは相心得母あひこころに申すべし。心安く思へよ。夜
 も更かぬ今は早是迄はやぞと手足あしを震ふるひ眼めも眩くらめ共。思ひ切たる心から太刀たちをつ取とり。情無なさけくも首くびふつ
 と打落し。其儘まじ死骸しかいに抱付いださわつと消入きへいる斗たなり。哀あはれと云ふも愚おろかり。歎なげきの聲こゑに義綱公よしつなこう驚
 き奥おくより出給ひ。此有様こゝろを御覽ごらんし這この抑何おさへにと呆あきれさせ給へば。金平右かねへいみぎの次第しだいをや上あ。爲宗
 が御親子ごしんしの御間ごまを大切に存たもつるゆゑ。一子竹若いちこたけわかしを御身替ごみかりにと申すも敢あへぬに義綱公よしつなこう。扱情あつかなや方々かたは
 など最前さいぜんみ知らせぬぞや。親おやに不孝ふかうの某たがゆる科無かき者を殺す事。皆是我みなわれ爲す業わざと云ひ世よの非
 も耻はづかし。所詮しよせん今は是迄これと太刀たちに御手ごてを掛け給へば兩人ふたり忙あはて緋あはり付。這こは勿体無なき御仕業ごしわざ。
 君きみを助け奉らん爲ため二人無ふたりき子を殺せしに。御生害ごせうがいとは扱何あつかに竹若たけわかし不便ふびんと思召し御命ごみこと全まうし。亡

跡あと弔たづなはせたび玉たまへなう金平かねへい。最早もはや夜よも更明あけ方近かたし。早くはやくは供たまし退給へ實じつは尤なほ時移ときうつる。然しからば
 八幡やまはたの方かたへ御供ごくわ申し忍しのぶべし。相變あひかはる事ことあらば密ひそかに狀じやうにて知らされよ。最早もはや参まゐるぞ去さはと云へ
 ば若君わかしきみは爲宗ためむねに。親子おやこが深ふかき心こゝろぞし生々しやうしやう世々よよに忘わするまじ。命いのちに承うらへば此恩このおんは報くはんど。涙なみだ乍
 らに宣のたまへば。這こは有難ありがたき御仰ごんがうせ此上こゝろ乍ら御前ごまへの首尾しゆび。随ずい分ぶん繕つくろひやさんに御心ごこゝろ永ながく在ありませと。
 扱あつか爲宗ためむねが才覺さいかくにて金平かねへいが家來けらい迄。事ことゆゑ無なく落おつと。討うたれし者ものの首くびを切り。面おもての皮かわを剝はり取とりて金
 平かねへいが首くびに似にせ。館やかたの四方よしかたへ火かを放はなてば寄手よての勢せい一同いどうに。すの金平かねへいは自害じがいかと一度いちどにぞつと押
 寄よする。爲宗ためむね首くび共ども引下ひきくだげ門外かどに走り出はしり出で。義綱殿よしつなどのも金平かねへいも和田左衛門わだざゑもんが討取うたりと高たかからかに
 呼よべば。各おのづから駒こまを駈かけて寄よせて迎むかへられ手柄てがら目出度めでたやと。凱歌かゐとつと作立つくたち凱陣かゐじん有あること「勇々ゆうゆうし
 けれ。扱あつか爲宗ためむねの義家殿よしかのどのの御供ごくわ申し武將ぶしやうの御前ごまへに罷出ひでり出で。上意かみご黙もくし難がたきゆゑ義綱公よしつなこう金平かねへい共に討中
 てゆと。則すなはち二ツの似首にせくびを御前ごまへに披露ひひらする頼義御覽たゐぎごらんに「いしくも仕畢しおひせし。誠まことに金平かねへいめは剛
 の者程ものほど有りけるよ。死後しごに面おもてを晒さらさん事無ことな念ねんに思おもひ。己おのれと面おもての皮かわを剝はりしと見みへし。二ツの首くび爲
 宗ためむねに取とるぞ何様いかゞにも斗はかへと。宣のたまひ御座ござを立たせ給へば爲宗ためむね二ツの首くびを持もつ。宿所しゆくじよを指さして歸かへら
 る。心の内こゝろころ「悲かなしけれ。館やかたに成なれば北きたの方出迎いでむかひなを歸かへらせ給ふかた目出度めでたや。定さだて首

尾も好からめと是又嬉敷侍ふなり。詞して竹若ハ遅見へしがなを連ては還らせ玉はぬ。覺束なやとの玉へ共爲宗とかうの返事なく。唯悄悄と涙に暮て居玉へは。こは不思議竹若ハ過ちにも致せしか。あふ氣遣はし早語られよと責られて。今は包むに包まれず情なや其方が。思はん所も便無けれ共逃れがたなき仕義により。若君の御身替りに不便乍ら殺せしなり。生中見せでつられ共切て此世の名残にと。空しき首を出すに氣も魂も消果て。取乱さんとし玉ひしが暫しと心を押鎮め。詞何竹若は若君の御身替りに立せしとや。未だ年に足らねば最期てろ怪けれ。卑怯の色バし侍らはざりしか。爲宗聞玉ひ。いやとよ殺す我身ころ。前後ふかく乱れしを却て諫めし爲体。いやはや語るも語られずと云捨てとぞ歎かるれ。痛はしや北の方いと心は消れ共。夫の心を勇めん爲。御歎きは理りなれ共。弓矢取る身の做ひ討死してさへ忠と聞く。况てや是は類ひ無き。御身替りに立事は。二世のねがひや三世の御恩。報ずるのみか末の世迄も。名を残さんは此家の譽れにて侍らはすや。元より子の無き身と諦め必らず悔ませ玉ふあよ。先々妾は佛前に此亡骸を誘ひて。後世の手向を致さんと血にあへしたる竹若が。首を抱きて立足も心も「よひりよひ」と。一間所に入り早く空しき首を顔みあて暫し消入

泣給ふ。稍有つて涙乍ら。扱も一討も討たり討れも討れたり。惜まぬ武士の命乍ら。まだ生出る若竹の。葉末の露と消失せし空敷姿は何事ぞや。自ら女の身成り共君の爲に立命。さらし留むる心で無し。なを立歸り今一度母に名残を惜ぬぞや。又父上斗り親にして母は親とは思はぬか。あら情なの我子やと泣涕焦れ給ひけり。餘り歎きの強けきや。今心も虚々とうつこ「とやせん。夢とのみ見へつ隠れつ。竹若が亡身忽然と顯はれて。暫く涙に暮乍ら。誠に御恨の數々御道理去乍ら。道は遠し夜は更る。事ハ急なりいかにして歸らん隙も無き影の迷ひの雲と立隠れ。晴ぬ中有の旅の空思し遣らせてたび給へ。去にても思ひ廻せば忌はしや。須彌は地と成り滄海は。淺き瀬と成る御恩をば。露も送らで相果れば多罪まぬがたけれ共。主君の爲の御身替に立金札を何にぞや。母の歎きの深ければ。共愛着に引されて。成佛更に途難し我を不便と思しなばひたすら歎きを止め給ひ。菩提を弔ひてたび給へあら名残惜の母上様やと叫ぶ聲に驚きて。やれ竹若かと抱き附ば果敢無き元の首斗り。是は夢成り今一度詞を成共交さぬかど。呼を叫べど其甲斐も歎き死ねとの事成かど。癖を叩き伏轉ひ焦れして泣給ふ。和田左衛門爲宗は。最前より立忍び障子を隔て居られしが。さつと押明けいやなふ。御身の愁歎至

極なれ共。其歎きに引され竹若が迷ひ來ると覺へたり。我子を不便と思われば香花を手向經を讀み。吊ひ得させ給へやと様々なだめ給ふ所へ。女性一人驅來り懷中より太刀を抜き。夫の敵逃さじと爲宗に打て掛る。詞やれ聊爾すな覺へなし。人違ひどと云ひけれ共何人違ひとは愚やど。無二無三に掛しを飛掛り取て伏せ。定めて狂女ならんと譬を引上顔を見れば。詞や其方は奥の女中柏の前ならずや。して先某を夫の敵とは更く合點ゆかず。其夫と云ふ者の名を名乗れ。ナ、自らが夫とはな。忝くも御身の主人義綱様よ。勿体無くも家人の身として能もれ主を討けるな。只一打にも思ひしに。女の身の墓なさは討もまなさで。剩手込にせられし無念やと齒齧を爲して泣給ふ。爲宗姫を引起し。扱は理り若君と契りしり事は露知らず。語るまじとは思へ共御身が心底優しければ。巨細を語り聞せん。竹若丸を若君の御身替に立し事。委く語れば柏のお嬉敷もまた手持悪くも。扱々途方も無粗忽の段。眞平許るさせたび給と手を合せてぞ詫らる。いやな事知らずば誰逆と。有間敷事ならず必心に掛らる。先以御身の扱。女の身として斯程迄思ひ入たる所存の程。感ずるに詞無し若君の御在所は。八幡に忍びせしませば文の便りは某が。成程届け參らせん。心安く思はれよと。いと念此に宣へば姫は嬉

數々の詞の。禮儀のべの露。しつぽと夫婦をとふらひて涙乍らに還らる。いづれ哀れ多けれとも斯る歎きは又世にも。類ひあらじと見る人聞人。袂をしぼれるばかりなり

第四

頼義公の御臺所は御子八幡太郎義家殿をお前に召れ。扱も加茂の次郎は父の御勘氣重くして。討れたるとは聞つれ共御身が討手に向ふ由定めて隠し落し置。父の御機嫌直さん爲斯僞ると推したり。幼心に義綱が嘸や。物憂く思ふらん密に人を遣はして様子をもきかまほし。忍ぶ所を知らされと小聲に尋ね玉ひけり。義家行當りたる御顔はせにて。詞御返事を申上るも便無けれ共。世の常成惣御立腹にてとかく討との仰せに任せ。和田左衛門が手に掛首をも實檢あざれてゆ。某も弟なればなんばう不便に存しかけども御憎しみの深ければ思ふ儘にも成難く。是非無く討せてゆと憎しとして宣へば。何爲宗が手に掛け義綱を討けるとや情なや。今迄はわの爲宗を武士かどこを思ひしに。義理をも知らぬ人畜類にて有りけるよ。何に主命重き逆是も譜代の主ならずや。詞何に義家。御身も源家の惣顔とも云はる。身か。親の短氣にれどりあひ。現在の弟をば責て我手に掛くるか。家來の者に殺させて手柄らしく我前へ。働も知ら

で來られし。主も主下人も下扱も無慘や義綱が。かばかりつらき世に生れ十五に足や足らずして。然も下人の手に掛るは過去の因果と云ひ乍ら。一ツは父の酷きゆゑ。愛きが上に愛たれを生永らへ見んよりは。共に殺せやれ早殺せと人目も分を泣玉ふ。痛はしや八幡殿至極に迫る御恨。どかう詞も出されず。面目無げにぞ見へ玉ふ。女房達も涙乍ら色々宥め參らせて。奥へ誘ひ奉る詮方「もなき次第なり。義家ひしほくと常の所に入り玉ひ熟々思ひ廻らすに。母上の御恨重々道理至極せり。尤父の御仰もだすの不孝と云ひ乍ら。何ぞを思案も有るべき事を早まつたり後悔さ。此上母の某を御覽せん度毎に。恨み歎かせ玉ひなば生て居る甲斐有るまじき先非を悔ひて益無し所詮我も腹切らんと。太刀に御手を掛玉ふがいやく。此儘にて相果は狂氣やせしと云ひるべし。母上の御方へ書置残しおかばやと。料紙に向ひ來し方の御悔みの數々に。名残を忍ぶ涙に暮定かならずも書留め。今は早是迄と思ひ切たる下よりも。御身の上を觀じ玉ひ。淺間しや我今武將の嫡子として。誰を相手に暗々と。我と我身を害せん事思へば弟を殺しぬる。因果の報ひと覺へたり。此世からさへ斯斗。未來は猶し何ならんと。思へば最と心細く御涙こそ切りなれ。エ、不覺なり我心。五塵六慾榮耀富貴生々の父世々の母。地水火風に還す身を。迷ふの愚痴の爲す所と今はふつとと思ひ定め。源氏重代鬚切丸するりと拔せ給ふ時。白鳩一羽筆を加へ虚空より飛來り。障子の面に有々と大文字を書顯はし。南の方へ飛去りしは不思議と云ふも」をろかなり。義家奇異の思ひを爲し立寄て讀給ふに。生れ重し死に輕し武運の晴るゝ時を待てと神託方に疑ひ無し。扱は氏神正八幡我を不便と思召し。愛憐の神心仰ぎても猶餘りあり。此上は告に任せ生害思ひとまらんと。八幡の方を禮拜し數の御祈願ましませし。義家公の御命危うかりける

かしはの前道行

今日と過ぎ明日をいさや。白露の命に更に惜からねど。今一度の逢瀬をは。神や佛も憐みて願を叶へをはしませ。足柄箱根玉津島貴舟や三輪の明神は。夫婦妹脊の語らひを守り玉ひん御誓ひ。頼みを深く掛巻も八幡と聞けと。名のみ斗に白菅の。笠を着て見よかしはの前。杖を頼りよ忍び出。實にや鬼神も納受し武士の心をも。和ぐるは和哥の道心を盡し我君の。寫し玉ひし古今集。愛きを慰むかたもやと。懷に抱きて愧ゆき重き身としも人や見ん。よま其逆も君ゆゑと。思へば苦しからげ襖。袂ふりくたどくと。たどり行衛をとうじの前。夕日傾く西

の岡蒔田の面に居る田鶴も。雛に思ひは有るものを。況ていはんや人の親の心は闇にあらね共子を思ふ道に迷ひぬと。連ぬる枝を徒に。なき身を聞けばはこき木の歎きに沈む涙川。袖の柵何時も無く。秋風烈し羽鳥の里。木の葉時雨に埋もる。千草の色も虫の鳴音も枯る。いと哀はますほの薄。乱れくてもよはくも。立体らひて在せしが。妾心あらん身あらば斯る折ころ腰折を。次やせまじと思へ共。なまじ詠ても貫行が。筆に殘して有原の。其濡男と聞えしは。心餘りて詞足らず。萎める花の色なうて。匂ひ残れる風情かや。華山の僧正遍昭の誠少し。畫にかける女を見て徒に心を動き如くあり。喜せん法師の其詞かすかにて。秋の月雲に入るとぞ記しける。小野の小町は。妙なる花の色好み。歌の様さへ女にて。只よはくと詠どころ。大友の黒主は。薪を負へる山人の花の蔭に休み。いたづらに日をや送らん。此譬に心附く我も此處にて徒に。日をや暮さんいざ左らばと。道を早めて行く水の。淀の川橋と。ろくろと打渡り。渦巻浪のよるとなく。晝と隙なき水車くるり。くるり。さらさら。つと汲流す。釣瓶の車とくくと千里も過る心地して。八幡のふもとに「着給ふ。去程に坂田の金平は爲宗父子が忠節無下にせん」と本意無く思ひ。日頃の短氣を押鎖め義綱公の御供し。八

幡の坊に隠れ忍び月日を送り居たりしが。或夕暮に義綱公れ山へ參詣まじませ共。金平は常ならず頭痛甚だ止ざれば。れ供を欠けて坊に残りふんどり返り寝も寝られず。阿チ、思ひ出した。此の比打絶軍せず五体を只おきやすむにより。病めが毒をなし。再發すると覺たり。哀れ扱何處にて成り共手比の兵亂起れかし。素浪人の事なれば弱き方へ加勢して。五万もあれ十万もあれ。太刀の刃の續く迄片端より切靡け。太刀も刀も折碎けば大手を廣げ分て入り取ては投踏倒し又は捻首人礮。算を亂さば大將め定て逃んぼつかけん。手酷く追れ詮方無く天へ上らば諸共に。慾界色界無色界非相非々相十二天。地を又潜らば八万那落閻魔王が味方して。鐵の門を立獄卒共かかこむ共。金剛力を出一つゝゑいやつと押潰し。十王冥官片端よりころりくと踏倒し。彼の大將めを生捕つて褒美を取て歸らんもの。何の因果に近年は。斯く靜謐に治まりし張合も無き世間やと。大欠伸して若君の御小袖を引かゝり。高枕して臥たりしは凄まじ「かりける所存なり。去程に柏の前漸々八幡に着しかば件んの坊に尋ね入り。案内と云へど答無し是は何にぞと差覗けば。黄昏過る宵の間の月も「おぼろに木の葉影。路次の細目に明たるを密と開き内へ入り。透して見れば若君の御紋の小袖ぞつとして。嬉みの毛いよだて共まで暫し

君は元より我迎も人目を忍ぶよるの空。とに静まりましまして。静かみ立寄是申柏が参りて候なり。まだ宵の間に静まるは御惱もやましますとか。いふ聲金平耳に入り。扱も優しや女の身とし遙々尋ね来る事。よつく君を思ふも為起上らんと思ひしが。いや〜追付君の御下向ならん。其迄欺して遊ばんと。彌々小袖引かぶり空寐入して居たりけり。姫は心あくがれて。なふ日頃のれ詞に替り愛想も無き御風情。妾は君の御事れみ夜晝と無く案ずれば。露の間もまどろまず。餘り有るにもあらねば。實ては見もし見へ奉らんと。夢にも知らぬ道の邊を尋参りし其甲斐も。情なの我君やと涙に暮て口説かる。され共とかうの應なけれバア、御心強や鬼成り共。今の哀はとふらはん假令れ厭と思す共。其一言の御應有るとて御罰も當るまじ。但妾が身の上は何とぞれ恨ましますかと揺れと〜返事なし。堰にせいて柏の前溜息をつぎ身をも〜へ。何程空寝なさるゝ共詞を交さで歸らふかと。咽の邊脇の下彼方此方とまろぐれば。金平今ハ堪へ兼。くつ〜と笑ひ出し小袖を取て起ければ。斯は恥しやはまつたり餘りとあれハ胸愆な。しやゆに面白さふにと有ればいやなふ。詞いッかに此金平が濡の道を不得手な迎。若君のれ留守成に。生若い其方と詞を交すハ不義じやと思ひ。其上餘り頭痛してとろり〜と寢入

しの。御身の拾りまそぐられしが按廣と成て能成たり。先々知らぬ道と云ひ。遙々の所をば能も尋ねて來られし。夫程君におもひくかや是こかね心中め。無や草臥たるらんと。いふ所へ若君御下向ましくて。這は抑柏の懐しやと先立ものは御涙。姫も逢見る嬉しさの。涙乍らに過來し方の數々積る物語り。無やと云ひて金平。シテ先うへ〜方には御氣嫌宜しくましますか。中々恙無く在せしの知らせ玉はぬ御事とて。御痛ハしや御臺様には義綱様の御事を明暮歎き説させ玉が明日ハ六條河原にて。思はしや御道善逆満容上人に頼ませ玉ひ。流れ瀧頂侍ふも聞も敢ず金平。詞何夫は定成か。扱勿体なや思はしや。未だ勇々敷若君を追善させては叶ふまじ。是といふも満容めを浮世に承らへ置くゆゑなり。屈竟の思案ハへば。今宵都へ忍び行き明日は君を世に立るか。左無くば天下を暗黒か。二ツに一ツの御運ぞやとは云ひつ某が。些共粗忽は致すまじろく成る道を立切て。邪法の外道を隨へば御運に叶はでゆべき。いざ〜左らばとゆふしでの神の宮居に念願し。柏打連御供ヲ都を指してぞ急ぎける。彼金平の詞の末。誠に道有り潔し心地能共中〜ヤ斗は成りけり。

御痛はしや御臺所は義綱公の御事を。深く歎かせ玉ひ頼義公へ御訴訟有り。追善様へ有る中に刃に掛る死靈には。流れ瀦頂ころ勝るれと満容上人を頼ませ玉ひ。數多の僧衆誘引し六條河原に出らる。御臺も御出ましませは如何思召れけん。武將も跡より來臨有り御棧敷に入り玉ふ。尤諸侍ハ殘無く晴れ「がましき法事なり。抑流れ瀦頂の濫觴は。高麗唐土の梁の武帝弘法に御歸依有り。三寶佛陀を信じ玉ふ。或夜の夢中に老翁來つて宣はく。左れば六道四生の衆生。無量の苦み止む事無し。此苦を逃るゝ功德をば名付て。水りうゑと號す。尤勝れし功德。上は無量の佛菩薩圓覺しやうもん明王八部。梵王帝釋婆羅門せん。二十八天日月星辰下は。人倫下界の龍神阿修羅冥官地獄餓鬼。ゆうこんたいこん鬼神迄殘らず供養を受るなり汝是を施せど。靈夢を代々に傳へ來て。六しもの闇を照すなる先中陰を表し。四十九本の卒塔婆の數。限り知られぬ棒け物。燈明風にまだくげば。花やちりくしきみ。香の烟ハ四方に満ち五如來の旗を立て。上人禮拜事終り噴嚏を澄すきんの音。にようを鳴しはちをつき。施餓鬼の儀式ぞ殊勝成る。早暮掛る水の面建る卒塔婆の蔭よりを。けしたる姿杖に縋り左も物凄き聲音にて。我は坂田兵庫の頭が亡靈成るが。未だ三途にうらたへて。地獄へも極樂へも。有付

難くゆへば。上人の法力にて浮べてたばせ玉はれど。しほくどまそイめり。上人聞も敢ずあれ。何も御覽ゆへ。日頃の惡逆邪慢の心あの如を迷ふなり。何と恐しきことにて候はぬか。去乍ら仇をば思にて報ずる習ひ。愚僧浮べて得さすべし。やめ金平が幽靈婆の惡念を翻し。只一心に彌陀の名號を唱へよ忽ち淨土に往生ぞ。左あらば十念を授んとあれば。いや。其念佛にて佛に成れば。地獄罪人一人も無し。痛はしや御坊は。人を佛にする術をかつて不得手と覺たり。上人ぎよつとして。扱々死しても休まぬ我慢や幽靈。いつぞやも示せし如く。阿字十方三世佛。彌字一切諸薩陀字八方諸しゆうぎやう。皆是阿彌陀と説く時は念佛の功德より。勝れて浮ぶ經は無し只念佛とせと有る。して其阿字十方の文ハ何經にか書されし。釋迦一代の説教に遂に聞及ばぬがと云ふ。満容はつと思はれしが左れ共騒がず。ヲ、不審尤なり。此文は彌陀の秘密の本願ゆる經文にハ説ね共。淨土の安身功德無量の要文とて。先師惠心の僧都世に弘められしと答ふ。ム、左すれば惠心は大天魔。其末弟なれば和僧は外道に極まりたり。隨分人をたぶらかし。魔道に入れよ地獄に落せとゑせ笑ふてぞすける。上人大きに立腹有り。扱勿体なや佛薩の化身也。世上に尊ぶ惠心今又日本の地に於て。肩を並ぶる僧も無き

近代智識の満容を。外道と云ふは奇怪と河原の石もわるゝ斗。地だんぐ階でぞ怒らるゝ。詞
や是非を理には立難し餘りせくな篤と聽け。其阿彌陀如來と惠心と遂に近付と云ふ沙汰を聞か
ず。釋迦に知らせ玉はぬ事を惠心がゆかで知るべきや。左れば佛の遺言に。我經の外正法あ
らば是天魔の説なりとしるし玉ふ。然れば惠心も汝も外道に非ずや。餘經餘論を見ず知らず。
小乗僅の鹿學よて近代の智識と。推參至極の辨口かな。蛙は口よりして吞れ。井の内の蛙て
そ大海を知らぬなれ。外道と知て生置かば佛法への不忠ならんと。飛掛れば満容ハ跡をも見す
して逃らるゝ笑止といふも愚なり。御前に有りし人々皆眩き叫きて。生て有りし時だにも持扱
ひし金平。况て死靈のとなれば若も障化やなさんかど。手に汗握り太刀抜き片唾を呑で居
る所に。武將は少も騒ぎ玉はぞ。扱潔し金平。尤斯こそ思ひしなり。此上は加茂の次郎が勘
當許すぞ。具して來れ早疾くとの玉へば。是は恨めしき御誰かな何に御赦免有難しとて。死
失玉ふ若君をいかで御供中さるべき。去乍ら若君の切ては死後の悦び。某逆も有難しと空泣し
てよろ居たりけれ。君聞名やれ兵庫の頭。譬へば布留那の辨を假り文珠と智恵にて偽るとて。
天下の武將に備はる身が暖に欺騙されふか。日外實驗せし二ツの首。元より腰首と知つたれ

共。改ためざるは爲宗が所存を感じゆゑにて有。詞に爲宗。義綱の首とて我に見しは。疑
ひも無く其方が一子竹若丸が首なるよな。實や人の親の習ひ五人十人有る子さへ。何れ愚は無
きものを。況てや世にも只一人を主の爲とて討たりし。心底を感ずれば涙は胸に迫りたれ共。
折こそあらめと今迄は。知らぬ振にて打過ぬ。簡程迄方々が忠義を盡す心ざし。返々も満足せ
り。思へば故無き事により。何に主の爲とて二八ふ足らで竹若が。身替に立心の内推負られ
て不便やと。御落涙ましますば御前に並居し人々も嗚咽返りて歎きけり。重ての御誰には何に
金平。爲宗親子が忠節此度勘當許さでは。聊無下に成るれば。早や次郎を連れて來れ金平承
り。詞。憚り乍ら某も御心底を推量り。元より夜中の事なれば最前より御供中。是に隠し奉ると
御手を引て出ければ。我君御臺を初めとし。上下一度に悦びの聲は暫く止ざりけり。扱爲宗
に宣ふは竹若に相後れ無便無く思ふべし。思案あれは奥に使ふ柏を養子に致すべし。則義綱に
娶合せ祝言せよと宣へば。是は有難しと爲宗は歎きの中の悦びを。御臺所もお使を金平爲宗兩
人へ。つとれ禮數々の御引出物給はりて。各打連歸らせ給ふ國土安全君長久。千歳をの
ぶる松の緑も榮行く御代こそ目出度けれ

金平法問評終

明治廿四年五月十七日印刷

明治廿四年五月十九日出版



新編大和文範第一冊
正價廿五錢

發行者 神田區宮本町五番地 早矢仕 民治

發行者 京橋區南大工町十一番地 中島 精一

印刷者 麴町區平川町五丁目三番地 加藤 錦之助

發行所 京橋區南大工町十一番地 富貴 館

發行所 神田區宮本町五番地 叢書 閣

上田屋支店 日本橋通一丁目 大倉書店

武藏屋 京橋區尾張町 東海堂

盛春堂 神田南神保町 松江堂

丸善書店 神田表神保町 中西屋

神田裏神保町

同 錦町

本郷元富士町

日本橋通三丁目